

自然カラーシリーズ

# 佐賀の蝶

西村謙一著



佐賀新聞社

## 自 序

わが国のアマチュア蝶愛好者の中には、非常に深い学識と経験を持っている方がたくさんおられる。私は蝶についての深い知識はなく、また標本を多く持っている採集家でもない。ましてや、プロの昆虫学者でもない。ただ、蝶が好きで、仕事の余暇に山野に蝶を追って楽しんでいるだけである。いっぽう、私は写真家ではなく、むしろ、人物や風景写真などはほとんど撮影しない。写真については全くの素人である。このような私が蝶の写真集を出版するなんて、身の程知らずもいいところである。

私は少年の日に受けた感動から、蝶の魅力の虜<sup>とら</sup>になった。野外で蝶をみるのが何よりの楽しみである。大自然の中に生きる、これらの素晴らしい蝶を眼で見るのと同じような姿で残しておきたい、という気持ちが私を蝶の撮影に走らせた動機である。

私は職業がら、手術所見や病態の写真撮影を積極的に行ってきた。これらの撮影の応用として、科学写真としての野外における蝶の姿を撮影するようになった。暗中摸索で蝶の撮影をスタートしてから、振り返ってみると20年以上も経った。私の作品も次第に増えてきた。

1992年1月に、佐賀県立博物館に蝶の写真を2、3提出したが、それをきっかけに「蝶のアルバム」と題した蝶の生態写真を、佐賀新聞に連載する機会を与えられた。写真を連載するようになって、多くの方々から問い合わせを頂いたり、私が出席する会合で「蝶のアルバム」が話題になったりした。こんなにたくさんの方々も蝶に関心を持っているとは、全く予期しないことであった。このようなことから佐賀県の蝶を主に、県外や外国の蝶を加えて、ここに単行本として出版することになった。

佐賀昆虫同好会会員、溝上誠司氏によると、1991年末までの佐賀県産の蝶の種類は迷蝶を加えて98種であるという。本書は、この中、69種の蝶の写真を掲げた。写真にない蝶についても、できるだけ、どこかで簡単に触れるよ

うに努力した。読者の方々が、本書を見られて、蝶を通じて大自然の姿に、さらに多くの関心をお持ち頂ければ私の喜びは大きい。

本書を編筆するに当たり、序文をお書き下さり、多くのご教示を頂いた岩手大学名誉教授・富士大学教授、岡野磨磋郎博士に深謝する。また、佐賀県の蝶について、ご教示を頂いた佐賀昆虫同好会会員、溝上誠司氏ならびに同会員、坂井文雄氏に厚くお礼を申し上げる。貴重な標本の撮影の機会を与えられ、本書に写真の掲載を許可された佐賀昆虫同好会会員、廣川典範氏のご好意に感謝する。本書出版に興味を示され、ご鞭撻頂いた佐賀昆虫同好会会長、古賀善十氏、同会員、市場利哉氏、白石保養院院長・九州緑化株式会社社長、緒方勝徳博士、佐賀県立病院好生館脳神経外科医長、前山隆太郎博士、松尾学園弘学館館長、古藤 浩氏、佐賀新聞社論説委員長、河村健太郎氏、同新聞社編集局報道部、宇都宮 忠氏に感謝の意を表す。さらに、本書出版の労をとられた佐賀新聞社出版部、松隈博志氏に謝意を表す。

(1993年4月30日)

# 佐賀の蝶

## もくじ

発刊によせて	3
自序	4
凡例	9
佐賀の蝶	

12-13	アオスジアゲハ
14-17	ミカドアゲハ
18-19	キアゲハ
20-21	ナミアゲハ (アゲハチョウ)
22-23	ジャコウアゲハ
24-25	オナガアゲハ
26-27	クロアゲハ
28-29	ナガサキアゲハ
30-33	モンキアゲハ
34-37	カラスアゲハ
38-39	モンシロチョウ
40-41	スジグロシロチョウ
42-43	ツマキチョウ
44-45	キチョウ
46-47	モンキチョウ
48-49	ウスキチョウ
50-51	ムラサキシジミ
52-53	ムラサキツバメ
54-55	ウラキンシジミ
56-57	キリシマミドリシジミ
58-59	トラフシジミ
60-61	コツバメ
62-63	ベニシジミ
64-65	ウラナミシジミ
66-67	ツバメシジミ
68-69	ヤマトシジミ
70-71	ルリシジミ
72-73	サツマシジミ
74-75	ウラキンシジミ
76-77	テングチョウ
78-79	カバマダラ
80-81	スジグロカバマダラ
82-83	アサギマダラ
84-85	クモガタヒョウモン
86-87	ミドリヒョウモン
88-89	メスグロヒョウモン
90-91	オオウラギンスジヒョウモン
92-95	ツマグロヒョウモン
96-97	イチモンジチョウ
98-99	コムスジ

100-101	ホシミスジ
102-103	サカハチチョウ
104-105	アオタテハモドキ
106-107	ヒメアカタテハ
108-109	アカタテハ
110-111	タテハモドキ
112-113	ルリタテハ
114-115	ヒオドシチョウ
116-117	キタテハ
118-119	メスアカムラサキ
120-123	コムラサキ
124-125	イシガケチョウ
126-127	スミナガシ
128-129	ゴマダラチョウ
130-131	ヒメウラナミジャンメ
132-133	ジャンメチョウ
134-135	ヒメジャンメ
136-137	クロヒカゲ
138-139	サトキマダラヒカゲ
140-141	クロコノマチョウ
142-143	ミヤマセセリ
144-145	ダイミョウセセリ
146-147	アオバセセリ
148-149	キマダラセセリ
150-151	コチャバネセセリ
152-153	チャバネセセリ
154-155	イチモンジセセリ
156-157	クロセセリ

## 県外・外国の蝶

160-161	ウスバシロチョウ
162-163	ヒメギフチョウ
164-165	タイガー・スローテール
166-167	シロオビアゲハ
168-169	エノシロチョウ
170-171	ヒメシロチョウ
172-173	スジボソヤマキチョウ
174-175	ヤマキチョウ
176-177	ツマベニチョウ
178-179	ベニモンシロチョウ
180-181	ウラナミアカシジミ
182-183	オナガシジミ
184-185	ジョウザンミドリシジミ
186-187	エノミドリシジミ
188-189	ミスジチョウ
190-191	オオミスジ
192-193	クジャクチョウ
194-195	キベリタテハ
196-199	オオムラサキ
200-201	キバネセセリ
202-203	ギンイチモンジセセリ

## 凡 例

1. 本書には佐賀県に産する蝶69種の写真を掲載した。なお、佐賀県に産しない蝶の写真も付加した。
2. 生態撮影は、エゾシロチョウを除いて、全て野外における撮影であり、飼育したものではない。
3. 標本の写真は、著者所蔵のもの以外は、所有者を明記した。
4. 佐賀県に産する蝶でも、佐賀県内で撮影したものばかりでなく、他県や外国で撮影したものもある。
5. 蝶の雌雄の相違、分布、出現時期、食草(食餌植物)、越冬態は努めて記すようにした。色彩、斑紋の記載は最小限に止めた。
6. 実物の蝶の大きさは、通常の個体の前羽の付け根から先端までの長さを、前羽の長さとして記した。
7. 学名は年号を省略して、略記した。
8. 次の文献を参照した。
  - 1) 井上 寛, 岡野磨瑛郎, 白水 隆, 杉 繁郎, 山本英穂: 原色昆虫大図鑑(第1巻), 2版, 北隆館, 1962。
  - 2) 白水 隆: 原色台湾蝶類大図鑑, 4版, 保育社, 1966。
  - 3) 小椋山賢二, 高瀬武徳, 藤岡知夫: カラー日本の蝶, 山と溪谷社, 1971。
  - 4) 小椋山賢二, 高瀬武徳, 藤岡知夫: カラー続日本の蝶, 山と溪谷社, 1972。
  - 5) 藤岡知夫: 検索図鑑 日本の蝶, 主婦と生活社, 1975。
  - 6) 福田晴夫, 浜 栄一, 葛谷 健, ほか: 原色日本蝶類生態図鑑(I), 保育社, 1982。
  - 7) 藤岡知夫, 大屋厚夫: 野外ハンドブック・2 蝶, 3版, 山と溪谷社, 1982。
  - 8) 福田晴夫, 浜 栄一, 葛谷 健, ほか: 原色日本蝶類生態図鑑(II), 保育社, 1983。
  - 9) 東 清二, 湊 和雄: 琉球の蝶, 新星図書出版, 1983。
  - 10) 埼玉昆虫談話会: 埼玉蝶の世界, 埼玉新聞社, 1984。
  - 11) 江島正郎, 溝上誠司, 高橋篤美: 佐賀県蝶類覚え書 佐賀の昆虫, No15, 393-440, 1984。
  - 12) クレンツォフ(白水 隆監修, 阿部光伸訳): 極東のチョウ, 文一総合出版, 1988。
  - 13) Higgins LG, Riley ND: A Field Guide to the Butterflies of Britain and Europe. Collins, London, 1970。
  - 14) Howarth TG: Colour Identification Guide to British Butterflies. Frederick Warne & Co Ltd, London, 1973。
  - 15) Goodden R: All Color Book of Butterflies. Octopus Books Ltd, London, 1973。
  - 16) Lekagul B, Askins K, Nabhitabhata J, Samruadkit A: Field Guide to the Butterflies of Thailand. Koruspha, Bangkok, 1977。
  - 17) Pyle RM: The Audubon Society Field Guide to North American Butterflies. Alfred A. Knopf Inc, New York, 1981。
  - 18) Yong HS: Malaysian Butterflies-An Introduction. 2nd Ed, Tropical Press Sdn Bhd, Kuala Lumpur, 1984。

## 採集記

■ 与那国島蝶採集記	206
■ 英国ケンブリッジの蝶	210
■ フロリダに蝶を追う	214
■ タイ国北部蝶採集記	220
■ タイ国北部にキシタアゲハを追う	224
■ 香港ビクトリア公園の蝶目撃・撮影記録	229
■ マレーシアの蝶(写真のみ)	232
■ グアテマラの蝶(写真のみ)	235

蝶の観察方法	158
--------	-----

外国の蝶	204
------	-----

野外における蝶の生態撮影	236
--------------	-----

松原に	238
-----	-----

50音別索引	240
--------	-----

故郷の幼友達に捧げる

## 佐賀県の蝶



## アオスジアゲハ

*Graphium sarpedon nipponum* Fruhstorfer

前羽の長さ：約45mm

1992年5月26日撮影（神埼郡三瀬村）

佐賀平野に春がきて、もう、冬の寒さは戻ることはない4月中旬ごろになると、ブルーの色が目立つアオスジアゲハがさっそうと現れる。

佐賀県ではどこでも普通に見られる蝶である。夏には、この蝶が集団で水を飲みに来ているのに会うこともある。

これらの水辺に集まるのはすべて雄である。幼虫はクスノキの葉を食べる。この蝶は南方系の蝶でインド、スリランカから、東南アジア、オーストラリア北東部まで広く分布する。

わが国では秋田県南部、岩手県南部が分布の北限。私はかつて盛岡市に住んだことがあったが、快適な東北の春に、なにか物足りないと感じていたが、それは長年見慣れてきたアオスジアゲハがいないためであった。

この蝶はあまり目立たないが、美しく気品のある蝶だと思う。とくに、あのブルーの色は、南国の春から夏にかけて空の色と完全にマッチしている。

佐賀昆虫同好会会員の針貝邦生氏は佐賀新聞1992年4月2日付の“読者ろんだん”に、佐賀県の「県蝶」を選ぶことを提案され、その候補として、ツマグロヒョウモンとともに、このアオスジアゲハを挙げておられる。

私も針貝氏の提案に大賛成である。私は「県蝶」の候補として迷うことなく、アオスジアゲハに投票する。

## ミカドアゲハ

*Graphium doson albidum* Wileman

前羽の長さ：約45mm

1990年4月29日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

小学校5年生のころであったと思う。蝶の名前が分かりだした昆虫少年であった私は、夏の暑い盛りに、ネットをもって高知公園で蝶を追っていた。少し疲れかけて休もうとした時に、私の目の前に一頭の蝶がゆっくり飛んできた。

どこにでも見られるアゲハチョウのようでもあるし、アオスジアゲハにも似ている。とにかく初めてみる蝶である。私は図鑑の蝶の写真を頭に描いた。

「ミカドアゲハだ」。そう叫ぶと同時に、私の心臓は早鐘のように高鳴り始めた。私はミカドアゲハが高知県の天然記念物であることを知っていたが、標本さえもまだ見たことはなかった。

こんな珍しい蝶が私の目の前にいる。蝶はゆっくり飛び、私の目の前約3メートルの草に止まろうとしている。近付いて上からネットをかぶせればいいものを、私はネットを横にふった。

一瞬のことであった。蝶は舞い上がって逃げていった。私は我を忘れて蝶が逃げた方向に走り蝶の姿を求めた。何回も何回も同じ場所を行ったり来たりした。

しかし、蝶は二度とその姿を見せなかった。翌日も、その次の日も毎日公園に通った。ついに、私は少年の日に再びミカドアゲハに会うことはなかった。それ以来、私はミカドアゲハにあこがれ続けた。

その後、ミカドアゲハに再会したのは、10年以上も後のことで、福岡市の九大構内である。しかし、私にとってこの蝶が珍蝶であることには変わりなかった。1980年4月に佐賀市にきてから、佐賀市内にミカドアゲハがいることを聞いたのは、その発生期も過ぎたころであっ



1989年7月17日撮影（佐賀市鍋島町延久）

蛹



幼虫



卵



た。翌年の1981年5月7日、佐賀昆虫同好会会員の坂井文雄氏に教えて頂いた佐賀市城内に行くと、トベラの花にミカドアゲハが飛来していた。これが佐賀県での同蝶との最初の出会いであった。

ミカドアゲハの幼虫は、オガタマノキ、タイワンオガタマノキ、タイサンボクなどを食べる。佐賀市内では数カ所発生地がある。同地では蝶は4月下旬から5月上旬にかけての期間と、6月下旬から7月上旬にかけて見られる。

1982年、鍋島町の自宅の庭に、ミカドアゲハの食樹植物であるオガタマノキとタイワンオガタマ、訪花植物であるトベラを植えた。夢に描いた“ミカドアゲハが舞う庭”を実現したいとの願いからである。毎年、発生時期になれば、ミカドアゲハの飛来を待ったが、1986年までは全く、その姿を見せなかった。1987年5月8日は、五月晴れの快適な日であった。12時31分、1頭のミカドアゲハが飛来した。羽の斑紋は青色調の個体であった。その日は、同蝶が次々に飛来した。その年の夏は、ここで羽化した個体も確認できた。1988年と1992年には、ミカドアゲハの出現を確認できなかったが、1989年、1990年、1991年には、発生時期に同蝶が飛来した。また、卵、幼虫、蛹も確認できた。長い間の夢であった“ミカドアゲハが舞う庭”が実現できたのである。



## キアゲハ

*Papilio machaon hippocrates* C. et R. Felder

前羽の長さ：約54mm

1988年9月11日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

日本で蝶といえば、多くのひとが、まず、頭に浮かべるのが黄色い大型のアゲハチョウか、モンシロチョウである。前者としては、わが国には、ナミアゲハとキアゲハの二種しか分布しない。

キアゲハは濃い黄色の地色に黒のしま模様の羽を持ち、後ろ羽には細長い尾状突起が一对ある。この蝶は全ヨーロッパ、アフリカ北西海岸からシベリア、ヒマラヤを経て、極東の中北部、さらに北米にも分布する。

わが国では屋久島以北の日本全土に産し、平地から高山地帯にまで生息する。成虫は明るい環境を好み、各種の花に飛来する。雄は山頂を占有する性質があり、縄ばりを持つ。

幼虫はニンジン、チクシゼリなどのセリ科の植物を食べる。また、ミカン科の植物を食べることがある。九州の低地では、年に3、4回発生するといわれている。春型は小さく夏型が大きい。

北米は広い。北米には、キアゲハと非常に似た種類の蝶が10種以上もいる。私は1969年秋、フロリダのタンパにアメリカ人の友人を訪問した。彼の家の近くに自然環境に恵まれた小さい公園があり、そこに蝶が次から次へと飛来していた。

そのとき採集した蝶の標本を今でも保存しているが、その中にキアゲハに近い種類の蝶が数頭ある。

## ナミアゲハ(アゲハチョウ)

*Papilio xuthus* Linné

前羽の長さ：約45mm

1984年5月20日撮影（佐賀郡大和町）

わが国で、もっとも普通のアゲハチョウである。北海道北部を除く日本全土に分布する。国外では朝鮮半島、アムール、中国本土、台湾、北ミャンマー、ルソン島、グアム島などに分布し、東アジアの特産種である。わが国では小型の春型が4月から5月にかけて出現し、大型の夏型は7月から10月にかけてみられる。平地から低山地域にみられる。キアゲハのように、標高の高い地域には棲息しない。

佐賀平野では、4月上旬に小型の白っぽい羽の個体が出現する。このアゲハをみると、もう、春の日が再び冬の日に戻ることがないと安心する。幼虫はキハダ、サンショウ、カラタチなどのミカン類の葉を食べる。成虫（蝶）は各種の花を訪れる。また、雄は高温期に湿地に下りて吸水する性質がある。サナギの状態越冬する。

わが国に古くからある蝶の文様の多くは、抽象化されており、種類の同定不能のものが多い。しかし、ナミアゲハが原型となったものもある。わが国の昆虫学は、江戸時代に始まるとされている。その頃までに、蝶を正確に写実したものはほとんどない。江戸中期の画家であった丸山応挙は、実に正確にナミアゲハを写実している。この図は東京国立博物館に保存されている。その図は今日の図鑑の絵として立派に通用する。ナミアゲハは古い時代から、もっとも日本人の眼にふれてきた蝶である。

## ジャコウアゲハ

*Byasa alcinous* Klug

前羽の長さ：約50mm

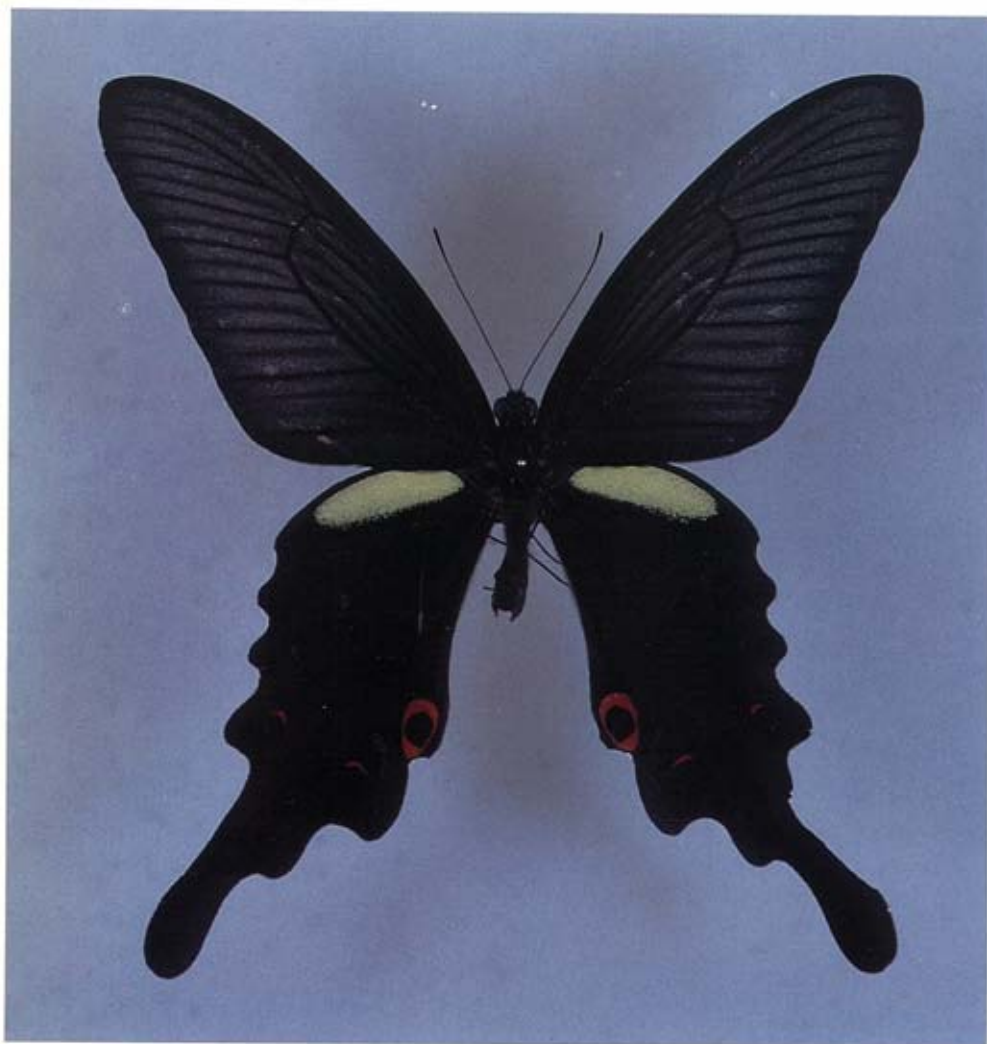
1993年5月17日撮影（神埼郡三瀬村）

本来黒いアゲハなのに、雌は黄灰色というのも、普通の黒いアゲハとは違った感じがする。それに加えて体の両側面に、赤色から黄色の毛があるのも他の黒いアゲハとは違う。地域によって亜種がある。夏型は春型より大型であるが、斑紋に季節的な変異は見られない。わが国では本州北端の青森県より、九州南端の鹿児島県に至る全土に分布する。国外では朝鮮半島、中国大陸、台湾に分布する。西南日本では4月頃より出現し、年3回発生する。ゆっくりと飛び花を訪れる。

もう、何十年も前になるが、台南のガランピーで始めてベニモンアゲハを見たとき、飛び方がジャコウアゲハに似たものだと思った。ジャコウアゲハの食草は、ウマノスズクサ科の植物である。幼虫は暗紫色で白色帯があり、肉棘状突起をもち、他のアゲハ類の幼虫とは一見して区別できる。

1992年6月26日、佐賀県神埼郡三瀬村のキャンプ場にてかけたとき、道の横端を急いで這っている幼虫がいた。特徴的は色彩と形から、ジャコウアゲハの終齢幼虫と分かった。早速、捕まえて持ってかえり、プラスチックの箱の中に割りばしを1本入れて、その中に幼虫を放した。翌朝には茶褐色の綺麗な蛹となった。7月13日には雄のジャコウアゲハが羽化した。窓から放してやると、雨の中を元気に飛んで行った。

## オナガアゲハ

*Papilio macilentus* Janson

前羽の長さ：約50mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1991年7月7日、大分県九重山黒岳で採集)

羽の形のスマートな黒いアゲハである。ジャコウアゲハに似ているが、ジャコウアゲハには胸部と腹部の側面に、赤色または黄色の毛が生えているが、オナガアゲハには、それが無い点で容易に区別できる。クロアゲハにも似ているが、クロアゲハより、羽の形がほっそりしており、しっぽ（尾状突起）が長い。

オナガアゲハの雌雄の区別も簡単で、雄は後羽の前縁にはっきりした黄白紋があるが、雌にはこれがない。この蝶には春型と夏型があるが、夏型のほうがずっと大きい。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国本土に産する。

幼虫はコクサギを好むが、ミカン科のカラタチ、サンショウなども食べる。蛹で越冬する。本州中部以北では平地にもいるらしいが、暖地では山地性の蝶である。アゲハ属の蝶としては飛び方が弱く、山間の溪流付近などを飛び花を訪れる。

佐賀県内からは佐賀市や鳥栖市をはじめ各地から報告があるが、最近では佐賀県内の各地で激減し、稀少種の一つであるという。ところが、1993年5月7日に神埼郡三瀬村でオナガアゲハの雄1頭を捕獲したが、新鮮な個体が次々に飛来して、ツツジの花を訪花した。同地では、この蝶は少なくないと思われる。

## クロアゲハ

*Papilio protenor demetrius* Cramer

前羽の長さ：約60mm

1993年5月25日撮影（神埼郡三瀬村）

わが国の昆虫少年は、似通った道をたどるのではないだろうか。私はときどき、そう思う。蝶に魅せられ、自分で標本を集めようとする、まず、家の周りの蝶から集めることになる。それは、やはり、もっとも多い蝶からということになる。

モンシロチョウ、キチョウ、ベニシジミ、アゲハチョウ（ナミアゲハ）などを採集してゆくうちに、自分が見たことがある大きな、黒いアゲハを捕ってみたいと思うようになる。初めて自分がかまえた黒い蝶が、網の中でバタバタしている瞬間の感激を忘れる昆虫少年はいない。関東以南であれば、この蝶はクロアゲハのことが多いであろう。

クロアゲハの雄の羽表は、ほとんど真っ黒であるが、雌は前羽が淡色で、羽表に沿う黒条がよく見える。また、雄では後羽前縁に黄白条があるが、雌にはそれがない。本州、四国、九州（南西諸島を含む）に分布するが、東北北部ではまれである。国外では台湾、中国、トンキン、ミャンマーより、西北ヒマラヤにかけて分布する。わが国西南部では、年3回発生する。春型は夏型より小型であるが、斑紋には著しい差はない。幼虫はユズ、ウンシュウミカン、カラタチ、サンショウなどのミカン科の植物を食べる。蛹で越冬する。日本産のクロアゲハは有尾型であるが、台湾では無尾型が普通である。

## ナガサキアゲハ

*Papilio memnon thunbergii* von Siebold

前羽の長さ：約65mm

1977年7月2日撮影（熊本市）



1977年7月2日撮影（熊本市）

尾（尾状特記）がない大きなアゲハチョウである。雄は黒い蝶であるが、雌には前羽の基部に橙赤斑があり、後羽には白斑がある。この雌の白斑の発達は、南方産のものが強く、奄美大島では前羽まで白色部が及んだ個体が見られる。東洋熱帯に広く分布し、外国には有尾型のものもある。わが国では本州の近畿以南、四国、九州に分布する。九州では通常、年3回発生。佐賀県では普通種で、春から秋までみられる。

戦後、昭和天皇が九州ご巡行のとき、飛んでいる蝶をご覧になって、“あ、ナガサキアゲハだ”と仰せになったと新聞記事に出ていた。それを読んで、天皇陛下は、さすが生物学者だと感銘を受けたことを覚えている。幼虫の主な食草はミカン類である。蛹で越冬する。

少年の日、蝶の名前も分かりだした頃、高知公園に採集に行くと、大きな黒いアゲハに時折出会った。悠々と飛んでくるが、捕まえない。その年の夏休みが終わって、小学校で昆虫採集展示会があったが、2、3の生徒の標本箱にこの蝶があった。その頃、平山修次郎著の「原色昆虫図鑑」をもっていたが、その中にこの蝶はない。これがナガサキアゲハだと知ったのは、しばらく経ってからである。

熊本県に転居すると、借家の庭にザボンの木があった。毎年、たくさんのナガサキアゲハの姿がみられた。なかには、白紋の発達した美しい個体も見られた。この蝶は九州全域に分布し、各地に普通にみられる。ナガサキアゲハは、九州を代表する蝶として推薦したい。

## モンキアゲハ

*Papilio helenus nicconicolens* Butler

前羽の長さ：約65mm

1980年5月11日撮影（小城郡小城市）

後羽に鮮やかな白い紋がある。大型の見事な黒い蝶である。雌雄の斑紋は、ほとんど同じであるが、雌は後羽外縁部の赤い弦月紋が雄より発達する。後羽の白い紋の大きさや形には、変異がある。国外では台湾、中国本土から西はインド、東はチモールにかけての東洋熱帯に広く分布する。国内では神奈川県以南の本州西半、四国、九州、南西諸島に多くみられる。九州では、通常、年2回発生する。第1化の春型は5～6月に、夏型の第2化は7～8月に発生する。

幼虫の主な食餌植物は、キハダ、カラスサンショウなどのミカン科の植物である。佐賀県には平地・山地に普通に見られる。1980年4月に私は佐賀市に移転したが、佐賀県にモンキアゲハが多いのに驚いた。とくに、その年は多かったようである。

モンキアゲハには少年の頃の苦い思い出が残っている。

私とO君、K君の3人の昆虫少年は、高知公園の梅の段に採集にきた。梅の木の下には、美しいオニユリが咲き乱れている。真黒い大きな羽に、くっきりとした白い紋のあるモンキアゲハが飛んできて、花壇の中にあるオニユリに止まって蜜を吸いだした。夢にまでみる蝶だ。もちろん、ライバルのO君も捕っていない。私は垣根を越えて花壇の中に入ろうとした瞬間、O君が私の腕をつかまえた。私は大きな声で言った。

「僕が先にみつけたから、捕るよ」

「なんぼ君がみつけても、公園の花壇に入ったらいかんよ、学校で習っただろう」

そんな言葉は聞かず、私はO君を振り払って、垣根を飛び越え、網



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
 (1990年5月11日, 武雄市御船山で採集)

で蝶をユリの花もろとも上からかぶせてしまった。美しいユリの花は、ばらばらと散った。次の瞬間、私の網の中で、大きな蝶は、ばたばたしていた。はやる心で、私は蝶を三角紙に包んで、O君の目の前に突きつけてみせた。O君は私をにらみつけている。「ざまみやがれ、今日こそ、目の前でO君の捕れなかった蝶を捕ったのだ」と思って私は愉快でたまらなかった。

「入っていかな所に入って蝶を捕るのは、誰でもできらあね。そんな悪い奴とは採集しないから」

と言って、O君は怒って帰ってしまった。その夜は嬉しくて、嬉しくて眠れなかった。

しかし、そのうちに、O君の言った言葉が暗雲となって襲ってきた。O君と堂々と競争して、勝ったわけではないのだ。私は起き上がって蝶を出してみた。真っ黒い見事な羽に、くっきりと白斑が入ったモンキアゲハが三角紙の中に取っていた。初めて手に入れたモンキアゲハは、新鮮で完全なものであったが、まだ、私のものではないような気がするのであった。



# カラスアゲハ

*Papilio bianor dehaanii* C. et R. Felder



前羽の長さ：約60mm

1975年8月9日撮影（盛岡市北山）



1980年7月25日撮影（伊万里市）



1992年8月7日撮影（神奈川県三瀬村）

## ▼ミヤマカラスアゲハ

前羽の長さ：約45mm 1991年4月30日（佐賀県経ヶ岳で採集）  
佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本

真っ黒い髪のことを、「髪はカラスのぬれ羽色」という。しかし、カラスアゲハの羽の色は真っ黒ではない。黒地に藍緑色の鱗粉をふりまいたような美しい羽である。カラスアゲハという名前は、むしろクロアゲハにふさわしいと思う。そんなに美しいアゲハチョウである。

カラスアゲハは、私が少年の日に、あこがれ続けた蝶の一種である。この蝶は日本全国の山地、平地にいるが、佐賀県では山地や山ろくに多く、平地では少ない。国外ではサハリン、朝鮮半島、中国東部から、台湾、中国、トンキン、北ミャンマーにかけて産し、その分布は広い。

日本西南部では春型は4～5月、夏型は7～8月に発生する。幼虫はコクサギを好み、カラスザンショウ、キハダなどのミカン科植物を食べる。成虫はアザミ類やツツジ類の花に飛来する。

山の林道などに次々に個体が飛来する蝶道をつくる性質がある。雄は川原などに水を飲みに来る。カラスアゲハに似た蝶に、ミヤマカラスアゲハがいる。ミヤマとは深山の意味であるが、必ずしも山奥にいるわけではない。しかし、関東以南では平地には極めてまれである。

ミヤマカラスアゲハは、カラスアゲハよりもさらに美しい。両種は混生し、自然界で雑交していた例も知られている。

## モンシロチョウ

*Pieris rapae crucivora* Boisduval

前羽の長さ：約30mm

1992年5月23日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

からころも  
唐衣着つたなれにし妻しあれば、

はるばる来ぬる旅をしぞ思う

伊勢物語

私は旅をしたとき、まず、その蝶を見る。自宅の周囲に全く見ない蝶がいると“遠い所に来た”という気分になる。逆に、自宅付近に普通にいた蝶を見たならば、地理的にはどんな遠い所に来ていても、その感じはなくなってしまう。

モンシロチョウは、ヨーロッパ大陸をはじめ、世界各地に広く分布する。私は、北米でも英国でもモンシロチョウに出会って、がっかりしたことを覚えている。モンシロチョウの原産地は地中海地方といわれ、食草のキャベツに付いて西回り、東回りで世界各地に広がったとされている。

江戸時代の終わり頃には、モンシロチョウが日本にいたことが当時の記録や図、あるいは残された標本などから確認されている。それでは、モンシロチョウはいつ日本に来たのだろうか。日本列島には農耕文化とともに、アジア大陸から渡来したという説がある。そうすると、吉野ヶ里の人々は、モンシロチョウを見たであろうか？これは興味ある問題である。さて、弥生の昔から現代に戻ろう。

紋白蝶（モンシロ）の花なき芝の海に出づ —— 耕雲

ウインブルドン九州テニスコートを作られた緒方勝徳（耕雲）博士の句である。テニスコート発足当時に、購入された六千坪の土地に1頭のモンシロチョウが飛んできた。それを見て、博士は自らをモンシロチョウにたとえて、事業家の心境を詠まれた。今日の世界一のローンテニスコート誕生の秘話である。

## スジグロシロチョウ

*Pieris melete* Ménétriès

前羽の長さ：約30mm

1992年6月28日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

飛んでいるのを見たと、モンシロチョウによく似ている。モンシロチョウは菜の花畑などの明るい場所に多いが、この蝶は樹林などの日陰を好むようである。また、大きいモンシロチョウだなあと見るとよく見ると、スジグロシロチョウである。羽脈が黒いので、モンシロチョウとは容易に区別できる。

雌雄によって、また、季節型によって斑紋は違ってくる。雄は春型、夏型ともに羽表は雌に比べて白っぽい。雌雄ともに、春型の裏面の後羽の羽脈は太く黒いが、夏型のは黒くないなどの相違がある。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。南西諸島には産しない。国外では朝鮮半島、ウスリー、アムールに分布する。春型は関東以南では、モンシロチョウとほとんど同時期に、3月下旬から4月上旬にかけて現れる。夏型は5月中・下旬から出現し、以後、初秋まで発生を繰り返す。

佐賀県では、どこでも見られる普通種である。幼虫はアブラナ科の植物を食べる。蛹で越冬する。スジグロシロチョウに非常によく似ているのは、エゾスジグロシロチョウである。両種の鑑別は、個体によっては非常に困難なものもある。エゾスジグロシロチョウは、佐賀県では、その産地であった三養基郡基山では絶滅したらしく、現在、加唐島、馬渡島、向島の3島にのみ棲息しているという。

## ツマキチョウ

*Anthocaris scolymus* Butler

前羽の長さ：約24mm

1988年5月5日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1984年5月6日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

佐賀地方に桜の花が咲くころになると、白い蝶が飛び交うようになる。モンシロチョウが多いが、よく見ると、モンシロチョウよりも、やや小型で、よわよわしく飛ぶ白い蝶がいる。

追っかけて止まったところをみると、なんと羽の先がだいたい色になっており、モンシロチョウとは全然ちがう。これがツマキチョウである。幼虫はタネツケバナ、イヌガラシなどを食べる。

実に可憐な蝶で、春の乙女といったところである。しかし、だいたい色があるのは雄で、雌にはだいたい色の部分がない。私はこの蝶をみると、なぜか万葉集の次の歌を思い浮かべる。

春の園紅匂う桃の花 下照る道に出で立つ乙女 大伴家持

小学校6年生になったばかりだったころ、私は高知市の小学校から九州の学校に転校してきた。転校した小学校理科室にある蝶の標本の中に、ツマキチョウがあった。

初めて見る蝶である。さらに採集場所も記されてあった。この蝶は高知市内でみることはなかった。あこがれ続けた蝶である。

私は早速、地図に示された場所に採集に行った。感激して体全体が硬直したような状態になり、蝶を網の中に入れた。これが私とツマキチョウとの最初の出会いであった。

## キチョウ

*Eurema hecabe mandarina* de l' Orza

前羽の長さ：約23mm

1992年10月13日撮影（神奈川県三瀬村）

九州では、最も普通の黄色の蝶である。北海道には分布せず、東北北部では、まれである。国外ではエチオピア区、全インド、オーストラリア区に広く分布する。幼虫はマメ科のハギ類を食草とする。早春に出現するものは、越冬した個体である。第1化は、5月上旬から6月上旬にかけて出現し、新鮮な個体である。以後、発生を繰り返し晩秋におよぶ。晩秋に発生したものだけが成虫で越冬する。佐賀地方では、冬になっても暖かい日には飛んでいるのが見られる。

キチョウは、私にとって非常に身近な蝶といえる。それは、この蝶と一緒に過ごす時間があるからである。佐賀市にあるウインブルドン九州テニスクラブのコートは、世界一の天然芝のテニスコートである。美しい緑の芝生と、その管理は他の追隨を許さない。このコートでプレーしているときに、飛んでくるのがキチョウである。テニスコートに出てきたキチョウは、打ち合っているボールを追っかける。ボールが黄色なので、仲間の蝶と誤認しての行動であろう。緑の芝生の上を、ボールを追って飛び回るキチョウの姿は、絵になっている。しかし、これは春から秋にかけての光景である。冬はどうか。

テニスクラブのオーナーである緒方勝徳（耕雲）博士は、私に次の2句を送って下さった。さすがに俳人の眼は鋭い。

冬の蝶テニスネットが越せぬまま  
芝眠る蝶の果ており昼の月

## モンキチョウ

*Colias erate poliographus* Motshulsky

前羽の長さ：約27mm

1985年5月29日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

雄の羽の地色は黄色であるが、雌には地色が黄色のものと、白色のものがある。斑紋は雌雄同様である。南ロシアからヒマラヤ、インド高地、中国全土、台湾、朝鮮半島にわたり、広く分布する。わが国では北海道から九州まで普通に見られる蝶である。3～4月から春型が発生し、5月下旬から6月に夏型が出現し、以後、秋まで発生を繰り返す。幼虫の食草は、コマツナギ、ミヤコグサなどのマメ科の植物である。成虫は日当たりのよい草地などに多く、花に集まる。

この蝶は、かつて成虫で越冬すると思われ、オツネンチョウという別名まで貰っていたが、成虫では越冬せず、幼虫で越冬することが明らかになった。

米国には、橙色を帯びたモンキチョウがいる。

1969年、私は妻と二人で、クリーブランドを訪問した。山地を歩いていると、目の前にこのモンキチョウがきた。初めてみる蝶である。私は夢中になって、手で捕まえようと走りだした。妻も一緒になって走り、自分の上着を脱いで、それで蝶を捕るようと私に渡してくれた。二人は走って上着でやっと捕まえた。その時、私は3、4人のアメリカ人に取り囲まれた。私が妻の上着をもって、妻と走っているのを車の中から見ていた人々に、なんと、私は逃げる女性を襲う追剥、強盗に間違えられたのである。

## ウスキチョウ

*Catopsilia pomona* Fabricius

前羽の長さ：約36mm

1982年8月1日撮影（沖縄県石垣島）

東洋熱帯地方の国に行けば、よく見かける普通の蝶である。色彩・斑紋が雄雌でかなり違う。雄の羽の地色は白色で、前羽、後羽ともに基部半分が黄色である。前羽の先端部と外縁部が黒色で縁取られている。

雌の羽表の地色は、黄色～黄白色で基部半分が濃い。先端部と外縁部の黒色は幅が広い。裏面の前羽に1個、後羽に2個の銀色の紋がある個体と、銀紋が全くない個体がある。前者は、ギンモンウスキチョウと呼ばれ、後者は、ムモンウスキチョウと名付けられ別種とされていた。しかし、両者の間に交尾器に差がなく、両者が雑交して中間型を生じることは古くから知られている。現在では、両者は同一種で、銀紋型、無紋型とされている。

西はスリランカ、インドから、東はオーストラリア、ソロモン群島に至る広大地域に分布する。わが国では八重山諸島が安定した土着北限とされている。沖縄、奄美諸島では、年によっては越冬固体も見られるが、移住固体が主であるという。石垣島では、2～3月は銀紋型が多く、6月には無紋型が多いという。幼虫はタガヤサン、ナンバンサイカチ、ハネセンナなどを食べる。

関東以南の本州、四国、九州に迷蝶としての記録が多い。佐賀市からも報告があり、その他、西松浦郡、東松浦郡、唐津市などから迷蝶として報告がある。



## ムラサキシジミ

*Narathura japonica* Murray

前羽の長さ：約19mm

1987年11月8日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

羽の裏は茶褐色であるが、表は黒帯に縁取られた美しい紫色の羽をもつシジミチョウである。本州西南部、四国、九州に分布する暖地性の蝶である。

これらの地域では普通種であるが、北へ行くに従ってまれになる。宮城県仙台市が分布の北限とされている。国外では朝鮮半島南部、台湾に分布する。成虫で越冬した個体が春に産卵する。

これらの卵からかえった幼虫は、九州では5月上旬から6月上旬にかけて成虫となる。その後、発生を繰り返す、晩秋まで成虫が見られる。蝶は木立内やその付近に多く、畑や草原では見られない。夏には羽をたたんでとまり、なかなか美しい紫色の羽の表を見せてくれない。秋が深くなると羽を開いて日光浴をするようになる。

幼虫はアラカシ、アカガシなどのカシ類を食べる。私とムラサキシジミの出会いは、シジミといえば、まだヤマトシジミやルリシジミしか知らなかった、少年のころである。

高知市の北山に採集に行った時、カシの木々の間にいるムラサキシジミに遭遇して、何ときれいな紫色の蝶がいるものだと感じたことを覚えている。

ムラサキシジミとよく似た蝶に、ルーミスシジミがいる。この蝶は、わが国では関東地方以南の暖地に産するが、ムラサキシジミと違い、その分布は局所的で、佐賀県からは知られていない。

## ムラサキツバメ

*Narathura bazalus turbata* Butler

前羽の長さ：約22mm

1988年10月8日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

雄の羽の表面は暗紫色、ほぼ全面に暗紫色の光沢がある。雌の羽の表は黒褐色の部分が多いが、前羽の基部は美しい紫色である。雌雄ともに、後羽には尻尾（尾状突起）がある。

雌雄の羽の裏面の地色は褐色で、地色よりやや濃色の斑紋<sup>はんもん</sup>が散在する。わが国では九州、四国に分布する。佐賀県では珍しい蝶ではないが、平野部のどこでも見られるものでもない。

私が佐賀県内で最初に見たのは、佐賀医大の構内であった。国外では台湾から西はヒマラヤ、南はジャワまで分布する。わが国では幼虫はマテバシイ、シリブカガシなどのブナ科植物を食べる。幼虫で冬を越す。私が少年のころ、高知市の中等学校の生物の先生と親しくなり、ある秋も深まった日に、初めて山に採集につれて行っていただいた。

驚いたことに、何十頭、いや何百頭という数のムラサキツバメの集団に出会った。採集した後で、塩をふりかけた握り飯を頂いたが、そのおいしかったことは忘れられない。先生は、よく蝶を追っかけて谷に落ちる少年が多いと話された。

虫の魅力の虜<sup>とりこ</sup>になり、学業がおろそかになるということである。先生は私が昆虫少年として、深入りしないようにと抑制された。そのこともあって、私は人並みに学業を全うした。このようなわけで、ムラサキツバメは、私の人生と深いかわりをもつ蝶となった。

## ウラキンシジミ

*Ussuriana stygiana* Butler

前羽の長さ：約19mm

1975年8月10日撮影（岩手県下閉伊郡川井村）

文字通り羽裏が黄金色の蝶である。雌雄の斑紋は、ほとんど同様であるが、雌の裏面の色彩は、雄に比べてやや明るい。裏面の色彩は地理的変異があり、北海道、東北地方北部のものは明るく、暖地のものは黒っぽくなる。また、遺伝的変異も知られている。北海道、本州、四国、九州に分布する日本特産種で、国外からは知られていない。

暖地でも、低山地に産する所もあるが、通常は、かなりの高山地帯に棲息する。年1回の発生で、低山地帯では、6月に発生するが、7月に発生するところが多い。寒冷地では8月に発生するところもある。広葉樹林の中や谷川のほとりに棲息することが多い。日中には活動しないで日陰に静止して、夕暮れ時になって活発に樹上を飛び回る。幼虫の食餌植物はトネリコ類である。卵の状態越冬する。

ウラキンシジミは美しい蝶で、その産地が限られている珍蝶の一種で、蝶愛好家の憧れの的である。この蝶は佐賀県では、藤津郡多良岳からのみ知られている。同地には、現在、少数のみ棲息しているという。絶滅が心配されている。

この蝶と私の最初の出会いは、岡野磨磋郎岩手大学教授のご案内で、1975年、岩手県岩手山山麓に採集に行った時である。眼の前に、新鮮なウラキンシジミがいた。その時は撮影を忘れて夢中で網を振った。

# キリシマミドリシジミ

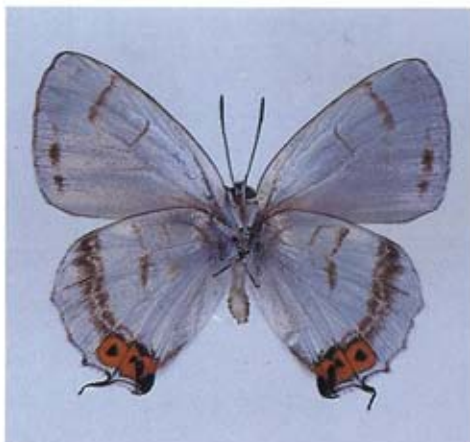
*Chrysozephyrus ataxus kirishimaensis* Okajima

雄表 1985年4月25日(羽化)



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(神埼郡脊振山で採卵)

雄裏 1985年4月28日(羽化)



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(神埼郡脊振山で採卵)

雌表 1985年4月25日(羽化)



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵  
(神埼郡脊振山で採卵)  
前羽の長さ：約20mm

雌裏 1985年4月28日(羽化)



佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵  
(神埼郡脊振山で採卵)

ミドリシジミと名が付く小さい蝶は、クロミドリシジミを除けば、雌の羽の表面は黒色で、雄の羽の表面は種類によって金緑色、青緑色あるいは青色に光る。まさに、蝶の仲間の宝石である。ミドリシジミの種類が谷川の樹上高く太陽の光を受けて、きらきら光りながら飛び交う姿は自然の美の極致であろう。ミドリシジミの仲間は似たようなものが多く、種類の判定は非常に難しいものがある。

ミドリシジミの仲間は佐賀県では少なく、キリシマミドリシジミとフジミドリシジミを産するにすぎない。キリシマミドリシジミは、ミドリシジミの仲間の中でも、もっとも美しい種類のひとつである。雄の羽表は金属様黄緑色に輝く。雌の羽表の地色は黒褐色で前羽に大きな青色斑がある。雄の裏面は銀白色、雌の裏面は茶褐色で、裏面の色彩・斑紋は雌雄で全く異なる。本州、四国、九州に分布する。屋久島産のものは別亜種となる。

九州には産地が多く知られているが、非常に珍しい蝶で蝶採集家の憧れの的である。国外では中国西部、ミャンマー北部から西北ヒマラヤに到る地域に分布する。年1回の発生で7～8月に出現する。夕方に群をなして飛び交う性質は全くない。幼虫の食草はアカガシ。卵で越冬する。

## トラフシジミ

*Rapala arata* Bremer

前羽の長さ：約17mm

1993年4月26日撮影（神埼郡三瀬村）

羽表は、にぶい青色で羽裏には独特の縞模様がある。色彩・斑紋は雌雄ほとんど同様であるが、雄の後羽の前縁の近くに、光沢の無い斑紋がある。雌には、それが無いので雌雄を区別できる。

季節による差ははっきりしており、春型は裏面の地色が白く、夏型は褐色である。しかし、国内での地理的変異は見られない。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では中国東北部、アムールに産する。北海道や本州の寒冷地では、6～7月にかけて年1回春型のみ発生する。暖地では、4～5月に春型が発生、6月下旬～8月に夏型が発生する。幼虫の食餌植物は、フジ、クズなどのマメ科、バラ科、その他の植物の花、蕾、実を食べる。幼虫は孳猛で、何匹かの幼虫を飼育すると、共食いをする性質がある。蛹の状態越冬する。成虫は活発に飛び、花を訪れることが多い。

トラフシジミは、佐賀県各地から採集されているが、あまり個体数は多くない。通常、市街地では見られない。私は、少年の日に、高知市の北山で、この蝶によく出会っていたが、佐賀県では神埼郡三瀬村で、始めて春型に遭遇した。診療所の隣家の庭で数頭以上目撃した。佐賀市内では、目撃したことはないが、佐賀昆虫同好会員の針貝邦生氏が、1992年に佐賀医大構内で棲息を確認された。

# コツバメ

*Ahlbergia ferrea* Butler



前羽の長さ：約15mm

1976年5月5日撮影（岩手県盛岡市岩山）

もっとも早い時期に、羽化した新鮮な個体が出現する蝶である。春まだ浅き3月、若草が萌え出る前後に、ものすごい速さで飛ぶ小さい蝶に出会うことがある。これがコツバメである。飛ぶ距離は短く、近くに止まる。

羽の裏面は茶褐色で地味である。表面は、黒色の部分に囲まれた青色で、この青色部分が雌が雄より広い。地理的変異は知られていない。北海道、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島に産する。九州では、3月中旬から4月上旬に成虫が出現するが、北海道の山地では、5、6月に出現するという。幼虫は晩春に蛹になり、夏秋冬をそのまま蛹で過ごして、翌春羽化する。幼虫は、スイカズラ科のガマズミ、ツツジ科のキリシマツツジ、アセビ、シャクナゲなどを食べる。

私は、高知、熊本、福岡、岩手でコツバメをよく見かけていたが、1980年から佐賀市に住んで以来、まだ佐賀県でこの蝶をみたことがない。1992年春にも、神埼郡三瀬村で積極的に探したが、とうとう発見することができなかった。佐賀昆虫同好会員の調査では、佐賀市を初め県内各所から、この蝶の採集記録がある。同会員 溝上誠司氏によると、コツバメは1980年頃から減少し始め、現在では佐賀県産蝶類の稀少種の中の一つであるという。

## ベニシジミ

*Lycaena phlaeas daimio* Seitz

前羽の長さ：約15mm

1975年7月22日撮影（岩手県盛岡市大志田）



1993年4月27日撮影（神埼郡三瀬村）

シジミ（蛭）とは、本来、淡水に住むシジミガイのことである。蝶のシジミという名は、その大きさから名付けられたものと思う。ベニシジミはヨーロッパ、北アフリカ、アジアの温帯、北米の東部に分布する。

わが国では北海道から九州まで分布する。都会の家の庭、堤防、農道、山道などの、平地、山地に見られる普通種である。4月から晩秋までその姿が見られる。花に飛来し、朱紅色の美しい羽を半開きにして止まる。

かなり近付いても逃げず、そのかれんな姿をはっきり見ることができる。春に出現する個体は、朱紅色が鮮やかであるが、夏型は黒色が強くなる。特に、雄では黒一色に近くなった個体が見られることがある。幼虫はギシギシ、スイバなどを食べる。

ベニシジミよりさらに大型の蝶で、オオベニシジミとも呼ぶにふさわしい種類が、西ヨーロッパに産する。この蝶は、英国では、ハンチントン州やケンブリッジ州の湿地帯や沼地にいたが、多くの産地で絶滅した。

現在、ハンチントン州の限られた場所で、かろうじて生きのびている状態である。ケンブリッジ滞在中、隣家に住む熱心なアマチュア蛾研究者が、この蝶の生息場所につれて行ってくれると言ったが、私の都合で機会を逃した。今思えば実に残念であった。

## ウラナミシジミ

*Lampides boeticus* Linné

前羽の長さ：約16mm

1988年11月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1988年11月7日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

その名が示すように、羽の裏面には波の模様があるシジミチョウである。裏面では雌雄の区別はできないが、表面では、かなりの差があり、簡単に区別できる。雄の羽表には特殊の長毛があるが、雌には長毛がない。

南欧、アフリカ、アジア南部の温暖地から、スンダ列島、オーストラリアにまで広く分布する。しかし、地理的変異は知られていない。わが国では関東以南に普通に見られる。

寒冷地ではまれであるが、それでも北海道で発見された年もある。この蝶は、夏から晩秋にかけて、わが国の分布地に普通に見られるが、温暖な地域以外では、越冬できず死滅してしまう。平地に多いが、高山の山頂でも見られる。

佐賀県では、夏から晩秋にかけて、どこにでも見られる普通の蝶である。この蝶は、春になって越冬地から、世代を繰り返しながら北上する。房総半島に発生した個体が北上し、東京に現れる蝶が三代目ぐらいといわれている。幼虫は、栽培されたフジマメなどマメ類のつぼみや実を好んで食べる。

わが国の本土ではウラナミシジミに似た確実な土着種はいないが、屋久島以南の島々には、アマミウラナミシジミがいる。この蝶は、奄美諸島ではもっとも普通の種である。

九州本島でも、大隅半島南端のの佐多岬では比較的普通に見られるという。また、八重山諸島にはルリウラナミシジミが分布している。



## ツバメシジミ

*Everes argiades hellotia* Ménétrières

前羽の長さ：約15mm

1981年6月15日撮影（佐賀市鍋島町）

庭地や草むらなど、どこにでもいるシジミチョウである。近寄ってみると可憐な蝶である。まさに、路傍の草花といったところであろう。雄の羽表は藍紫色で、黒色で細く縁取られている。雌の羽表は黒褐色、裏羽の色彩・斑紋は雌雄同じである。後羽には短い尾（尾状突起）があり、付け根には美しい赤色の部分がある。季節的変異や個体変異があり、とくに裏面の斑紋の変化が多い。

南西諸島を除く日本全土に分布する。国外では朝鮮半島、中国よりヨーロッパに至るユーラシア大陸の北部に広く分布する。暖地では、3月から出現し、晩秋まで年数回の発生を繰り返す。幼虫は、ハギなどのマメ科植物の新芽、花蕾、実などを食べる。

本種に非常に似ているのが、台湾ツバメシジミである。この蝶は台湾、中国南部、タイなどの東洋熱帯に広く分布する。わが国では本州、四国、九州に産するが局地的である。佐賀県からは小城郡小城町、武雄市、唐津市、その他の地域から見つかっている。

クロツバメシジミは同じ属の蝶ではないが、やはり、ツバメシジミに似ている。本州、四国、九州に分布するが珍しい種である。佐賀県からは北部の島々と、その対岸にのみ産する。

## ヤマトシジミ

*Zizeeria maha argia* Ménétriès

前羽の長さ：約15mm

1975年7月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）

庭の隅や道端に住んでいる小さい蝶である。雄の羽表は青藍色で、黒い縁取りがある。雌の羽表の地色は、夏型では黒色であるが、春型では青藍色鱗がみられる。雌雄ともに羽表がとくに美しいというわけではなく、羽裏も灰白色～暗灰色で目立たない蝶である。春型、夏型、秋型があり、一般に春型が大きい。本州東北地方から奄美諸島までに分布する。わが国各地に、もっとも普通のシジミチョウの1種である。

その分布北限は岩手県田野畑村とされている。国外では朝鮮半島中部以南、台湾、中国、ミャンマー、インド、中近東にまで分布する。九州では春型は4月から出現し、夏型は6月から出現する。以後、晩秋まで連続的に発生を繰り返す。

ルリシジミのように、上空高く飛ぶことはなく、常に地上低く飛び、カタバミその他の草花に飛来する。幼虫の食草はカタバミ、幼虫で越冬する。

本種によく似た蝶で、シルビアシジミがいる。本種は本州、四国、九州に分布する。シルビアシジミはヤマトシジミと違って、どこにでもいる種類でなく、産地が限局される。佐賀県では北部の島々と、その対岸にシルビアシジミの産地があり、唐津市や呼子町から報告がある。幼虫はマメ科のミヤコグサを食べる。

## ルリシジミ

*Celastrina argiolus ladonides* de l' Orza

前羽の長さ：約15mm

1993年4月2日撮影（神埼郡三瀬村）

オオルリシジミ

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1992年4月7日、藤津郡多良岳で採集)

前羽の長さ：約20mm

1970年5月14日採集  
(熊本県阿蘇郡)

雄の羽表は青藍色で、前羽外縁を縁取る黒色の部分は狭い。青藍色の部分は季節によって違いがあり、春型では暗色を帯びて光沢が強い。夏型では、やや白色を帯びた明るい色となる。雌の羽表は帯白青色で、外縁の黒色の部分が雄に比べて断然広い。春型では後羽が青色であるが、夏型の雌は後羽が黒っぽい。裏面の地色は白色で、黒点がある。この黒点の強さや形には、個体的変異が著しい。

北海道から九州まで広く分布し、わが国でもっとも普通のシジミチョウ科の1種である。国外では、サハリン、朝鮮半島、中国からヨーロッパに至るユーラシア大陸に広く分布する。暖地では、3月中・下旬から春型が出現し、5月下旬～6月上旬に夏型が出現する。以後、引き続き秋まで発生を繰り返す。幼虫はフジ、クララ、クズなどのマメ科植物の花蕾<sup>つぼみ</sup>を食べる。蛹で越冬する。

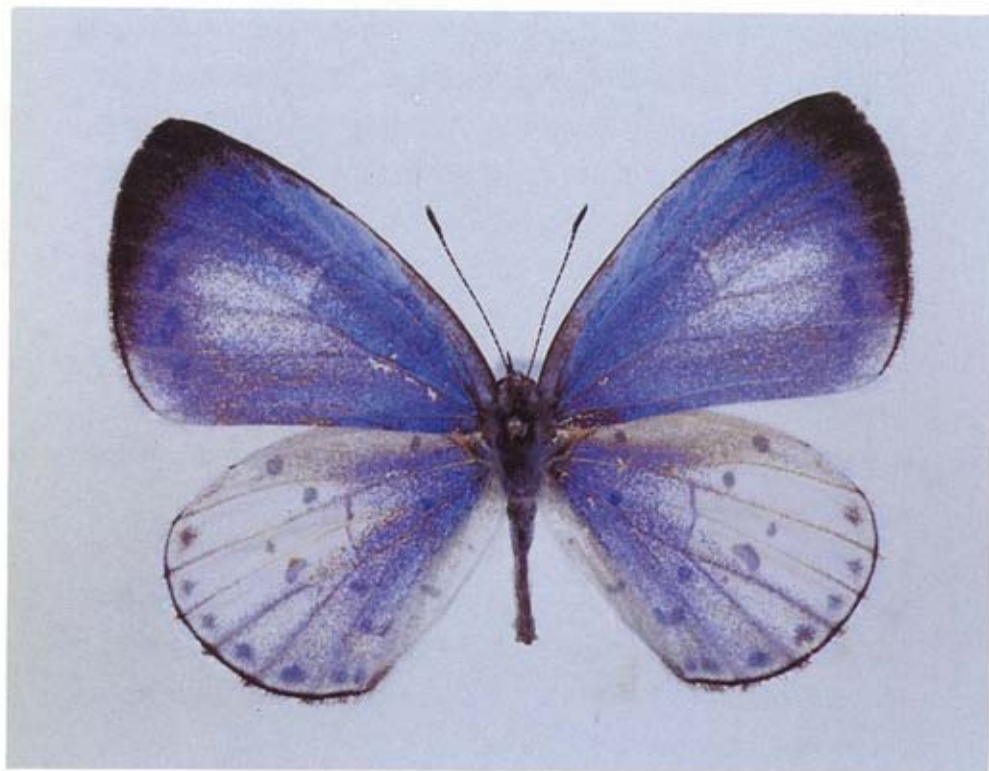
英国ケンブリッジに滞在中、小さい森（スピニー）で、樹上高く飛ぶシジミチョウを発見したがなかなか採れない。なにか、珍しい種類ではないかと期待して、採集できる機会を待った。やっと捕まえて、はやる心で網から蝶を取り出してみると、なんと、これがルリシジミで、がっかりしたことを覚えている。

本種の近似種に、スギタニルリシジミがいる。この蝶は局部的にしか産しない。佐賀県でも各地から採集されている。

オオルリシジミは属が異なる。本州、九州に産するが、産地は局所的で、各地で絶滅の危機にある。九州では、阿蘇地方で保護されている。

# サツマシジミ

*Celastrina albocaerulea sauteri* Fruhstorfer



前羽の長さ：約17mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1982年6月22日、西松浦郡黒髪山で採集)

非常に美しいシジミチョウの1種である。雄の羽表の地色は紫青色で、前羽中央部にやや大型の白い紋がある。後羽も大部分が白色である。裏羽は白色で黒い斑点がある。この斑点の配列が他種と違う。雌の羽表は外縁の黒い部分が広く、明色部の青が少なくて白味が強い。裏面は雄と同様である。色彩、斑紋に季節的変化がみられる。

国外では西部ヒマラヤ、ネパール、ミャンマー、中国、マレー半島、スマトラ、ジャバの広い地域に分布する。国内では近畿以南の本州、四国、九州に産する。九州では春型が3月中旬から出現する所もあるが、4月に多く見られる。夏型は6月上・中旬から出現し、その後も晩秋まで連続的に発生を繰り返す。樹上を飛ぶが草花も訪れる。幼虫の食草はハイノキ科のクロキ、スイカズラ科のガマズミなどである。

この蝶と私の最初の出会いは、1961年(昭和36年)の5月だったと記憶する。広島県の病院に出張していた私は、同僚と一緒に厳島に旅行した。そこで多数のサツマシジミを見た。その後は、この蝶と出会ったようにも思うが、はっきりした記憶はない。この蝶は佐賀市の市街地では見られないが、佐賀市金立町でも採集されている。その他、佐賀県内の各地から採集されているが、近年は明らかに減少している。

## ウラギンシジミ

*Curetis acuta paracuta* de Nicéville

前羽の長さ：約22mm

1983年9月15日撮影（佐賀郡大和町石井樋）

秋きぬと目にはさやかにみえねども風の音にぞおどろかれぬる

藤原敏行

九州の9月下旬は、日中はまだ暑い日があるけれども、もう、はっきり秋を感じさせる。春から夏にかけての蝶の世界の全盛期は過ぎ去ったにしても、まだ多くの蝶がみられる。

ウラギンシジミも、この時期に色彩をそえる蝶である。銀白色の裏面を輝かしながらさっそうと飛んでくる。雄の羽の表面は、黒褐色に縁取られた橙赤色で、雌は同じく黒褐色に縁取られた蒼白色である。

本州では関東以南に分布し、四国、九州では普通種である。北海道には生息しない。国外では朝鮮半島、台湾、中国に分布する。通常、年2回発生する。夏型は6～9月に出現し、秋型は9月ごろから現れる。

秋型は夏型に比べて、前羽端のとがりが著しい。幼虫の食草は、フジ、クズなどのマメ科植物である。越冬した雌は春に出現して産卵し、それより幼虫がふ化して夏型となる。

私とウラギンシジミの出会いは、やはり少年時代である。最初に、この蝶を見たとき、なにか非常にエキゾチックな感じがしたことを覚えている。後年、北九州で張り切って仕事をしているとき、自宅の前にもものすごく多くのウラギンシジミがいたことが、私の人生の一時期の思い出につながる。

## テングチョウ

*Libythea celtis celtoides* Fruhstorfer

前羽の長さ：約24mm

1975年8月10日撮影（岩手県下閉伊郡川井村）

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1984年7月17日, 神埼郡脊振山で採集)

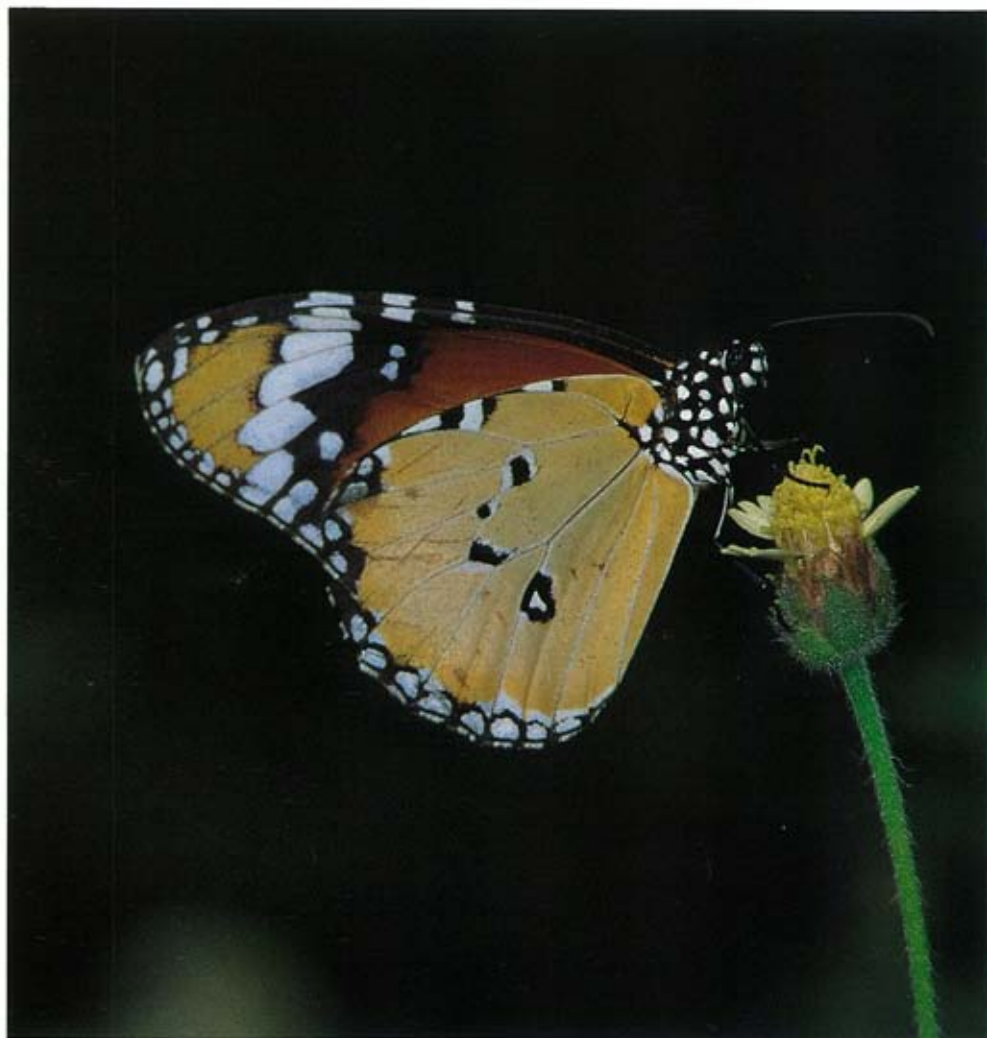
この蝶の口の付け根から出ている1対の突起（下唇鬚という難しい名が付けられている）が、長く突出しているところから、天狗を想定し、テングチョウと名付けられたものと思う。この仲間は、化石の蝶としても良く知られている。わが国では、テングチョウ科の蝶は、この1種しか産しない。

羽裏は個体によって変化があるが、どれも枯れ葉模様である。羽表の色彩・斑紋は雌雄で大差はないが、雌の羽表の橙斑が雄より大きい。雌雄の決定的な違いは、雄の前脚には、長い毛が密生しているが、雌には長い毛がない点である。

国外では朝鮮半島、台湾、中国、ヒマラヤからヨーロッパの東南部に分布する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道では、西南部にのみ産し、まれな種類である。その他に地域では、個体数はあまり多くないが、時に発生直後に群棲することがある。幼虫の食草はエノキ、エゾエノキなどニレ科の植物である。年1回の発生と思われていたが、2回発生するらしい。第1化は、5月上旬～6月上旬である。成虫で越冬する。

この蝶の思い出としては、二十数年前、大分県の高崎山に行ったが、サルの子ととも、岩場に数多くのテングチョウがいたことを覚えている。ちょうど、発生期に遭遇したのであろう。

## カバマダラ

*Anosia chrysippus* Linnaeus

前羽の長さ：約40mm

1983年7月23日撮影（タイ国チェンライ県メーハー村）

地色は橙色で、前羽の先端部に黒色の部分があり、その中に白紋部がある。羽脈は黒色ではない。雄では、後ろ羽の中央より、やや下方に、黒い点がひとつあり、裏では、その黒点の中央に白紋があるので、容易に雌雄区別できる。

メスアカムラサキの雌はカバマダラに似ているといわれ、擬態の一例として、この蝶はよく知られている。カバマダラはアフリカからギリシャ、小アジアを経て東洋熱帯に広く分布し、東はニューギニアに達している。熱帯地方では、年中、連続的に発生している。土着北限とされているのは奄美大島で、1959年以後土着し、毎年発生が続いているという。九州本土以北で毎年のように、この蝶が採集されているが、土着種でなく迷蝶である。

食餌植物はガガイモ科植物に限られ、トウワタがもっとも普通の食草である。ガガイモも食すという。成虫は食餌植物の結びつきが強く、トウワタの多い人家周辺、道端、耕作地、草地などにみられる。トウワタのない所では、ガガイモが生える堤防などにみられる。飛翔はゆるやかである。

佐賀県では、毎年、カバマダラが採集され、また秋には多量に発生している場所が知られている。迷蝶として南から飛来した個体の子孫が、秋になって増えるとされている。しかし、佐賀県では越冬した個体はみつかっていない。

## スジグロカバマダラ

*Anosia genutia* Cramer

前羽の長さ：約45mm

1983年11月24日撮影（香港ビクトリア公園）

色彩、斑紋は雌雄ほとんど同じである。ただ、カバマダラと同様に、雄は後羽に黒色の斑紋があるが、雌には、それが無いので雌雄の区別は容易である。羽脈はカバマダラと違って、黒色で太い。

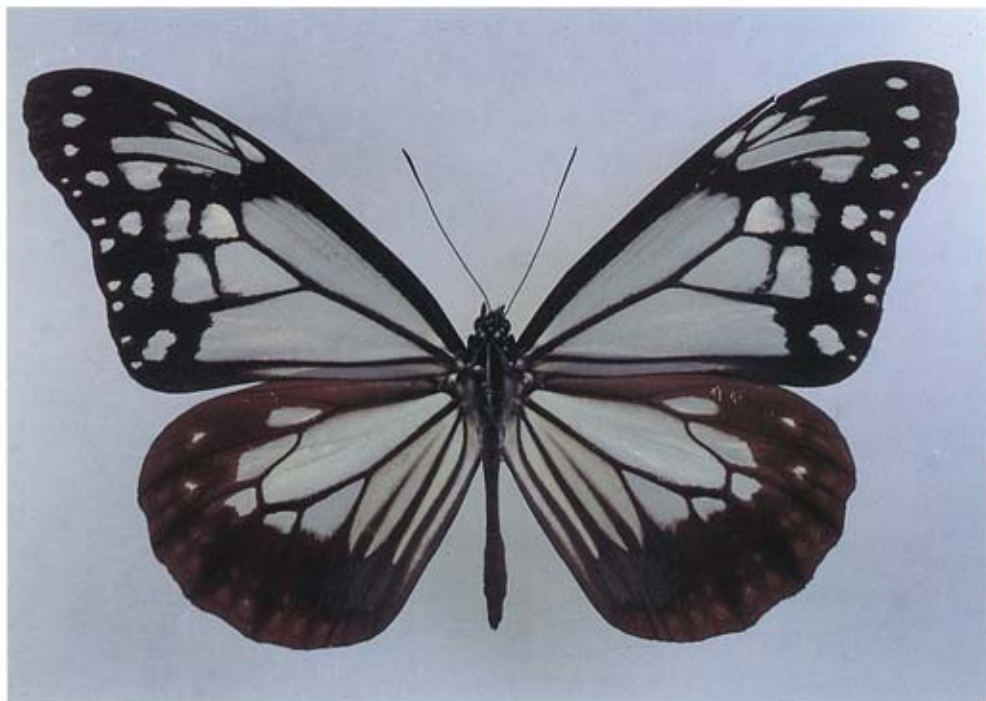
西はインドから、東はオーストラリアに至る東洋熱帯に広く分布するマダラチョウ科の一種である。わが国では、八重山諸島に土着している。石垣島や宮古島では、1月から12月まで成虫がみられ、もっとも個体数が多いのが5、6月であるという。全国各地に採集例があり、迷蝶として知られている。

佐賀県でも、川副町や東松浦郡北波多村などから、夏の終わりから秋にかけて採集報告がある。幼虫の食草はガガイモ科の植物である。土着地では、ふわふわとゆっくり飛び、畑地や荒地で訪花しているのに出会う。迷蝶としてのスジグロカバマダラに出会いたいと望んできたが、今日まで、まだその機会がない。

土着地での最初の出会いは、どこだったのだろうか。その記憶がないのは、南の国に行けば必ずといっていいほど遭遇するからであろうか。1983年11月下旬に香港を訪問したときに、ホテル近くのビクトリア公園に行った。そこで、1頭のスジグロカバマダラが飛んできて、運よく、花壇の鉄柵のすぐ下の花に止まったので、鉄柵の外から撮影したのがこの写真である。



## アサギマダラ

*Palantica sita* Kollar

前羽の長さ：約58mm

(1992年7月16日, 神奈川県三瀬村で採集)

1992年9月23日撮影  
(神奈川県三瀬村)

山野を歩いて、ゆうゆうと飛ぶアサギマダラに一度出会ったら、その優美な姿が忘れられない。前羽表の地色は黒色で、青白色の紋がある。後羽表の地色は、明るい赤褐色で前羽同様の紋がある。雄には、表裏ともに後羽に暗褐色の性斑があるが、雌には、それがないので雌雄の識別は容易である。季節的変異や国内に於ける地理的変異は知られていない。

国外では朝鮮半島、台湾、中国南部から西北ヒマラヤにかけて分布する。わが国では北海道から九州に分布するが、北海道や本州北部の寒冷地ではまれである。年数回発生する。九州では5月頃から11月頃まで成虫が見られる。幼虫の食草はカモメヅルなどガガイモ科の植物である。幼虫で越冬する。

アサギマダラは、ゆっくり飛んでいるので手で捕まえられそうであるが、捕獲に失敗すると、突然、早変わりして空高く舞い上がり、飛び去ってしまう性質がある。1981年5月30日に、種子島で羽にマークして放された雄の個体が、同年7月16日に福島県白河市で捕獲された例や、その他の実験結果から長距離を移動することが実証されている。山道を歩くと、ものすごい数のアサギマダラに遭遇したことがあるが、この蝶は、通常、いつでも見れる蝶でもない。今でもアサギマダラに出会うと、その優美さに新たな感動を受ける。

## クモガタヒョウモン

*Argynnis anadyomene midas* Butler

前羽の長さ：約37mm

1975年7月27日撮影（岩手県岩手山）

ヒョウモン類の後羽裏面は、銀の条や斑点<sup>すじ</sup>があつて、それなりに凝った模様があるが、クモガタヒョウモンだけは、造物主が最後の色塗りをしないで、そのままに放置したような単純な色彩・模様である。このような裏面の特徴から、他のヒョウモン類とは容易に区別できる。雌には前羽の表面と裏面に、先端近くに白い小さな1個の紋があるが、雄にはこれが無いことから、雌雄の区別ができる。

この蝶は、朝鮮半島、中国、アムール、日本に分布する東亚特産種である。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。分布は広いが、一般的に個体数は少ない蝶である。他のヒョウモン類のように草原に群生することはない。年1回の発生で、暖地では5月中・下旬から発生する。羽化後しばらくは活動するが、間もなく暑さを避けて夏眠に入り、夏場は活動しない。秋に再び出現して花を訪ねる。寒冷地では7月に発生し、夏眠はしない。幼虫はスミレ類を食べる。幼虫で越冬する。

私は佐賀県内で、まだ、この蝶を見たことがない。佐賀昆虫同好会員の溝上誠司氏によると、クモガタヒョウモンは、佐賀県では山地帯にまれに見られ、現在では、著しく個体数が減少している種のひとつであるという。

## ミドリヒョウモン

*Argynnis paphia geisha* Hemming

前羽の長さ：約35mm

1975年7月27日撮影(岩手県岩手山)



1992年7月7日撮影(神埼郡三瀬村)

雄の羽表面の地色は赤みを帯びた橙色で、雌は黒っぽい黄色で雌雄差がある。裏面の色彩・斑紋は雌雄同様で、前羽の先端部と後羽は、やや茶色を帯びた緑色で、後羽には縦に銀色の帯が走る。このような裏面の色彩・斑紋をもつヒョウモンチョウの種類は、他にないので同定は容易である。

ミドリヒョウモンは、日本、朝鮮半島、中国、サハリン、ヨーロッパにかけてのユーラシア大陸の北部に広く分布する。わが国では北海道から九州まで全土に産する。西南部の暖地では、主に山地に住んでおり、平地ではまれである。年1回の発生で、暖地では5月下旬～6月上旬頃から出現する。羽化してからしばらく活動して、酷暑の時期には夏眠し、秋になって再び活動する。寒冷地では、7月になってから出現し、夏眠の現象はない。草原には少なく、樹林あるいは、その近くに多い。幼虫はスミレ類を食べる。1令幼虫で越冬する。ミドリヒョウモンは、佐賀県内ではツマグロヒョウモンに次いで多い種類である。神埼郡三瀬村では普通に見られる。

ところで、この蝶の亜種名として、(geisha)が用いられている。これは、もちろん、日本の芸者さんのことであろう。しかし、“芸者”の名は、この蝶にふさわしくない。“芸者”はやはり、クジャクチョウに付けてこそ、ぴったりする。

## メスグロヒョウモン

*Damora sagana liane* Fruhstorfer

雄



雌 前羽の長さ：約40mm

1979年7月25日撮影（岩手県盛岡市大志田）



前羽の長さ：約40mm

1979年8月2日撮影（岩手県岩手郡玉山村）

雌雄で、こんなにも色彩・斑紋が違う蝶は珍しい。知らなければ、全く別種の蝶としか思えない。雌の羽表は緑色を帯びた黒色とでも表現できる黒い色で、前羽には数個の白い紋があり、後羽には、中央に白い帯がある。一見、イチモンジチョウ類に見える。雄は、これこそ、まさにヒョウモンチョウ類の典型的な色彩・斑紋である。交尾している姿はみたことがないが、雄が雌を追っかけているのは目撃したことがある。すがすがしい夏の日、岩手大学の演習林近くで、私の目の前を雌雄もつれながら飛んでいたのは印象的であった。北海道、本州、四国、九州に分布するが、一般に個体数は少ない。

佐賀昆虫同好会員の溝上誠司氏によると、メスグロヒョウモンは、佐賀県には、かつては各地に普通にみられたが、現在では、島嶼をのぞけば、非常にまれであるという。同氏は、この蝶を佐賀県で著しく個体数が減少している種としている。

メスグロヒョウモンは、国外では朝鮮半島、中国、ヒマラヤなどに分布し、ヨーロッパには産しない。年1回発生し、暖地では6月、寒地では7月に出現する。暖地では、酷暑の時期には夏眠に入り、秋になって活動する性質がある。九州では10月下旬から11月上旬まで、野外で飛んでいるのがみられる。草原には少なく、樹林や、その付近に見られる。幼虫の食草はスミレ類。幼虫で越冬する。

少年の日、昆虫採集に行くと、時々、メスグロヒョウモンを見た記憶はあるが、掴まえたことはない。夏休みが終わって、標本展示会で他の生徒が採集した緑黒色の雌の標本をみて、非常に羨ましく思ったことを覚えている。

## オオウラギンスジヒョウモン

*Argyronome ruslana lysippe* Janson

前羽の長さ：約39mm

1981年9月17日撮影（青森県弘前市）

ヒョウモンチョウの仲間は、どれも、よく似ている。特に、飛んでいるときは同定ができないことが多い。しかし、標本や図鑑で各々の特徴をつかむのも楽しみのひとつである。オオウラギンスジヒョウモンは、雌雄で色彩・斑紋に大差はないが、よく見ると相違点はある。雄の羽表は濃橙色であるが、雌はやや赤みが少ない。決定的な相違は、雌には前羽端の近くに三角形の小白斑があることで、雄にはこのような小白斑はない。

日本、朝鮮半島、中国東北部、アムールに分布する東亚特産種である。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布し、寒冷地に多く、暖地には少ない。年1回の発生で、7月頃から発生し、暖地では10月頃まで見られる。幼虫の食草はスミレ類で、幼虫で越冬する。成虫は他のヒョウモンチョウ類のように、よく訪花する。

オオウラギンスジヒョウモンは、佐賀県では、極めてまれな蝶とされてきた。ところが、1982年夏には、東松浦郡七山村で3頭ぐらい生存が確認された。私も、同年7月から10月にかけて、神埼郡三瀬村の診療所裏で2頭採集し、さらに2、3頭を目撃した。これらの事実から佐賀県の山地帯には、この蝶はまれでないと思われる。絶滅の危機にある蝶の種類が多い中で、オオウラギンスジヒョウモンの発見は朗報といえる。

# ツマグロヒョウモン

*Argyreus hyperbius* Linné



前羽の長さ：約37mm

1988年5月5日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）



1989年6月17日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）  
ツマグロヒョウモンの雌



1986年6月20日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）  
羽化したばかりのツマグロヒョウモン

幼虫



1989年6月4日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

蛹



1986年6月20日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

佐賀県内では、どこに行っても春から初冬にかけて、普通にみられる蝶である。その分布は広く、西はアフリカからインド、中国大陸、東南アジア、台湾、朝鮮半島を経て、北は日本、南はオーストラリアまで見られる。

日本はこの蝶の分布北限で、福井県南部、神奈川県南部あたり以南に生息する。雌は前羽の先端が黒く、斜めの白い帯があるが、雄にはこのような色彩の部分がない。

日本にはヒョウモンチョウの種類は多いが、これに似た種類はいないから間違えることはない。現在、佐賀市内で普通に見られる唯一のヒョウモンチョウの仲間といえる。

われわれはこの蝶を見慣れているが、東京の蝶愛好者はこの蝶を初めて見て非常に感激する。ツマグロヒョウモンは、スミレ類を食べて育つ。最近パンジーがよく栽培されているが、パンジーも好んで食べるので、害虫という汚名をもらっている。

パンジーを植えておくと、どこからか、この蝶が飛来して卵を産む。ふ化した幼虫は、どんどんパンジーの葉を食べて生育する。ほうっておくと、パンジーの葉は食べられてしまう。幼虫はパンジーか、近くの建物などの1メートル以下の低い場所でサナギになる。

サナギは、普通褐色であるが、黄金色の小さい点がある。ツマグロヒョウモンは、佐賀県では飼育しやすい蝶なので、飼育すれば、自然の妙味の一端に触れることができる。

## イチモンジチョウ

*Limenitis camilla* Linnaeus

前羽の長さ：約30mm

1992年6月2日撮影（神埼郡三瀬村）



1992年6月2日撮影（神埼郡三瀬村）

羽の表面には黒地に白の帯が入った模様があり、シックな感じがする蝶である。ヨーロッパ中南部から中央アジア、中国、ウズベキスタン、アムール、朝鮮半島から日本に分布する。

幼虫はスイカズラ科の植物を食べる。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する普通の蝶である。しかし、どこにでもいるが、特に多くいる場所もなく、初めての場所で、この蝶を撮影する目的で歩いても、必ずしも出会えない。

神埼郡三瀬村は自然環境に非常に恵まれた所である。5月の終わりの日、室内はまだ少し肌寒いくらいであったが、外は気持ちよい微風の五月晴れであった。三瀬村公民館の近くに、よく整えられて、きれいな白い花が咲く木が植えてある個人の家の庭がある。

その花に真っ赤なベニカミキリがたくさんいたので、撮影していると、イチモンジチョウが飛んできた。その日はシャッターチャンスはなかったが、6月になって、その家のご主人から蝶がたくさんいると連絡があった。

急いで来てみると、新鮮なイチモンジチョウが何頭も花に来ていた。その庭には、トラフシジミ、イシガケチョウ、ミドリヒョウモンなどが飛来する。まさに蝶の宝庫といえよう。

イチモンジチョウによく似た蝶で、アサマイチモンジがいる。この蝶は九州には分布しないので、佐賀県では間違えることはない。



# コミスジ

*Neptis aceris intermedia* W. B. Pryer



前羽の長さ：約27mm

1985年7月8日撮影（佐賀市鍋島町蛭久）

佐賀平野の春の盛りの4月下旬、ツマキチョウやモンシロチョウにみとれていると、別の蝶がどこからともなく、スーッと現れる。

「おや」と思って目を移すと、黒地に白いすじが入った羽のコミスジである。モンシロチョウやアゲハチョウなどとは違って、この蝶は、はばたきと滑空を繰り返しながら飛ぶ。

どの本にも「スイ、スイと飛ぶ」と書いてあるが、まさにぴったりな日本語である。英語で“グライダー”とも呼ばれるが、これも飛び方から名付けられたものと思う。

コミスジはヨーロッパからアジア大陸まで広く分布する。日本では北海道から九州の屋久島まで、平地、山地にごく普通に見られる。幼虫はクス、ハギ類などのマメ科植物を食べる。

奄美諸島以南の南西諸島には、コミスジは分布しないが、そこには非常によく似たリュウキュウミスジが分布する。コミスジと同じ仲間には、オオミスジ、ミスジチョウ、ホシミスジなどがある。オオミスジは九州には産しない。

ミスジチョウは九州にもいるが、非常に少なく、佐賀県では見つからない。これらの蝶はたがいに非常に似ているが、はっきりした特徴がある。その特徴を図鑑や標本で、明らかにするのも興味がある。

## ホシミスジ

*Neptis pryeri* Butler

前羽の長さ：約30mm

1979年7月25日撮影（岩手県盛岡市大志田）

わが国で、どこにでも、もっとも普通にいるミスジチョウの仲間はコミスジである。コミスジを採集した昆虫少年は、コミスジに似た違った種類を採集したくなる。その対象となるのがホシミスジ、ミスジチョウ、オオミスジなどがある。しかし、これらの蝶はコミスジと違い、そう簡単には採集できない。

ホシミスジは前羽の横に走る中央の白帯が5つに分かれるのが特徴である。また、後羽裏面の付け根に、多数のあざ（黒点）があるので、同定に誤ることはない。色彩・斑紋は雌雄がほとんど同様である。

北海道には棲息せず、本州、四国、九州に分布する。国外では朝鮮半島、中国、台湾に分布する。寒冷地では年1回、7～8月に発生し、暖地では年2回、5～7月、8～9月に発生する。通常、山地の草原に棲息する。九州では九重、阿蘇、英彦山、祖母山などの山地帯の産地が知られている。幼虫はコゴメバナ、シモツケなどのシモツケ科の植物を食べる。幼虫で越冬する。

少年の日、ホシミスジは、高知市郊外に産することは知っていたが、その場所に採集に行く機会は無かった。この蝶に初めて出会ったのは、岩手の時代である。山田線のある駅の近くにたくさんいてシャッターチャンスもあった。この蝶は、1989年以来、佐賀県に局地的に棲息するようになった。食草とともに、佐賀県に搬入されたと推測されている。今では佐賀県の蝶である。

## サカハチチョウ

*Araschnia burejana strigosa* Butler

夏型



春型 前羽の長さ：約20mm

1976年6月11日撮影(宮崎県田野町)

前羽の長さ：約18mm  
1975年6月29日撮影(岩手県盛岡市岩山)

春型と夏型とは、色彩・斑紋が非常に違う。春型の羽表面は、雌雄とも黒と橙色の斑模様であるが、夏型は表面の地色は黒褐色で、中央に太い白帯がある。両型とも、雌は雄に比べて僅かに大きく、羽型は丸みが強い。春型では雌は羽表の黒色部が狭く、橙色部が広い。夏型では、雌の白帯が広いなどの雌雄差がある。

国外では中国大陸、アムール、シベリア、朝鮮半島、サハリン、国後島に産する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。分布南限は、大隅半島とされている。わが国西南部の暖地では、山地性の蝶となり、平野部には、ほとんど棲息しない。寒冷地のは小型である。年2回の発生で、本州以南では春型が4～5月に出現し、夏型は7～8月に出現する。北海道や本州の高地帯などの寒冷地では、春型と夏型の中間的な斑紋の個体が発見されることもあるという。

山地の溪流のほとりの樹林に多く、トラノオなどの花に吸蜜に訪れる。幼虫の食草は、コアカソ、エゾイラクサなどイラクサ科植物。

サカハチチョウは佐賀平野では、まず、見られないが、山に入ると珍しい蝶ではない。特に、5月頃山に登って若葉が萌え出ている溪流のほとりを歩くと、この蝶に出会う。サカハチチョウに非常によく似た蝶にアカマダラがいるが、本種は北海道にしか産しない。

## アオタテハモドキ

*Precis orithya* Linné

前羽の長さ：約28mm

1983年7月23日撮影（タイ国チェンライ県メーハー村）

雄の前羽表の半分は濃黒色を帯び、後羽表の地色は、美しいブルーの色である。雌の前・後羽表の地色は淡褐色で、雌雄で、かなり色彩・斑紋が違う。

アオタテハモドキはアフリカから東洋熱帯、亜熱帯、オーストラリア北部に達する広い地域に分布する。わが国では南西諸島や本土で、毎年かなりの個体数が記録されるが、土着地は、八重山諸島の石垣島と西表島といわれている。食餌植物としてはキツネノマゴ科のキツネノマゴが、日本各地でもっとも普通の食草となる。

佐賀県でも、毎年のように成虫が採集されている。とくに、東松浦郡や神埼郡からの記録が多い。さらに、佐賀昆虫同好会員により、幼虫も発見されており、キツネノマゴが食草であることも確認されている。もちろん、これらは、迷蝶、あるいは迷蝶に由来する個体で、夏から秋にかけて発見されている。佐賀県へは初夏の強い南西の季節風に乗って、南方から飛来してくるものと推定される。

迷蝶を採集することは、蝶愛好者の夢でもある。私は高校生のとき、熊本県を流れる球磨川の川原で、アオタテハモドキが採集されたとの古い記録をたよりに、同場所に通ったことを覚えている。しかし、遂に同蝶を発見することはなかった。今日まで、まだ、私は日本本土でアオタテハモドキに遭遇していない。

## ヒメアカタテハ

*Vanessa cardui* Linné

前羽の長さ：約28mm

1987年11月8日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

色彩斑紋<sup>はんもん</sup>は雌雄同じである。英語でペインテッド・レディーと呼ばれる蝶である。世界中に分布し、コスモポリタンとされているが、オーストラリア、ニュージーランドには分布しない。日本全土に広く分布する普通種である。

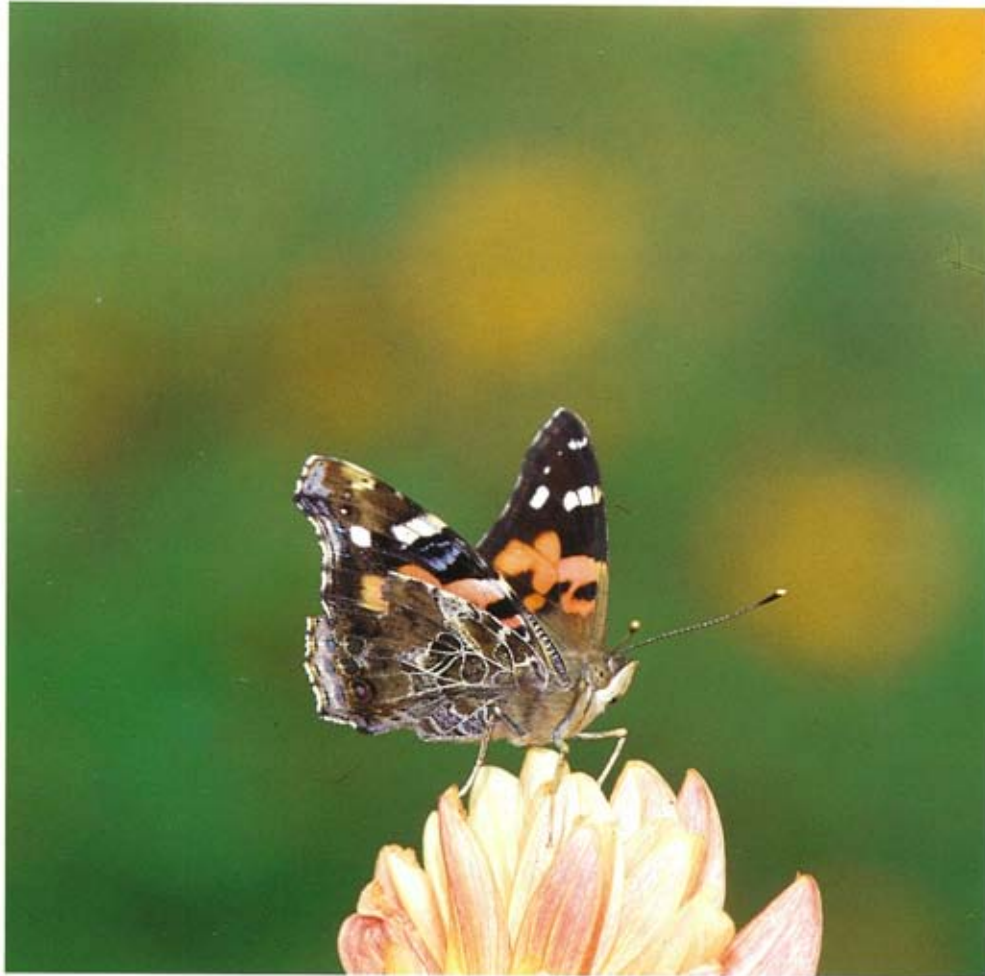
佐賀県では、春から初冬にかけて見られる。秋になると個体数を増して、コスモスの花などに来ているのが目につくようになる。国内における季節的、地理的変異は知られていない。ヨーロッパでは、集団で移動するので有名である。

幼虫はハハコグサ、ゴボウなどを食べる。ヒメアカタテハは、わが国では普通種とはいっても、外に出れば、いつでも見られるというものでもない。発見できる場所は、ある程度限られる。

盛岡市郊外の友人の石村実さんが住んでおられた家の近くの花畑は、秋にはヒメアカタテハがいる場所である。二人で、よく撮影に行ったものである。石村さんは、東京の方であるが北大農学部を卒業され、ビール会社でワインとホップの研究に没頭され、業績をあげられた。

定年退職後の1992年6月に、かねて夢に描いておられた中国新疆に、農業指導のために奥さまと二人で赴任された。今、お二人は異文化の中で元気に活躍しておられる。そこは、写真で見ると砂漠地帯で、あまり蝶のいそうな場所ではないが、もし、ヒメアカタテハに遭遇されたなら、盛岡の日々を懐かしく思われることであろう。

## アカタテハ

*Vanessa indica* Herbst

前羽の長さ：約33mm

1992年9月23日撮影（神奈川県三瀬村）

津の国の難波の春は夢なれや 葦の枯れ葉に風わたるなり

西行法師

このような荒涼たる風景には、蝶の姿は全くない。しかし、九州はさすが南の地、小雪がちらつく日があるかと思うと、厳冬の中でも、小春日和の日がある。そのような日に、ひょっこり姿を現すのが越冬中のアカタテハである。

国外では朝鮮半島、中国大陸から西はインド、東はオーストラリアまで分布する。わが国では、全土に見られる普通種である。国内における季節的、地理的変異は知られていない。

九州では、5月ごろに新鮮な個体が出現して、通常、初冬まで普通に見られる。成虫は花、樹液に集まり、樹幹や路上に止まる。幼虫はイラクサ、カラムシなどのイラクサ科の葉を食べる。

アカタテハに似た蝶は、世界中に何種もいるが、カメハメハタテハもその一種である。本種はハワイ諸島の特産種である。その名は、ハワイのカメハメハ大王にちなんで名付けられたものである。

この蝶の表面後羽は、アカタテハと違って赤みが強く、美しい蝶である。今から28年も前に、私がハワイ大学留学中、オアフ島の山の中に入って、カメハメハタテハを1頭だけ見つけ採集した。

その時の感激は忘れられない。その標本は今でも私の手元にある。

# タテハモドキ

*Precis almana* Linné



前羽の長さ：約30mm

1983年7月23日撮影（タイ国チェンライ県メーハー村）

“モドキ”とは、「よく似ていて紛らわしいこと」の意味である。タテハモドキの意味は、タテハチョウに似た蝶で、タテハチョウではないことになる。この蝶はタテハチョウ科の一種なのに、なぜ“モドキ”が付けられたのか分からない。

羽表の地色は橙色で、前・後羽に大きな目玉模様がある。雌雄で、ほとんど斑紋・色彩の差はない。季節的変異があり、夏型は前・後羽裏面に小さな目玉模様があるが、秋型では裏面の目玉模様がなく、後羽の後端が尾のように突出している。国外ではインド、スリランカからチモールに至る東洋熱帯に広く分布する。わが国では奄美大島、種子島などに普通にみられるが、近年になって、鹿児島県南部、宮崎県南部に土着するようになった。それ以北でも、迷蝶として、たびたび採集されている。幼虫の食草としては、クマツヅラ科のイワダレソウである。

佐賀新聞（1992年12月18日号）の報ずるところによると、佐賀市高木瀬東2丁目にお住まいの吉田英範氏は、1992年12月5日に、自宅の庭で1頭のタテハモドキを捕獲された。佐賀昆虫同好会員の溝上誠司氏によると、タテハモドキは、佐賀県では迷蝶の中でも非常にまれで、それまでに確実な記録としては、1956年に唐津市で捕獲された例があるだけだそうである。真に貴重な迷蝶であった。

## ルリタテハ

*Kaniska canace no-japonicum* von Siebold

前羽の長さ：約33mm

1975年4月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）

羽の裏面は茶褐色で目立たないが、羽の表面は藍色のシックな感じがする蝶である。日本全土の平地、山地に見られる普通種である。国外では朝鮮半島、中国、東南アジアに分布する。樹液や腐敗物などに好んで集まるが、路上にも止まる。通常、花には飛来しない。

ものすごく速く飛び去ったかと思うと、一回りして近くに戻ってくる性質がある。幼虫は、サルトリイバラ、ホトトギス、オニユリなどを食べる。九州では夏と秋に発生するので、秋にも普通に見られる。

早春に見られるものは、幼虫で越冬した個体である。

同じ種類の生物ではあるが、地方的に分化したものを亜種という。ルリタテハには幾つかの亜種がある。

日本産ルリタテハの亜種の学名は、フォン・シーボルトが命名したと同級生の前山隆太郎博士が教えてくれた。ほかに、フォン・シーボルトが命名したわが国の蝶としては、ナガサキアゲハ (*Papilio memnon thunbergii* von Siebold) がある。

昆虫学の故江崎悌三博士は「ノ」は、日本語のノの意味だと書かれている。確かにこの蝶の後ろ羽の裏に片仮名の「ノ」のような斑点がある。

フォン・シーボルトは1823年長崎に来て、わが国に西洋医学を教えると同時に、わが国の動植物を採集して研究したことは、あまりにも有名である。こうなってくると、ルリタテハは九州と関係が深い蝶といえる。



## ヒオドシチョウ

*Nymphalis xanthomelas japonica* Stichel

前羽の長さ：約35mm

佐賀県昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1984年5月27日, 佐賀市鍋島町で採集)

ヒオドシチョウとは、実に良い和名をつけたものだと感心する。羽の縁が黒く彩られ、黒点を散りばめた橙赤色の羽表は、いにしえの緋織の鎧を思い浮かばせる。羽の色彩・斑紋<sup>ひよどし</sup>だけからでは、雌雄の判定はできない。腹端と前脚の構造を調べる必要がある。寒冷地のものは、一般に小型であるが、著明な地理的変異はみられない。

国外では、朝鮮半島、中国、台湾、ヒマラヤからヨーロッパの南東部にかけて分布する。国内では、北海道、本州、四国、九州本土に分布する。屋久島以南の南西諸島からは知られていない。年1回発生する。暖地では、5月下旬～6月上旬に羽化する。羽化後、間もなく休眠に入る。成虫は好んで樹液に集まる。幼虫は、エノキの葉を食べるが、ヤナギ類も食べる。成虫で越冬し、早春に出現する越冬個体は、破損したものが多く。

ヒオドシチョウは、佐賀市内では少ない。私は年に1、2頭見る程度である。いつか、ウインブルドン九州テニスコートの垣根に、新鮮な個体が1頭来て止まったことを覚えている。私が高知市から熊本の国民学校（小学校）に転校した年の5月の終わりに、自宅近くのエノキに何百個というヒオドシチョウの蛹が付いており、それらが羽化しつつある状態に出会ったことがある。その後、このような光景には二度と遭遇したことはない。

## キタテハ

*Polygonia c-aureum* Linné

前羽の長さ：約29mm

1987年11月8日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

シータテハ



前羽の長さ：約25mm

1973年4月15日採集（岩手県岩手郡滝沢村）

九州では、厳冬の中に春の日かと錯覚するような暖かい日がある。そのような日に、陽だまりで日光浴しているキタテハに出会うことがある。これは越冬している個体である。本種は暖地性の蝶で、北海道南西部、本州、四国に分布する。関東、中部地方の平地、低山地帯では極めて普通の蝶である。国外では朝鮮半島、中国、台湾、トンキンなどに分布する東亜の特産種で、ヨーロッパには産しない。

越冬成虫は、アカタテハなどとともに、早春より出現して産卵する。それから生まれた夏型は、5月下旬から6月上旬に出現する。以後、連続的に夏型の発生が9月ごろまで繰り返される。9月ごろから秋型が出始め、晩秋まで羽化が続く。秋が深くなるにつれて、羽の色は赤ずんでくる。

この蝶は、路傍、草地などに多く、また、花を訪れ、樹液に集まる性質がある。幼虫の食草は、カナムグラ、麻などのアサ科植物である。幼虫は食草の葉を折り曲げてテント様の巣を作り、その中に入っている。

キタテハに似ている蝶に、シータテハがいる。この蝶は、北海道、本州、四国、九州に分布するが、キタテハに比べると寒地性の蝶で北海道や東北には多い。九州では、山地性のまれな蝶である。分布の南限は宮崎県小林市とされている。佐賀県ではシータテハは発見されていない。

## メスアカムラサキ

*Hypolimnas misippus* Linné

前羽の長さ：約45mm

1982年8月1日撮影（沖縄県石垣市）

雄



前羽の長さ：約35mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1986年11月5日、沖縄県石垣島で採集)

雌と雄は羽の色彩が明らかに違う。雄の羽の表は黒色で、前羽と後羽の真ん中に、白い大きな紋があり、その周囲が紫色に輝く。雌の羽は、表の大部分がだいたい色である。

オーストラリアを含む東洋熱帯、アフリカ、アメリカの熱帯、亜熱帯に広く分布する。わが国では八重山諸島に産する。地理的変異は知られていない。食草はスベリヒユ科、ヒユ科の植物である。

この蝶は、毎年日本各地で採集されるが、土着種ではなく、南方から飛来したもの、または、それに由来する個体とされている。夏から秋にかけての季節風、あるいは台風に乗ってくると考えられている。

幼虫、さなぎは寒さに弱く、日本本土では越冬できないらしい。メスアカムラサキの採集例は九州に多い。佐賀市郊外の某場所では、毎年のように採集されている。面白いことに発見場所が毎回同じである。

南方から飛んできた雌が近くの食草に卵を産み、そこで、ある数の個体が発生すると推定される。なぜ毎年、同じ場所に飛来するのか、それは大きななぞである。このように、わが国の土着種でなく、海を渡って日本に飛来する蝶は“迷蝶”と呼ばれる。

“迷蝶”の出発地は、フィリピン、台湾が多いが、中国大陸からのものもある。佐賀県では、毎年、メスアカムラサキをはじめとして、何種かの“迷蝶”が採集されている。

# コムラサキ

*Apatura ilia substituta* Butler



前羽の長さ：約38mm

1984年7月8日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）



1990年7月29日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

クロコムラサキ



前羽の長さ：約35mm

1970年7月11日採集（大分県九重山で採集）

くろっぽい地色に、だいたい色の部分が混じりあった羽をもつ蝶であるが、雄の羽は光の方向によって美しい紫色に輝く。

幼虫はヤナギ類を食べる。蝶は好んで樹液を吸いに集まる。クヌギの幹に、カブトムシやクワガタと一緒に樹液を吸っている姿をよくみかける。

普通に見るのは、だいたい色の帯をもった正常型の個体だが、表面のだいたい色の帯が白くなった、クロコムラサキと呼ばれる黒色型の個体があり、これはコムラサキより、さらに美しい。

コムラサキとクロコムラサキは同じ種類の遺伝的な二つの形で、その出現はメンデルの遺伝法則に従う。正常型は北海道から九州まで普通に見られる。

クロコムラサキは、分布が限定され個体数もずっと少なく、九州では南部に分布し、佐賀県には産しない。私は、これまでクロコムラサキは、九重山で1頭採集したにすぎない。ヨーロッパには両型が分布する。英国ではクロコムラサキと似たような種類で、少し大きく、より美しい種がいるが、英国滞在中、とうとう、その蝶に遭遇する機会がなかった。

私が転校してきた九州の小学校の運動場の端に、ヤナギの木が数本植えてあった。そこに、コムラサキがたくさんいたのを覚えている。今でも、ヤナギを見ればコムラサキがないかと目を向けるのは、その時の出会いを忘れないからであろう。

## イシガケチョウ

*Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer

前羽の長さ：約33mm

1985年5月26日採集（佐賀県経ヶ岳）

少年の日、蝶の採集をはじめた頃、高知市の北山に行った。崖の上を、すいすいと滑るように飛んでいる白い蝶が2、3頭いるのではないかと感じた。飛び方がモンシロチョウとは全然違う。崖を登って網を構えていると、かなり近くに来て止まったが網が届かない。羽を開いたまま葉の上に止まっている。全体に白い色で模様がある。真に不思議な形と色彩である。そのうち、葉の裏側に羽を広げたまま止まった。蛾の一種かなとも疑った。崖の上で、ねぼって苦闘の末、やっと1頭捕獲した。家に帰って図鑑を見て、初めてイシガケチョウであることを知った。これが、この蝶との最初の出会である。

イシガケチョウの仲間（属）は約20種あり、インド、オーストラリア区を中心に分布する。この仲間は、その色彩から、英語で“地図蝶 map butterflies”とよばれ、イシガケチョウそのものは common map と呼ばれる。イシガケチョウは、インドから東南アジアにかけての地域と、ニューギニアにかけて分布するが、フィリピンやスマトラには分布しない。わが国では本州、四国、九州に分布し、本州に分布北限線がある。土着の北限は三重県あたりと考えられている。九州の低山地域では、夏型は5月中旬頃より出現、9～10月より秋型が発生し、秋型は成虫で越冬する。越冬するのは雌だけといわれている。

最近、減少したり、絶滅の危機にある蝶の種類が各地に少なくないが、イシガケチョウは、佐賀県では各地で増えている蝶である。早春や晩秋には、佐賀市街地でもみられる例が多くなってきている。幼虫の食草は、イヌビャ、イチジクなどのクワ科の植物。

## スミナガシ

*Dichorragia nesimachus nesiotus* Fruhstorfer

前羽の長さ：約38mm

佐賀県昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1992年8月22日, 大分県九重山黒岳で採集)

スミナガシとは、まことに、ふさわしい名を付けたものである。羽表の地色は黒いが、単一の黒ではなく、微妙に変化がある黒である。前後羽の辺縁に、V字型の白い斑紋が並んでいる。雌雄で色彩・斑紋は同じである。春型は夏型に比べて小型で白斑は強い。

国内における地理的変異は知られていない。国外では朝鮮半島、台湾、中国、ヒマラヤ、マレー諸島にまで分布する。わが国では本州、四国、九州（南西諸島を含む）に分布する。本州では青森県から山口県まで見られるが、東北地方北部では非常にまれである。年2回の発生で、春型は5～6月、夏型は7～8月に出現する。食餌植物は、アワブキ、ヤマビワなどのアワブキ科の植物である。蛹で越冬する。

スミナガシは、早く飛ぶが、花には来ないで、クヌギなどの樹液や果実に集まる。この蝶は佐賀県内の各地に産地が知られていたが、雑木林の伐採などによる食樹の減少で、現在では県内の稀少種となっている。

私のスミナガシとの出会いは古く、少年時代である。高知市の北山の林で樹液を吸っているのを採集した。1980年に佐賀市に来てからは、国立肥前療養所に医大生をつれて行ったとき、大きな建物の中の天井に近い窓ガラスに、1頭のスミナガシがバタバタしているのを見つけた。それ以後は、県内では一度も遭遇していない。

## ゴマダラチョウ

*Hestina japonica* C. et R. Felder

前羽の長さ：約43mm

1984年7月15日撮影（佐賀市網島町蛸久）

小学校の同じクラスに昆虫少年のO君がいた。彼は私のライバルであったが、私より、はるかに多くの蝶を採集していた。

初夏の日、私はO君、K君と3人で蝶採集のため、高知市の久万川の北にある榎えのきの下に来た。初めて見る蝶が榎の上を回っているが、なかなか降りてこない。だれも捕っていないゴマダラチョウだ。ゴマダラチョウは普通の蝶であるが、そのころの私たちにはまだ珍しかった。30分もねばったころ、1頭が私の網がとどく所<sup>えのき</sup>にきた。私は狙いを定めて網をさっと振った。

「とれた！」

一瞬胸がときめき網の中をみた。いない。影も形もない。その時、急に後ろで「わあ、とれた、とれた」とO君の歓声が上がった。私が逃がした蝶を次の瞬間にO君が捕らえたのだ。私は完全に負けたのだ。「もう1匹捕ろう」と言ってO君は、その場所を動かそうとしない。しばらくして、O君は網を振った。網が木の枝に当たって木の葉が散った。蝶は逃げて行った。

すると、O君は突然かがみ込んで「ウーン、痛い、痛い」と大声で泣きだした。ハチの巣をたたいて、アシナガバチに襲われたのである。O君は片手で頭を押さえ、片手に網を持って泣きながら、久万川の堤を走って下って行った。

O君はだれも持たない絹製の緑色の捕虫網を持っていた。O君が遠ざかるにつれて、自慢の緑の網がだんだん小さくなってゆく。「あまり、欲張るから罰が当たったんだ」、K君と私は声を上げて笑った。ライバルに敗れた私は留飲を下げた。



## ヒメウラナミジャノメ

*Ypthima argus* Butler

前羽の長さ：約20mm

1991年7月6日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)



1991年7月6日撮影(佐賀市鍋島町蛸久)

どこにでもみられる、ごく普通の蝶であるが、多くの人になじみが少ない蝶と思われる。大きさはシジミチョウ程度で、目玉模様のある羽の色彩も目立たず、この蝶を蛾と誤っている人もあるくらいである。

それにジャノメ(蛇の目)という名をもらっているのも印象を悪くする。この蝶は、日陰の庭の片隅に、ひっそりと生活している。地上低く飛び花に集まる。花や葉に止まると、羽を閉じたり開いたりする。

要するに、形も生活も人目をひかない地味な蝶と言えるが、近寄ってよく見るとかれんなところもある。この蝶は、北海道から九州まで全国各地に普通にみられるが、対馬とトカラ諸島以南には分布しない。

国外では朝鮮半島、ウスリー、中国北部に分布する。幼虫はチヂミザサなどのイネ科の植物を食べる。この蝶に非常によく似た種に、ウラナミジャノメがある。両者は、ちょっとみると見分けがつかないが、後ろ羽の裏側をみると容易に区別できる。ヒメウラナミジャノメは目玉模様が5個あるが、ウラナミジャノメは3個しかない。羽を閉じて止まっているときに見れば、間違えることはない。

ウラナミジャノメは静岡以西に分布し、ヒメウラナミジャノメより個体数が少ない。ウラナミジャノメに似た種に、リュウキュウウラナミジャノメがいる。本種は琉球の固有種である。また、ヤエヤマウラナミジャノメとマサキウラナミジャノメがいるが、この二種も石垣、西表島の固有種である。

# ジャノメチョウ

*Minois dryas bipunctatus* Motschulsky



前羽の長さ：約35mm

1975年7月22日撮影（岩手県盛岡市大志田）

雄の羽表は濃黒褐色で、眼状紋は小さい。裏面の地色は羽表より淡く黄褐色。雌は雄に比べて、著しく大型。羽表の地色は雄より淡く黄褐色で、眼状紋も大きい。裏面は雄の裏面よりさらに淡色で、暗色部の発達も弱い。寒冷地のものは一般に小型で、暖地のものは大型である。本種は大型のジャノメチョウ科の蝶で、色彩・班紋も特徴的であり、わが国には似た種類はいなく、同定は容易である。

国外では朝鮮半島、中国よりヨーロッパに至るユーラシア大陸の北部に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。年1回、7～8月に出現する。幼虫はススキ、スズメノカタビラなどのイネ科植物を食べる。幼虫で越冬する。老熟幼虫は、浅く地中に潜入して蛹窩を作り、その中で蛹化する特別の変わった習性があるという。

ジャノメチョウは平地にも発生することがあるが、通常、山地に棲息する。草原性の蝶で、他のジャノメチョウの仲間と違って森林中には発生せず、日の当たる場所を好み、アザミの花やその他の草花を訪れる。また、樹液にも集まる。

この蝶との最初の遭遇は、どこであったか覚えていない。私は、いまだ、ジャノメチョウを佐賀市内で見たことはないが、1992年夏、神埼郡三瀬村で目撃した。佐賀県では特別珍しい蝶ではないが、その棲息場所は局限している。

## ヒメジャノメ

*Mycalesis gotama fulginia* Fruhstorfer

前羽の長さ：約25mm

1983年9月18日撮影（佐賀市鍋島町蛭久）

色彩・斑紋は雌雄で大差はないが、雌の羽の形がやや丸みを帯びており、羽の地色は雄よりわずかに淡い。季節的な著しい斑紋の変化はみられない。地域により、別亜種が存在する。国外では朝鮮半島、中国中・南部、トンキン、アンナン、ミャンマー、アッサムに分布する。国内では北海道、本州、四国、九州（奄美大島を含む）に産する。奄美大島産のものは、別亜種とされている。本州中部以南の暖地では最普通種であるが、北海道や東北地方北部の寒冷地ではまれである。

九州では第1化は5月下旬で、第2化は7月である。以後、晩秋まで連続的に発生を繰り返す。幼虫はイネ、ススキなどのイネ科植物を食べ、幼虫で越冬する。ヒメジャノメは庭の隅、路傍、山林などいたる所にみられる。色彩・斑紋が地味で目立たないが、身近な蝶といえる。夏には街はずれのオフィスの窓辺で、この蝶がバタバタしている光景は珍しくない。

ヒメジャノメによく似た蝶に、コジャノメがいる。この蝶は本州、四国、九州に分布する。ヒメジャノメは明るい場所にもいるが、コジャノメは林間の陰湿な場所を好み、日の当たらない薄暗い林の葉の上に止まっていることが多い。幼虫はチヂミザサ、ススキなどを食べる。

## クロヒカゲ

*Lethe diana* Butler

前羽の長さ：約27mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1984年5月9日、福岡県久留米市吉見岳で採集)

夕暮れ時にもものすごい速さで飛び回る、目立たない黒色の蝶に出会うことがある。これがクロヒカゲである。種名 (*diana*) は、ローマ神話の純潔、月、狩猟の女神から名付けられたものだそうである。

色彩、斑紋は雌雄で大差はないが、よく見ると雌は羽の幅が広く、地色は雄より薄く、前羽にある斜めの白帯は、雄よりやや明確である。寒冷地のものは、小型のものが多い。

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国、台湾に産し、国内では、本州、四国、九州に分布する。九州では平地、山地に普通に見られる。暖地では、第1化は4月下旬から5月上旬にかけて出現する。その後は、連続的に秋まで3、4回程度発生する。成虫は樹液に集まるが、訪花はしない。ものすごく速く飛ぶが、同じ場所に戻ってくる性質がある。幼虫はメダケ、マダケなどのタケ、ササの類を食べる。幼虫で越冬する。

本種に似た種類に、ヒカゲチョウとクロヒカゲモドキがいる。クロヒカゲの雌は、しばしばヒカゲチョウと混同される。ヒカゲチョウもクロヒカゲモドキも九州に産するが、その産地は局部的である。両種とも佐賀県からは知られていない。

## サトキマダラヒカゲ

*Neope goshkevitschii* Ménétriès

前羽の長さ：約35mm

1992年5月28日撮影（神埼郡三瀬村）

気持ち良い初夏の日、低い山の山道を登って行くと、どこからか、あまり目立たない黄褐色の蝶が現れて、周りを素早く飛んでいるかと思うと、自分の体に止まってしまう。そのような経験はないだろうか。この蝶がサトキマダラヒカゲである。

この蝶は、アカタテハぐらいの大ききで、羽の裏面は黄褐色から黄色の地色で、複雑な模様がある。羽の表は、淡褐色に黄色の斑紋が規則正しく並んでいる。北海道、本州、四国、九州に分布し、わが国の特産種である。佐賀県では、春から秋にかけて山間部では普通にみられるが、佐賀市の市街地には少ない。幼虫の食草は、メダケ、マダケ、モウソウチクなどのタケ、ササの類である。通常は、花を訪れることなく、クヌギなどの樹液に集まることが多い。

20年以上前に、みんなで<sup>ひな</sup>鄙びた田舎の温泉宿に旅行したときに、宴席で女性が来て踊りをおどってくれたが、そのとき、キマダラヒカゲが2頭薄暗い電灯にきていたのが印象的であった。長い間、わが国には、キマダラヒカゲ属は一種だと思われてきたが、別種がいることが判明し、それにヤマキマダラヒカゲと和名がつけられた。形態学的には両者は非常に似ており、その鑑別はかなりむづかしい。ヤマキマダラヒカゲは、佐賀県では脊振山系のみ産することが知られている。

## クロコノマチョウ

*Melanitis phedima oitensis* Matsumura

前羽の長さ：約40mm

1990年11月3日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

淋しさはいつとも分かぬ山里に 尾花乱れて秋風ぞ吹く 島崎藤村

もう、秋が来たことは、だれの目にも明らかである。華々しかった蝶の世界に翳<sup>かげ</sup>が見えるころ、クロコノマチョウが蝶愛好家の注目をひくようになる。

羽の形は違うが、大きさはアオスジアゲハ程度である。羽の表面の模様は目立たない黒褐色である。羽の裏は茶色から黒褐色で、まるで落ち葉のようである。静岡以南の本州、四国、九州に分布する。

九州では屋久島まで見られる。国外では台湾、中国本土、西北ヒマラヤに分布し、東南アジアからも知られている。夏型は6、7月から発生、秋型は9～11月に羽化して越冬する。幼虫の食草はススキ、ジュジュダマなどのイネ科の植物である。

この蝶は日当たりのよい草原にはいない。日中は森や木立の暗い木陰にいて、夕方に活動する性質がある。

私のクロコノマチョウとの最初の出会いは、やはり少年の日であった。秋が深まったころ、自宅の裏にあまりにも落ち葉にそっくりの蝶がいたので、驚いたことを覚えている。

クロコノマチョウに非常によく似た蝶は、ウスイロコノマチョウである。特に両種の秋型は混同されやすい。ウスイロコノマチョウは、屋久島以南に住み、国外ではアフリカと東洋熱帯に広く分布する。九州、四国、本州で発見されるウスイロコノマチョウは、土着種ではなく、南方からの迷蝶である。

## ミヤマセセリ

*Erynnis montanus* Bremer

前羽の長さ：約20mm

1976年5月3日撮影（岩手県下閉伊郡川井村）

地色が黒褐色で、黄色の斑点があるセセリチョウである。雌は前羽中央に白い帯状紋があり、雄にはその模様が無いので、雌雄の区別は容易である。雌雄ともに、色彩・斑紋が目立つ蝶ではないが、本種は、コツバメとともに、わが国の早春の蝶の代表種である。まだ、枯れた草木もある3月中旬に山路を歩くと、この蝶が活発に飛びまわっているのに出会う。地面や枯れ草の上に羽を開いて止まり、一見、蛾のように見える。

北海道、本州、四国、九州など、ほとんど日本全国に分布するが、南西諸島に棲息しないという。国外では朝鮮半島、中国、アムールに分布する東亜特産種である。食草はコナラ、クヌギ、カシワなどのブナ科である。西南日本の平地や低山地帯では3月中旬から4月下旬、本州の高地や北海道などの寒冷地では4月下旬から6月上旬に発生する。幼虫は晩秋になって地表の落葉を綴って、その中に入って越冬する。早春に蛹になり、そして羽化する。

ミヤマセセリは、本来、早春の普通の蝶で、私が盛岡市に在住のときは、発生期に盛岡市内の岩山に行けば毎年見られた。ところが、1980年に佐賀市に住んで以来、佐賀県内では一度もこの蝶に遭遇していない。ミヤマセセリは佐賀県内でも普通にみられていたが、現在は山地帯に少数棲息している稀種であるという。

# ダイミョウセセリ

*Daimio tethys* Ménétriès



前羽の長さ：約18mm

1992年5月28日撮影（神埼郡三瀬村）

ダイミョウとは、“大名”のことであろう。どうして、このように名付けられたかは知らない。羽表の地色は黒色で、白斑がある。雌雄斑紋はほとんど同様に、斑紋だけからでは雌雄の区別は困難である。季節的変異はない。

国外では朝鮮半島、中国、アムール、北ミャンマー、台湾に分布する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。わが国に2種の亜種がいる。北海道、東北、関東、中部地方に産するものは、後羽表が一律に黒色で白紋はない。この亜種は、関東型と呼ばれる。近畿、中国、四国、九州に産するものは、後羽表に白帯があり、関西型と呼ばれる。この両型の分布境界は、裏日本では福井県の中部、表日本では三重県中部であるとされている。薄い白帯や、狭い不完全の白帯を現す中間型も存在する。

関東以南の暖地では年3回発生する。第1化は5月である。東北地方では年2回の発生である。幼虫はヤマノイモ、ツクネイモなどのヤマモ科の植物を食べる。幼虫で越冬する。

飛び方は速いが葉の上に静止することが多い。物に止まるときは羽を水平に広げる。このために、ダイミョウセセリを蛾と誤っている人もいる。雄は葉の上に止まって、自分の縄張りを確保している。佐賀県では、平地、山地に春から秋にかけて見られる普通の蝶である。



## アオバセセリ

*Choaspes benjaminii japonica* Murray

前羽の長さ：約25mm

佐賀昆虫同好会会員 廣川典範氏所蔵標本  
(1988年9月1日, 熊本県八代郡五ヶ荘で採集)

セセリチョウの仲間では大型の種類である。羽の表裏とも暗緑色で、後羽の後角部に美しい橙色の斑紋がある。雄は後羽表面の周辺の黒色部が広いが、雌は同部が広くない。季節的変異は知られていない。

わが国には他に似たような種類の蝶はいないから、同定を誤ることはない。国外ではスリランカ、インド、シッキム、アッサム、ミャンマー、タイ、トンキン、スマトラ、中国、台湾、朝鮮半島南部に分布する。わが国では本州、四国、九州（南西諸島を含む）に産する。寒冷地には、まれである。

通常、年2回（5～6月、7～8月）発生する。幼虫はアワブキ、ヤマビワなどのアワブキ科の植物を食べる。蛹で越冬する。非常に早く飛び回る。とくに、早朝や夕方活動する。花を訪れ、また湿地に集まる習性がある。

アオバセセリは九州では珍しい蝶ではなく、夏に山地に入ればよく見かけていた。私は1980年に佐賀市に来て以来、この蝶を佐賀県内で見かけた記憶がない。佐賀県内では、各地から採集報告がある。

佐賀昆虫同好会会員の溝上誠司氏によると、アオバセセリは、今では佐賀県内では稀少種の1種であるという。平地では環境整備、山地では食樹の伐採などが個体数減少の要因と推定されるという。

# キマダラセセリ

*Potanthus flavum* Murray



前羽の長さ：約16mm

1975年7月27日撮影（岩手県岩手山）

夏の庭に出てみると、ものすごい速さで飛んでいる虫がおり、しばらくすると目の前の葉にぴたりと止まる。近づいて、よく見ると黒と黄色の斑模様の小さい蝶であった。こんな経験はないだろうか。この蝶がキマダラセセリである。キマダラセセリのことを、まるでジェット機のような形だと書いている人がいるが、まさに、ぴったりである。

色彩・斑紋は雌雄同様であるが、雌は雄に比べて、羽が幅広い。春型は、夏型より大型である。国内での地理的変異は知られていない。北海道、本州、四国、九州に分布する。トカラ諸島の“中の島”が、わが国における分布の南限、本邦中部以南の暖地では普通種であるが、寒冷地では少ない。国外では朝鮮半島、アムール、中国、ミャンマーに産する。

寒冷地では年1回の発生であるが、暖地では年2回の発生で、6～7月に春型が発生し、8月下旬～9月に夏型が発生する。幼虫はエノコログサ、ススキなどのイネ科の雑草を食べる。幼虫で越冬する。北海道、本州、南西諸島などにはキマダラセセリとよく似た種類が数種類いる。

佐賀県で、一見キマダラセセリに似ている種類は、ヒメキマダラセセリである。この蝶は富士町から脊振山にかけて棲息している山地性の蝶である。

## コチャバネセセリ

*Thoressa varia* Murray

前羽の長さ：約17mm

1993年5月24日撮影（神埼郡三瀬村）

前後羽の表面は黒褐色で、白色の斑紋がある。裏面の地色は、金色に近い黄褐色で脈は黒く、表面の同様な斑紋があるが、その斑紋が黄色であるから、羽をたたんで止まっている時でも、他のセセリチョウの仲間と区別できる。雌雄の斑紋はほとんど同様であるが、よく見ると、雄は前羽表に斜めに走る光沢をもつ線があるが、雌にはその線がない。

コチャバネセセリは日本の特産種といわれている。北海道、本州、四国、九州に広く分布する。本には普通種と書いてあるが、佐賀県では山地性の蝶で採集報告も多くなく、珍しい蝶といえる。寒冷地では年1回6～8月に発生する。暖地では年2回発生する。春型は4～5月、夏型は7～8月に出現する。飛び方は速く、各種の花を訪れる。幼虫はクマザサ、ミヤコザサなどのササ類を食べる。

三瀬村の診療所の中庭にフジの木がある。棚が壊れて久しかったが、1993年5月の初め、職員が余暇を利用して立派な藤棚を作ってくれた。5月16日は5月晴れの快適な日であった。9時過ぎにセセリチョウの仲間が1頭藤棚に飛来したので、近寄ってみるとコチャバネセセリであった。その日は、数頭以上フジの花に飛来した。その後も藤棚では、この蝶をよく見かけるようになった。三瀬村ではコチャバネセセリが多く見られることを知って、非常に嬉しく思っている。

# チャバネセセリ

*Pelopidas mathias oberthüri* Evans



前羽の長さ：約17mm

1989年10月30日撮影（佐賀市鍋島町蛸久）

黒褐色の小さい蝶で、後羽の表面に白い紋のないのがチャバネセセリの特徴である。目玉が大きくて愛嬌がある。ものすごく速く飛ぶが、花に止まると近付いても逃げようとしなない。

関東以南の平地、低山地に多い蝶である。北部九州では五月ごろ出現して、その後発生を繰り返し、晩秋まで姿がみられる。秋になると、その数が増え庭の花に飛来しているのに遭遇する。

国外では西はインド、スリランカから東はニューギニアまでの東洋熱帯地方に広く分布する。幼虫はイネ、ススキなどのイネ科の植物を食べる。

蝶はアゲハチョウやシロチョウなどのセセリチョウの仲間以外の蝶と、セセリチョウの仲間に二大別される。セセリチョウは、その種類は少ないが分類学上、アゲハチョウなどと対等の位置関係にある。セセリチョウの仲間は英語でスキッパー (skipper) と呼ばれる。

セセリチョウの仲間を蛾<sup>が</sup>と思っているひともいる。蝶は例外なく昼間に活動するが、蛾の大部分は夜活動する。羽の形や色彩が蝶に非常によく似た蛾もある。

蝶と蛾の主な区別点は触角の形である。しかし、蛾の仲間にも蝶によく似た触角をもつ種類もある。個々の特徴を細かくみれば、蝶か蛾かの判断のつかない種類はない。そうはいつても、蝶と蛾は本来同じものなのである。蝶は蛾の中の一握りともいえる。

# イチモンジセセリ

*Pamara guttata* Bremer et Grey



前羽の長さ：約18mm

1993年5月17日（神奈川県三瀬村）

家のまわりや市街地の公園など、どこにでも見られるセセリチョウである。触角が体や羽の長さに比べて目立って短いこと、後羽の白い紋が規則正しく一列に並んでいるのが特徴である。

北海道から南西諸島まで全国的に分布する。わが国中部以南の暖地では、最も普通のセセリチョウである。国外では朝鮮半島、中国大陸、台湾から西は西北ヒマラヤ、東はジャワ、バリ、ボルネオ、セレベスに至る広大な地域に分布する。

九州では、越冬幼虫から羽化した成虫が5、6月に出現する。その後、発生を繰り返すが、晩夏から初秋には最も個体数が多くなる。この時期には、しばしば大発生が起こり、同一方向に大群で飛ぶ現象が知られている。

幼虫はイネ、イヌムギなどのイネ科の植物を食べるので、イネの害虫という汚名をもらっている。イチモンジセセリはどこにでもいるし、しかも各個体は目立たない蝶であるためか、特別の思い出もない。

ただ、小学校か国民学校の国語の教科書だったと思うが、初秋を述べた文に、「頭でっかちのイチモンジセセリが…」と書いてあった個所だけを不思議に覚えている。

そういえば、イチモンジセセリはモンシロチョウやベニシジミなどのほかの科の蝶に比べて、頭でっかちである。

## クロセセリ

*Notocrypta curvifascia* C. et R. Felder

前羽の長さ：約21mm

1977年7月2日撮影（熊本県熊本市）

羽の地色は黒色で、前羽には、大きな白斑と微小白斑がある。雌雄の色彩・斑紋はほとんど同様であるが、雌は羽型が丸味をおび、微小白斑が雄より、やや大きい。国内における地理的、季節的変異は知られていない。わが国には他に似たようなセセリチョウは産しないので、同定に誤ることはない。

クロセセリは東洋熱帯に分布し、西はインド、スリランカから東はジャワ、ボルネオに至り、日本は分布北限にあたる。わが国では屋久島以南の島々と九州本土全県下に棲息する。平地、低山地帯に多い。九州本土では5月上旬から6月に第1化が発生し、第2化は7月上旬から8月、第3化は8月下旬から9月に発生する。

溪流のほとりや樹陰などの陰湿地に多いが、庭の花にも来る。飛ぶのは速いが、飛んでいるときでも前羽の大きな白斑が目立ち、一見して本種だと分かる。幼虫の食草は、ハナミョウガ、ミョウガなどである。老齢幼虫は、これらの食草の葉の裏面を内側にして筒状に巻いて、その中に入っている。蛹で越冬する。

クロセセリは佐賀県下で、平地、山地に普通にみられるセセリチョウなので、普段は別に意識することなく見過ごしている。しかし、北国に住んで、いつも見慣れている南の国の蝶がいなくなると、やはり、少し寂しい気がする。

## 蝶の観察方法

だれにでもできる簡単な、野外における蝶（ちょう）の観察方法を紹介しよう。まず、観察する場所であるが、植物相の豊かな自然環境に恵まれた場所であれば、それに越したことはないが、自分の家や近くの家の庭でもよい。まず、一定の場所にどんな種類の蝶が来るかを記録する方法がある。その観察は、極端な場合は一時間でもよいし、一日でもよい。ある期間継続すれば、貴重なデータになる。

次に、ある一定のコースを歩きながら、道の両わきにどんな種類の蝶が何頭いたかを記録する方法もある。同じ場所を何回か観察すると、季節や環境の変化が、蝶に与える影響の一端を知ることができる。

美しく咲いているアジサイには蝶は来ないが、スマレには蝶がよく来る。どの花に、どの蝶が来るかは興味ある問題である。蝶が訪れる花を訪花植物という。もし、珍しい花に蝶が来たことを確認すれば、観察者がその蝶の新しい訪花植物の最初の発見者になる可能性が大いにある。これらの観察の仕方やまとめ方などは、理科（生物）の先生に指導を受けると得るところが大きい。

観察するには、どうしても、蝶の種類を知ることが最小限必要であるが、これも、最初の間は、はっきりした種類だけに限ってもよい。今日では立派な図鑑があるので、種名の判定は便利である。とにかく、野外に出て、蝶に親しんでみると、素晴らしい世界があることを知ることができる。

## 県外・外国の蝶

## ウスバシロチョウ

*Parnassius glacialis* Butler

前羽の長さ：約36mm

1979年6月10日撮影（岩手県沢内村）

一見、モンシロチョウの仲間のように見えるが、ウスバシロチョウはアゲハチョウの仲間である。ウスバアゲハとも呼ばれることもあるが、私なら、ウスバシロアゲハとも呼びたいところである。氷河時代の遺物といわれるパルナシウス属は、中央アジア高地を中心に、ユーラシア大陸、北アメリカ大陸に分布し、約37種があるという。この属の蝶は、ヘルマン・ヘッセの作品に出てくる、ヨーロッパの高貴な美しい蝶アポロウスバシロチョウや、大雪山に生息する北海道の特産種ウスバキチョウなどを含む。

ウスバシロチョウは北海道、本州、四国に分布し、九州には産しない。国外では中国大陸中部に分布する。年1回の発生。西南日本の低山地帯では、4月下旬から6月上旬にかけて羽化する。本州の高地帯では、6月中旬頃より出現する。幼虫の食草は、地域により異なるが、エゾエンゴサク、ムラサキケマンなどである。

高知の少年時代に、父が登山して、この蝶を採って帰ってくれた。これが私とこの蝶の出会いである。しかし、四国では高山地帯でなければ、ウスバシロチョウには遭遇できない。この蝶に憧れて何十年も経った。初めて野外で、この蝶に出会えたのは、岩手県に赴任した1973年の初夏であった。小刻みに羽を動かしながら、飛んでいるウスバシロチョウに出会えた感激は、ここに書き表すことができない。



## ヒメギフチョウ

*Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko

前羽の長さ：約30mm

1976年4月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）

東北の春は遅い。4月の中旬になっても、まだ、山肌は枯れ草の冬景色である。日陰には残雪さえある。そのような枯れ草の上を飛んでいる、黄色に黒のだんだら模様の小さいアゲハが、ヒメギフチョウである。そのころ、カタクリは花開いており、そのカタクリの花に飛来する。

誰が言い始めたか知らないが、ヒメギフチョウは、“春の女神”と呼ばれる。この蝶が飛んでいるのを見たら、真に、“春の女神”にふさわしいと感じるであろう。雌雄で色彩・斑紋は大差ないが、交尾後の雌は受胎囊を付ける。

ヒメギフチョウは国外では朝鮮半島、中国東北部、シベリアの極東部海岸に分布する。わが国では北海道、本州に分布する。本州では東北地方全県下、新潟、長野、山梨各県の山地帯に産地があるが、その棲息地は北海道と同じく、非常に局部的である。関東地方では赤城山が唯一の産地として知られてきた。

年1回の発生で、北海道では、5～6月、本州では4～5月に出現する。しかも同一場所では、約1週間しかその姿が見られない。幼虫はウスバサイシン、オクエゾサイシンを食べる。蛹で越冬する。ヒメギフチョウによく似た蝶に、ギフチョウがいる。この蝶は日本の特産種であるが、本州にのみ分布し九州には産しない。

## タイガー・スオローテール

*Pterourus glaucus* Linné

前羽の長さ：約55mm

1981年7月7日撮影（米国フロリダ州ゲインズビル）

アゲハチョウは、英語でスオローテールと呼ばれる。タイガー・スオローテールは、中央アラスカ、カナダから北米の大西洋岸にかけて分布する。

この蝶は、米国東部でもっとも普通のアゲハである。西海岸には、本種と非常によく似たウエスタン・タイガー・スオローテールが分布している。

中年以上の方は、“慕情”という映画をご存じのはずである。ヘンリー・キング監督の映画で、主役は、ウィリアム・ホールデンとジェニファー・ジョーンズで、舞台は香港である。

ホールデンの特派員マークとジョーンズのハン女医は愛し合うようになり、丘の上でデートをする。そのとき、マークの肩に蝶が止まる。その蝶は、シロチョウ科の一種であるが、種類は判定できない。

マークが戦場でタイプを打っているときに、白い蝶がきて、タイプライターに止まる。これはモンシロチョウであった。マークは戦死し、ハン女医は思い出の丘の上に、ひとりでやってくる。

そのとき、1頭の蝶が飛んできて木に止まる。この蝶は、マークの化身である。なんと、この蝶はアメリカ産のタイガー・スオローテールか、ウエスタン・タイガー・スオローテールであった。

マークの魂が、はるばる太平洋を越えてきたことになる。両種とも東洋には分布しないので、香港では、これらの蝶に出会えないのは確実である。

## シロオビアゲハ

*Papilio polytes polycles* Fruhstorfer

前羽の長さ：約50mm

(1968年11月17日, 採集地記録なし)

非常にシックな感じのする熱帯蝶である。地色が黒色の雄の羽には、後羽中央に白色紋が帯状に並び、前羽外縁にも後から次第に小さくなる白色紋がある。雌は雄と全く同じ色彩・斑紋の型のもので、雄とは違った型のもので2つの型がある。後者は、後羽中央に白色紋が2つだけあり、赤色紋が大きい。また、前羽外縁部の白色紋がない。

この蝶は、西はインド、セイロンから東はモルッカ諸島、チモールに到る東洋熱帯に分布する。わが国では、奄美大島以南の南西諸島に産する。日本産のものは尻尾（尾状突起）がある有尾型であるが、マレイ地区のものは尻尾がない無尾型である。幼虫は各種のミカン科の植物を食べる。蛹で越冬する。冬期の低温期を除いて年中連続的に発生している。

私とシロオビアゲハとの最初の出会いは、1961年頃、奄美大島に行ったときである。図鑑に、奄美大島には極めてまれと書いてあったので、この蝶を何頭か見たときには驚いた。1965年、沖縄を訪問して、たくさんのシロオビアゲハに出会った感激は今も忘れない。南国の明るい空のもとに、ホテルの庭に植えてある花に、この蝶が次から次々と飛来していた。その時は、まだ、蝶の生態撮影を始めていなかったが、何回もシャッターチャンスがあったと思うと残念でならない。

## エゾシロチョウ

*Aporia crataegi adherbal* Fruhstorfer

前羽の長さ：約38mm

蛹

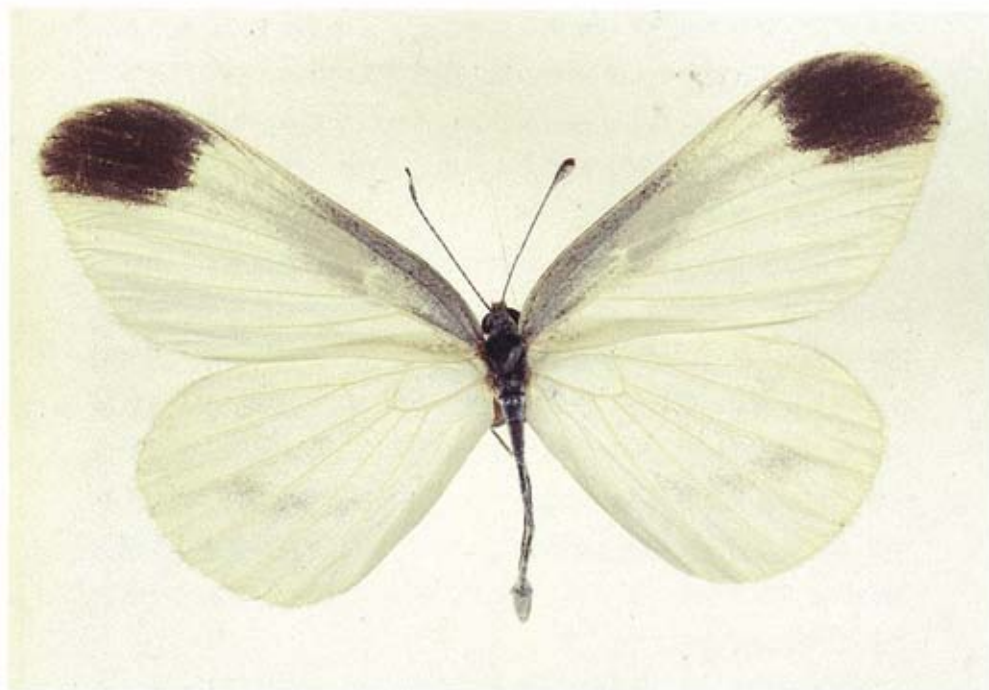
1986年6月17日撮影  
(飼育個体)

蝶に興味をもって、採集に熱中するようになると、モンシロチョウやスジグロシロチョウでは満足しなくなる。シロチョウで、もっと珍しいものを捕ってみたいと望むのは、蝶採集家の自然の成り行きといえる。エゾシロチョウも、魅力あるシロチョウである。しかし、この蝶は日本では北海道の特産種である。標本の交換をすれば別であるが、九州ではそう簡単に手に入らない。

エゾシロチョウは、雌雄ともに羽表は白色で、羽脈は細くて黒色。雌の前羽基半は半透明に近く、珍しい感じのする蝶である。この蝶は国外ではサハリン、朝鮮半島北部、中国東北部、アムール、中国北部からヨーロッパに到るユーラシア大陸の北部に広く分布する。北海道では年1回の発生で、平地では、6月中旬から7月中旬頃、山地では、7月上旬から8月上旬頃に出現する。市街地の公園や人家の庭でも発生する。飛び方は比較的緩やかで、アザミなどの花に集まる。幼虫の食草は、カイドウ、ボケなど。また、サクラやリンゴの害虫とされている。幼虫で越冬する。

1986年6月に、私は札幌に出張する機会があった。エゾシロチョウの撮影に、非常に期待して旅をしたが、この蝶を全く見なかった。見かねた友人が、エゾシロチョウの蛹をくれた。佐賀の自宅で羽化したのがこの写真である。

## ヒメシロチョウ

*Leptidea amurensis* Ménétriès

前羽の長さ：約25mm

1970年7月11日（大分県九重山で採集）

都会地には白い蝶といえば、モンシロチョウかスジグロシロチョウしかいない。珍しいシロチョウを求めるのは、昆虫少年の自然の成り行きである。ヒメシロチョウは、それらの目的の蝶の1種といえる。羽の構造も飛び方も弱々しく、この蝶にヒメシロチョウとはよく名付けたものである。

この蝶は系統的に、モンシロチョウとかなりかけ離れた種類とされている。雌の羽端の黒色部の発達は雄より弱い。ヒメシロチョウは、国外では朝鮮半島、アムール、バイカル、中国東南部などから知られる。わが国では北海道、本州、九州に分布する。しかし、その生息場所は局地的である。九州では九重、阿蘇などの高原地帯の火山草原に局所的にみられるだけである。

幼虫はマメ科植物のツルフジバカマを食べる。蛹で越冬する。九州では、通常、年3回発生する。4月中旬～5月中旬、6月下旬～8月上旬、8月下旬～10月上旬に成虫が羽化する。本種は、その発生パターンから旧北区系の蝶であるという。

ヒメシロチョウに似た種類に、エゾヒメシロチョウがいる。本種は、わが国では北海道にのみ分布する。本種は前羽端がヒメシロチョウより、やや丸みを帯びている点で区別できる。場所によっては、ヒメシロチョウとエゾヒメシロチョウが混棲することもある。

## スジボソヤマキチョウ

*Gonepteryx mahaguru nipponica* Verity

前羽の長さ：約32mm

1979年7月25日撮影（岩手県盛岡市大志田）

雌雄ともに、ヤマキチョウに非常に似ているが、スジボソヤマキチョウは、前羽表の前ベリが桃色でないこと、後羽裏面の第7脈が細いこと、羽全体がヤマキチョウより薄い感じがすることなどで、両者は区別できる。雄の地色は黄色、雌は黄白色である。ヤマキチョウと同じく、前羽先端が尖り、独特の形をしている。

国外では朝鮮半島、中国、台湾（山地）からヒマラヤ地方にかけて分布する。わが国では本州、四国、九州が分布地とされてきた。九州では九重山、祖母山などの高山地帯からのみ知られていたが、1954年以降は、その報告に接しないようである。年1回の発生で、6～7月に羽化する。岩手県で、何十頭もの群をなして、吸水しているのに出会ったこともある。短期間活動して、弱い夏眠に入り秋に再び出現する。成虫で越冬し、春に出現する越冬成虫は、羽の裏に汚点があり、羽も破損した個体が多い。幼虫の食草は、クロウメモドキ科のクロウメモドキ、クロツバラなどで、ヤマキチョウに比べると、食草の範囲が広い。

スジボソヤマキチョウは、私にとって長い間の憧れの蝶であった。1973年、九州から盛岡に赴任した最初の夏に、盛岡市のはずれの「分かれ」という所で、多数の新鮮な個体に出会った。東北の夏にマッチした、あの“黄色”の乱舞が忘れられない。

## ヤマキチョウ

*Gonepteryx rhamni* Linné

前羽の長さ：約35mm

1974年8月2日撮影（英国ケンブリッジ市）

前羽の先端がとがった、独特の形をしたキチョウである。雄の羽表は濃黄色、雌の羽は蒼白色である。わが国では長野、山梨両県を中心とする本州中部と岩手県、青森県の東南部に産するが、最近、著しく減少しつつある種である。

国外では朝鮮半島、中国東北部、アムールからヨーロッパにかけて欧亚大陸の北部に広く分布する。幼虫はクロウメモドキ科のクロツバラを食べる。ヤマキチョウの分布が狭い地域に局限しているのは、食草がクロツバラに限られていることと、この食草がどこにでもないことによる。

わが国では成虫は7、8月に羽化する。成虫で越冬し、きれいな羽で春出現する。ヤマキチョウは、英語でプリムストーン（硫黄）と呼ばれる。バタフライ（蝶）とは、バター・カラード・フライ（バターの色をした飛んでいる虫）のことだそうである。

4月の快適の晴れた1日に、英国ケンブリッジ市のはずれを歩いてみた。驚くことに、それまでは全く見られなかったヤマキチョウが、どこに行っても、一斉に飛んでいた。それをみて、私は、これこそ、まさにバター・カラード・フライだと思った。

日本では蝶といえば、アゲハチョウ（ナミアゲハ）と、モンシロチョウが代表であるが、英国では、ヤマキチョウがバタフライの原型かと思った。もちろん、これは私の独断である。

註：日本産ヤマキチョウの学名は

*Gonepteryx rhamni maxima* Butler である。

## ツマベニチョウ

*Hebomoia glaucippe circia* Fruhstorfer

前羽の長さ：約50mm

1985年7月4日撮影（沖縄県与那国島）



(1985年7月4日, 沖縄県与那国島で採集)

いかにも熱帯蝶らしい大きな美しいシロチョウである。シロチョウ科のチョウといえば、モンシロチョウやスジグロシロチョウのように、ゆっくり飛ぶイメージがあるが、ツマベニチョウは全然違う。力強く羽ばたき、すごく早いスピードで飛び、旋回範囲も広く、これがシロチョウかと思うほどである。雄の羽表は白色で、前羽先半部は黒色で囲まれた、あざやかな橙赤斑がある。雌の羽表の地色は、通常、灰色で、橙赤斑は赤みが少ない。地域によって多少の違いがあり、いくつか亜種がある。

インド、スリランカからモルッカ諸島に至る東洋熱帯に広く分布する蝶である。わが国では南西諸島に普通で、九州本土では鹿児島県大隅半島南端佐多岬から、薩摩半島南端部にまで分布する。幼虫の食草は、ギョボクである。鹿児島県では、年4回程度の発生と考えられている。ツマベニチョウは、東洋熱帯、亜熱帯に多く、非常に目立つ蝶である。この蝶の力強い飛翔を見れば、ああ、南の国にきたのだとつくづく思う。

私とこの蝶の野外での最初の出会いは、佐多岬であった。学生時代に大学の寮友と一緒に、5里の山道を歩いて行った。途中、数多くのツマベニチョウに出会ったが、ついに1頭も捕れなかった。最初に、この蝶を捕ったのは、奄美大島であった。その後、東南アジアに行ったときに、各地で採集した。

註：鹿児島県本土産のツマベニチョウの学名は

*Hebomoia glaucippe shirozui* Kurosawa et Omoto



## ベニモンシロチョウ

*Delias hyparete indica* Wallace

前羽の長さ：約39mm

1975年11月17日撮影（タイ国/バンコック）

いかにも、熱帯蝶らしい派手な色彩のシロチョウである。雄の羽表は白色、前羽の先端部は黒色で、中に不鮮明な白斑がある。後羽裏面の基半部は黄色を帯び、外側部に橙赤紋が並ぶ。羽脈は黒色である。雌では、羽表の先端部にある黒色部と後羽外縁の黒色部が広いので、雌雄の区別は容易である。裏面は、雄と大差なく、強いていえば、前羽の白色部がやや、黒色を帯びる。

本種は東洋熱帯に広く分布する。台湾にも分布するが、あまり普通ではないという。台湾産のものは、別亜種で後羽裏面の橙赤紋が、黒褐色で縁どられている。食餌植物は、ヤドリギ科の植物である。飛び方は早くない。

私は1975年、タイ国を訪問したが、そのときに、バンコックで、この蝶に初めて出会った時には感激して撮影した。その後、1982年に再びタイ国に行ったが、この蝶は、どこに行っても見かけるシロチョウであった。

印象に残っているのは、国境の町メサイを訪問したときである。メサイの町は、タイ国の最北端で川をはさんで、ミャンマー（当時ビルマ）国境に接するところである。川に懸かった橋の上には、露天商が沢山おり、頭蓋骨の付いた水牛の角などを売っていたのも面白かったが、橋の横の木の上を、ベニモンシロチョウが1頭飛んでいた光景が私の脳裏に鮮明に残っている。

# ウラナミアカシジミ

*Japanica saepestriata* Hewitson



前羽の長さ：約20mm

1979年8月2日撮影（岩手県岩手郡玉山村）

羽表は橙黄色のシジミチョウである。雌は前羽端に、はっきりした黒帯があるが、雄にはその黒帯がないので、雌雄の区別は容易である。裏面は独特の縞模様で、雌雄同様である。表面の色彩は、他のアカシジミの仲間に似ているが、裏面を見れば同定に迷うことはない。

国外では朝鮮半島、中国東北部、ウスリーに分布する。国内では北海道、本州、四国に分布し、九州には産しない。年1回の発生で、6月上・中旬から発生する。ものすごい数が見られることもある。幼虫はクヌギ、ミズナラ、コナラなどの植物を食べる。幼虫は葉を綴って巣を作り、その中に潜んでいる。卵で越冬する。

この蝶との最初の出会いは、盛岡市郊外の“<sup>ん</sup>分かれ”という場所であった。たくさんのウラナミアカシジミが発生していた。

同じ属の蝶に、アカシジミがいる。アカシジミは北海道、本州、四国、九州に分布する。佐賀県内でも鳥栖市、佐賀郡、神埼郡、小城郡、東松浦郡から採集報告がある。しかし、1980年頃から減少の傾向をたどっている。ムモンアカシジミは北海道、本州に分布し、九州には産しない。チョウセンアカシジミは、珍蝶中の珍蝶である。岩手県に産するが、私はまだ見たことがない。私にとって幻の蝶である。

## オナガシジミ

*Araragi enthea* Janson

前羽の長さ：約17mm

1979年8月2日撮影（岩手県岩手郡玉山村）

岩手県にはオニグルミの木が多い。天気の良い夏の夕方、オニグルミの木の下にいてみると、活発に樹上を飛び交うシジミチョウをみることがある。これがオナガシジミである。羽表は黒褐色一色できれいな蝶ではないが、長い尻尾（尾状突起）があり、羽裏の独特の黒褐色の斑点がある。雌雄の色彩・斑紋はほとんど同じである。

国外では朝鮮半島、中国東北部、中国西部、ウスリー、アムール台湾に分布する。国内では本州、四国に分布する。本州中部以北の山地のクルミ林にはまれてない。中国地方では鳥取県、岡山県、島根県に局所的な産地がある。

年1回の発生で暖地では7月下旬に、北海道では8月になってから出現する。昼間はクルミの木の葉の上に静止している。同じオニグルミの木に、多数の固体が発生しているのが普通で、撮影のチャンスは多い。幼虫は、オニグルミ、ヒメグルミなどのクルミ科の植物を食べる。卵で越冬する。属は異なるが、羽裏の斑紋がオナガシジミに、やや似ているのがウスイロオナガシジミである。

ウスイロオナガシジミの羽表は灰褐色で、後羽に白斑がある。この蝶は北海道、本州、九州に分布する。九州では、霧島山の栗野岳のカシワ林が産地として知られている。一般に固体数は少ない種類である。

# ジョウザンミドリシジミ

*Favonius cognatus* Staudinger



前羽の長さ：約20mm

1975年6月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）



1975年7月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）



1975年7月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）

ミドリシジミの仲間が多いが、どれも限られた場所に、しかも、限られた時期にしか出現しないので、日常、目にふれることはない。戦前まではミドリシジミの仲間は、ゼフィルス (*Zephyrus*) 属として扱われていた。ゼフィルスとは、ギリシャ神話の“そよ風”あるいは“西風”の精であるという。その後、再検討されて属が細分されたために、この属名は用いられなくなったが、今でも、ゼフィルスといえば、ミドリシジミの仲間を指す言葉として残っている。

ジョウザンミドリシジミは、エゾミドリシジミとよく似ており、その鑑別には熟練を要する。北海道、本州に分布する。本州では山地に産し、群棲することが多い。北海道産は本州産に比べて、一般に小型である。国外では朝鮮半島、中国東北部に分布する。成虫は年1回の発生で、7～8月に出現する。幼虫は、ミズナラを食す。卵で越冬する。

私がミドリシジミの仲間と野外で初めて出会ったのは、職に就いてからである。その年の7月上旬、先輩に九重山に案内して頂いた。2、3種のミドリシジミを採集して山に登った。カシワの林に出会い、木々を叩くと、ものすごい数のハヤシミドリシジミがいる事を発見した。今思うとシャッターチャンスが何回とあったが、その頃はまだ、蝶の撮影を始めていない時期であった。

## エゾミドリシジミ

*Favonius jezoensis* Matsumura

前羽の長さ：約20mm

1975年7月20日撮影（岩手県岩手郡滝沢村）

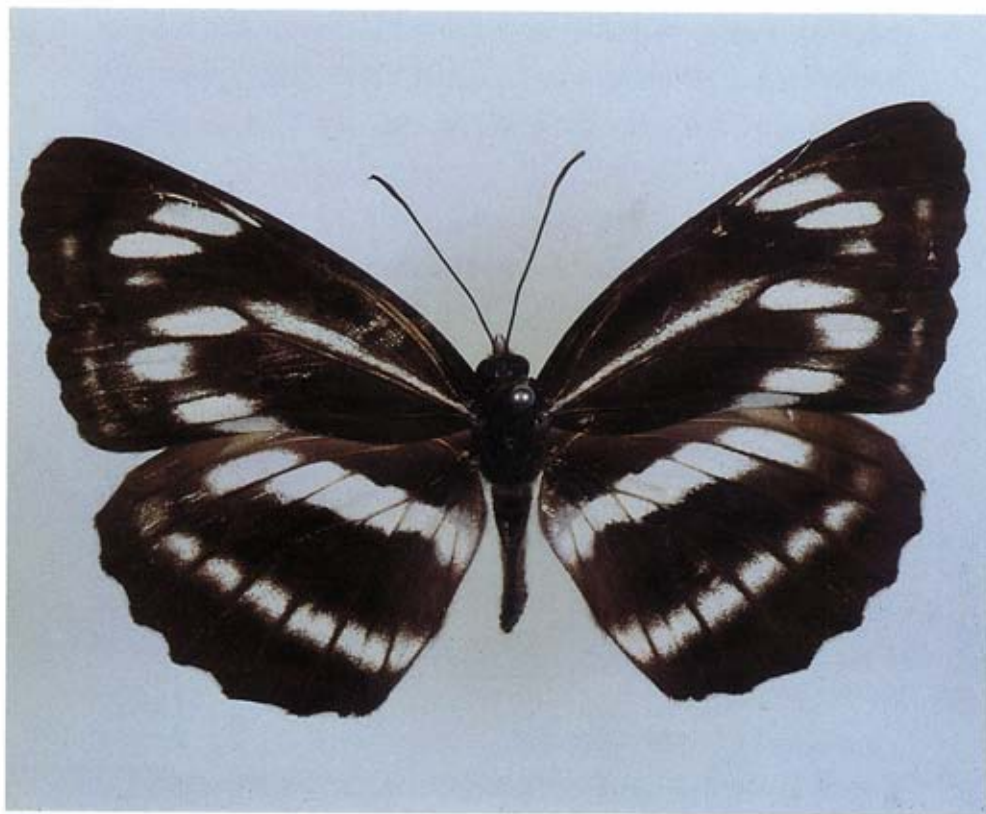
エゾミドリシジミは日本の特産種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道、本州北部～中部の山地帯にはかなり見られるが、本州の西南部では高地帯のみに産し、まれな種類である。九州では九重山、祖母山からのみ知られている。年1回、6月下旬から8月に発生する。幼虫はミズナラを食べる。卵で越冬する。

岩手県はミドリシジミの仲間の宝庫といえよう。1972年の夏、私は盛岡を訪問した。市の北側にある観光地の岩山の頂上に登ると、ブナ科の木が植えてあるのが眼についた。ミドリシジミの仲間がいるかもしれないと、あまり期待しないで木をゆすってみた。2、3頭のミドリシジミの仲間が飛び出してきた。種類はわからなかった。

翌年の正月に、私は盛岡の大学に赴任した。岩手大学教授の岡野磨瑛郎先生と親しくさせて頂き、山野の採集にご一緒させて頂いた。また、私自身も出張したときの余暇には、積極的に蝶を求めて付近を探索した。そのおかげで、盛岡滞在中にミドリシジミの仲間をはじめとして、いわゆるゼフィルスといわれる種類を何種類も撮影したり、採集することができた。

私の盛岡時代は本職も順調に進み、ゼフィルスをはじめ、それまでまだ見たこともなかった多くの蝶に出会えて、人生で真に素晴らしかった日々であった。

## ミスジチョウ

*Neptis philyra excellens* Butler

前羽の長さ：約40mm

1973年7月8日採集（岩手県川井村区界）

雌雄で色彩・斑紋で大差はなく、雌が雄に比べて大型である。大きさや色彩・斑紋がオオミスジに似ているが、前羽表面の付け根から中央に走る白線が、オオミスジでは上向きに凸凹があるが、本種は、その白線が一直線なので、両種は容易に区別できる。

日本、朝鮮半島、中国、台湾に分布する東亜の特産種である。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布する。国内での地理的変異は知られていない。わが国本土の全土に分布する割には、いずれの地でも個体数は少なく、樹上高く飛び、めったに低く下りてこないので採集は容易ではなく、非常に珍しい種類といえる。

年1回の発生で、低山地は5月頃から出現する。幼虫はイロハカエデ、タカオカエデなどのカエデ科の植物を食べる。幼虫はカエデの葉に止まって越冬するが、枯れた葉が落ちないように吐糸で、その葉を枝にくくりつけておく性質がある。他の葉が枯れて落葉しても、幼虫が付いている葉は落ちないので、それらの葉を探せば幼虫を容易に見できる。

私とミスジチョウの出会いは、1973年7月8日のことであった。盛岡市から山田線に乗って川井村区界くどかいに行った。そこで、偶然目の前に飛んできた蝶を網の中に入れたのが、ミスジチョウであった。その後は、一度もこの蝶に出会っていない。

## オオミスジ

*Neptis alwina kaempferi* de l'Orza

前羽の長さ：約42mm

1975年7月22日撮影（岩手県盛岡市大志田）

わが国では、最大のミスジチョウの仲間である。前羽の前へりに沿う白帯の形は、この蝶の仲間の同定に重要である。オオミスジは、その白帯が一本で分割されてなく、しかも、ギザギザがあるのが特徴である。雄は羽の形が狭長で、前羽端のとがり雌より強い。

国外では朝鮮半島、中国大陸に分布する。わが国では北海道と本州に分布する。北海道では南西部に棲息するが、極めてまれである。東北地方から中部地方の山地では、まれでない。分布の西南限は、伊吹山脈といわれている。年1回の発生。平地～低山地では、6月上・中から発生する。山地では、7月が盛期で、8月までみられる。幼虫は、ウメ、アンズ、スモモなどを食べる。幼虫で越冬する。

蝶の採集を始めて、コムスジを捕ると、コムスジより珍しいミスジチョウの仲間が欲しくなる。オオミスジは憧れの的となる。1973年の夏は、私が始めて盛岡市に住み始めた年である。休日には、よく蝶を求めて歩いた。オオミスジは、盛岡周辺では、そんなに珍しい蝶ではないが、必ず出会えるものでもない。私は電車に乗って山の中の駅に行った。駅の近くに、沢山のウメの木を植えてある農家の庭があった。そこに少年の日から憧れ続けたオオミスジがたくさんいた。シャッターチャンスも十分あった。

## クジャクチョウ

*Inachus io geisha* Stichel

前羽の長さ：約30mm

1981年9月17日撮影（青森県弘前市）

クジャクが羽を広げた模様のような、美しい色彩の羽を持つ蝶である。英語でも、この蝶はピーコック peacock（クジャク）と呼ばれる。わが国では北海道、東北地方、関東地方、中部地方に産する。

分布の北限は白山山塊とされている。九州にはクジャクチョウは分布しない。国外ではイギリスを含むヨーロッパからシベリア、アムール、中国東北部、朝鮮半島、サハリン、国後島、択捉島に分布する。

この蝶の学名のイオはギリシャ神話のゼウスの恋人イオの名である。日本産の亜種名はゲイシャであるが、これはもちろん、芸者さんの意味である。この蝶が美しいところから、ゲイシャと名付けられたと思う。

クジャクチョウは私の忘れ得ない蝶である。私は1973年の正月、福岡市から北国の盛岡に赴任した。クジャクチョウは、盛岡市では全く普通種だと聞いていたが、春から初夏になっても一度も見なかった。

本当に普通種だろうかと思っていたとき、1973年7月7日に盛岡市内の岩山で、サナギからかえったばかりの新鮮な個体に会った。思わず「ザ・ピーコック」と叫んでしまった。

クジャクチョウにはカラフルな南方系の蝶とは違ったシックな美しさがある。まさに北国の美人といったところであろう。この写真は、私が弘前大学での講義を終えて撮影したものである。



# キベリタテハ

*Nymphalis antiopa asopos* Fruhstorfer



前羽の長さ：約40mm

1975年8月10日（岩手県下閉伊郡川井村で採集）

キベリタテハは、クジャクチョウとともに、代表的な北国の美人と  
いったところである。羽表の地色は黒色で、外へりは黄色に縁取られ、  
その内側には瑠璃色の斑点が並び、真にシックな美しい蝶といえよう。  
色彩・斑紋は雌雄同様である。

国外ではサハリン、朝鮮半島、中国よりヨーロッパ、北米大陸に分  
布する。わが国では北海道、本州に産する。分布の西限は白山山塊と  
されている。北海道では全島の平地、山地に普通にみられる。本州で  
は東北、関東、中部のおよそ1500～2500メートルの山地帯にみられる。  
平地で発見されることは、極めてまれである。国内での地理的変異は  
知られていない。

年1回の発生で羽化が遅く、7月下旬頃から成虫が出始め、8月が  
羽化の最盛期となる。成虫は活発に飛び、路上や岩上に静止すること  
も多い。カエデ類、ミズナラなどの樹液を吸う。幼虫は、ダケカンバ  
などのカバノキ科、ドロノキなどのヤナギ科の植物である。成虫で越  
冬する。

キベリタテハは、九州や四国などの暖地にはいないので、盛岡市に  
赴任するまでは、その生きた姿をみたことはなかった。1975年、岡野  
磨瑛郎教授の案内で、岩手県川井村の平津戸に行った時に、初めて出  
会った。新鮮な個体を採集することができたが、とうとう撮影の機会  
はなかった。

## オオムラサキ

*Sasakia charonda* Hewitson

前羽の長さ：約55mm

飼育，1985年6月23日羽化（大分県日田郡大山町産）

私が北九州市のある病院に勤務していた時のことである。私は外来診察室の壁に、台湾の蝶の標本をかけていた。それを見て、1970年(昭和45年)7月上旬、通院していた小学校の女の先生が、家の近くにオオムラサキがいるという。私は、自分でも生きたオオムラサキは、熊本県葦北郡でそれらしいのを中学生のとき一度見ただけで、そんな簡単にいるはずがなく、おそらく、カラスアゲハでも、オオムラサキと誤っているだろうと本気にしなかった。ところが、4、5日して、「オオムラサキを採りました」といって、先生は紙の箱に蝶を入れてきた。箱の蓋を開けてみると、なんと、正真正銘のオオムラサキが3頭も入って、ばたついているではないか。もう、その時の驚きと叫びが表現できないくらいであった。紙の箱の中で暴れたので、鱗粉が落ちてしまって標本にはならない。

それで、早速、1970年7月19日に、その場所にいった。暑い夏の日であった。たしかに、そこでは目の前にオオムラサキが何頭も飛んでいた。少し離れた場所にクヌギ林があり、1本のクヌギの木の根元に2、3頭のオオムラサキが樹液を吸っていた。網をかぶせて捕らえようとしたが、うまく網がかぶせられない。手を蝶の近くに持っていったが、逃げようとしないう。さっと指を伸ばして、オオムラサキをつかんでしまった。なんと、珍蝶オオムラサキをつかみとってしまったのだ。こうして、2頭のオオムラサキをつかんで採集した。その標本は今も、私の標本箱の中にある。その後、オオムラサキを見たのは、九重山で一度だけである。

オオムラサキは、国外では、台湾の北部山地、中国大陸、朝鮮半島

## 蛹



に分布する。わが国では、北海道南西部、本州、四国、九州に分布する。佐賀昆虫同好会の古賀善十会長は、何十年も、佐賀県内で、オオムラサキを追っておられるが、今日まで、まだ発見されておらず、採集記録もない。佐賀県、長崎県には、この蝶は分布しないと考えられている。

オオムラサキは、タテハチョウ科の中で最大級の大きさである。雄の羽の表面は、強く輝く基半部の紫と、それを囲む周辺部の黒で、黄斑、白斑が散在する。雌は、雄より、さらに大型であるが、紫色の輝きはない。オオムラサキの高貴な美しさは、世界に誇る日本の国蝶にふさわしい。日本の切手にも採用されているので、この蝶は広く知られている。わが国西南部の暖地では、主に山地帯にのみ産し少ない。年1回の発生で、暖地では、6月下旬から、寒冷地では、7月中・下旬から羽化する。クヌギ、コナラ、エノキなどの雑木林に生息することが多い。集団でクヌギの木に止まって吸蜜することがある。食餌植物は、ニレ科のエゾエノキ、エノキである。

オオムラサキの生態写真集も発刊されているが、私はまだ、この蝶の野外での生態撮影の経験はない。この成虫の写真は、佐賀昆虫同好会の会員坂井文雄氏から贈られた蛹が、1985年6月23日に自宅で羽化したものである。

## キバネセセリ

*Bibasis aquilina chrysaeglia* Butler

前羽の長さ：約23mm

1975年8月10日撮影（岩手県）

大型のセセリチョウである。雌雄で斑紋<sup>はんもん</sup>が違う。雄の羽表は黄褐色で紋がない。雌では前羽表に1個の黄色斑と、その外側に黄色斑が曲線状に並んでいる。

国外では朝鮮半島，中国東北部，ウスリー，アスコルド，アムール，中国西部に分布する。北海道では平地，山地にかけて全島に普通にみられる。本州では，東北地方，関東北部，中部地方の山岳地帯にみられ，近畿，中国，四国，九州では山地に棲息するが，まれである。

年1回の発生で，7～8月に出現する。幼虫はハリギリ科のセンノキを食べる。幼虫で越冬する。キバネセセリは，花や獣糞に集まり，湿地にも来る。止まるときには，ダイミョウセセリのように羽を開かない。私がキバネセセリに初めて出会ったのは岩手県である。九州では見たことがない。

## ギンイチモンジセセリ

*Leptalina unicolor* Bremer et Grey

前羽の長さ：約15mm

1979年7月1日撮影（岩手県）

羽表はいちように濃い黒褐色で斑紋<sup>はんもん</sup>はない。後羽裏面は地色が黄色で、中央に銀色の帯が1本存在する。この帯は、春型で銀白色で鮮やかであるが、夏型では、地色に近くなり目立たない。雌の羽表の黒色は雌が雄より、やややすい傾向がある。また、雌の前羽端<sup>とが</sup>は雄に比べて尖りが強い。このように、雌の前羽端が雄より尖るという事実は、他の蝶とは全く逆で異例のことである。雌雄ともに、腹部が長いのも特徴のひとつである。

本種に似た蝶はわが国にはいないので、同定を誤ることはない。地理的変異の存在は知られていない。国外では朝鮮半島、中国東北部、中国北部に分布する。わが国では北海道、本州、四国、九州に分布するが、産地は局部的である。寒冷地では、年1回6～7月に発生する。暖地では、年2回の発生で、春型は5～6月、夏型が7～8月に発生する。場所によっては、さらに、第3化（夏型）が8～9月に発生する。幼虫の食草はイネ科のススキ、幼虫で越冬する。

この蝶は一般に山地性の蝶で、日当たりのよい草地を弱々しく飛び、蛾のように見える。ギンイチモンジセセリは、佐賀県からは知られていない。私とこの蝶の最初の出会いは、九重山の草原であった。その後は、岩手県でよく見かけた。岩手県では、珍しい蝶とは思わなかった。

## 外国の蝶

どこか見知らぬ土地に旅をするとき、私は、まず、その土地にどんな蝶がいるかと期待する。もっとも理想的な旅は、蝶を追う目的の旅であるが、そのような機会は私には非常に少ない。多くは旅の目的は別にあつて、余暇に蝶を撮影したり、採集したりすることになる。外国に行く場合に、その蝶に非常に期待するが、現実には蝶を楽しむ機会はないのが当たり前と思わなければならない。外国に蝶を求めて行ける人を羨ましく思う。

私の場合、外国にゆくのは学会出張が主なものであるから、滞在期日も短く、また、タイミングが良いとは限らない。タイミングが悪くと、蝶の宝庫であっても成果は得られない。温帯地方であれば冬は駄目だし、熱帯、亜熱帯地方では乾期は蝶が極端に少ない。

私はフィリピン、グアテマラを訪問する機会があつたが、ちょうど乾期の終わりであつたため、成果が得られず悔しい思いをした。最初に台湾を訪問したときには、ものすごく多くの蝶に出会えたが、2回目は時期が悪く、雨も降っていて全く収穫はなかつた。逆にタイ国に調査研究に行ったときは、雨期の始まるの時期で、多くの蝶に出会う機会があつた。雨期といっても、一日中雨が降るわけではなく、雨がザーと降った後は太陽が射し、多くの蝶が一斉に飛び出るのは壮観であつた。

米国のハワイ大学、英国のケンブリッジ大学教育病院（英国には日本のような大学付属病院はない）には、それぞれ、約1年間留学して現地に滞在したので蝶を追う機会があつた。ただ、残念なことに、ハワイの時代には撮影は実行しておらず、英国の時代も、まだ蝶の撮影を始めたばかりであつた。ハワイではほとんど年中、どこでもオオカバマダラに出会えた。さらに、ハワイ特産種のカメハメハタテハと、羽の裏面が美しい緑色のブラックバーニージミミを採集できた。日本では南北アルプスの高山蝶である珍蝶クモツマキチョウが、ケンブリッジでは自宅の庭に飛来するのを見て夢のような気分であつた。その他、ゲイトキーパーや日本では見られないシジミチョウの仲間などに出会えた。

私は、いまだ、オーストラリア大陸には行ったことがない。そこには、日本では見られない珍しい蝶がたくさんいる。オーストラリアの蝶を撮影するのが私の現在の夢である。

## 採集記

## 与那国島蝶採集記

晴れた日には台湾が望見できるという、わが国最西端の島、与那国島。そこには世界最大の蛾といわれるヨナクニサンが棲息し、わが国ではそこにだけにしかない蝶もいる。八重山諸島のなかでも、石垣島や西表島には行ったことがあるが、与那国島にはまだ足をのぼしたことがなく、一度、訪ねてみたいと前から憧れていた。

ところが今回、はからずも沖縄訪問のチャンスが来た。この機会を逃がすと、与那国島採集の可能性はますますすくなる。なんとかして、この島に渡ろうと計画した。ところが、与那国島に行くには福岡から那覇に飛び、那覇で南西航空に乗り換えて、石垣島までボーイング737で行けるが、石垣島から与那国までは、僅か19席しかないDHC-6の小型機が就航しているだけである。しかも、その座席を沖縄以外で確保することは、非常に難しい。このようなわけでかなり無理して日程を組んだ。

1985年7月3日、16時40分頃、私は初めて与那国島に足跡を印した。福岡を立つ時は雨であったが、ここは焼けつくような真夏の太陽が輝いている。タクシーで予約してあった祖納部落の民宿に着く。夕方の五時頃とはいえ、まだ、太陽が高い。旅装を解くと明日のために下見でもしておこうと、網とカメラを持ってでかける。

テンダバナと書いてある方向表示に従って少し歩くと、川があり島仲橋という名前の橋を渡る。下を見ると、大きなカニが洲から川岸の方に逃げて行く。こんな大きな陸産のカニは初めてみる。なんだろう？あとで話に聞いたところ、ヤシガニであったらしい。橋を渡って約50メートル先に、ハイビスカスの花が沢山あるのが見える。ツマベニチョウが2、3頭飛んでいる。

ツマベニチョウ、私が最も好きな蝶のひとつだ。ツマベニチョウを見ると、数々の思い出が蘇る。小学校低学年で理科の授業も始まっていなかった頃、理科室の準備室のドアが開いていたので、何気なく覗くと、真正面に置いてある蝶の標本が目に入った。今思えば、台湾の蝶の標本であったらしい。見たこともない蝶ばかりがあるなかに、なぜか、ツマベニチョウに強く魅せられた記憶がある。毎日、毎日、蝶の標本を見るために、理科室の前を行ったり来たりした。しかし、そのドアが開いている時は少なかった。

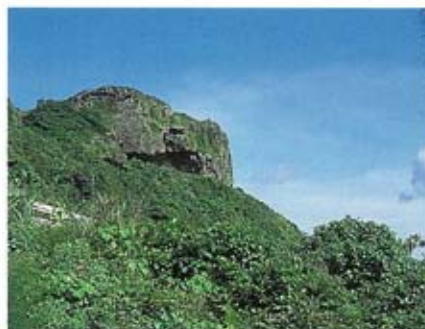
大学に入って夏休みに友人と二人で、鹿児島県大隅半島を訪れた。もちろ

シロミスジ



(1985年7月4日 与那国島で採集)

テンダバナ



▲与那国島の象徴。その頂上付近にはツマベニチョウ、タイワンシロチョウが多い。

ん、その目的はツマベニチョウを採集するためであった。その頃は、今と違って、交通の便は悪く20キロメートルぐらひは歩いて行った。初めて野外で、生きたツマベニチョウを見た感激は忘れられない。シロチョウのくせに、こんなに速く飛ぶとは、全く夢想だにしていなかった。その時は蝶の近くで、何回か網を振ったが、とうとう、1頭もとれなかった。その後、奄美大島で初めて本蝶を採集し、フィリピン、タイ国でも採集した。また、熱帯地方に行く度に何回かツマベニチョウに出会った。

ここ、与那国のツマベニチョウは黄色味を帯びている。すぐに近くに飛来してくるので採集しやすい。2、3頭を網に入れ、破損していないものだけ選び、他は逃がしてやる。カラスアゲハ、タテハモドキがいる。キチョウらしきものがある。網に入れる。ふっと目の前をセセリが横切る。さっと網を振って捕獲する。小さいシジミがいる。ハマヤマトシジミだろうか。とにかく、この三種は同定が難しいので、帰ってからゆっくり検討することにする。ふと前の方を見ると、ミスジの類がいる。ここに産するのは、リュウキュウミスジか目的のシロミスジだ。急いで走り寄ろうとすると、なんとということか、後ろから2台車が来た。あっという間に逃げてしまう。大ききからシロミスジのように思われてならなかったが、確認できなかった。残念で仕方がない。明日に期待するほかはない。かなり疲れていたの、民宿に帰る。

明けて1985年7月4日、7時に起床する。空は晴れ渡り、風も無い。7時30分には出発する。祖納からタクシーでテンダバナ頂上近くまで、車の行ける所まで行く。テンダバナは、与那国景勝地のひとつである。清水が湧きでており、ここから祖納の部落が一望できる。かつてこの島を支配した、女傑サンアイイソバの記念碑もある。車を下りて大きな岩を見ながら、清水の湧

く場所に通じる熱帯植物の茂った道を進む。

くさむらに、小さいシジミが何頭も飛んでいる。ハマヤマトシジミであろうか、とにかく採集しておく。清水の湧く場所に着くまでに、ツマベニチョウが何頭もすぐ近くまでくる。ツマベニチョウはシロチョウでありながら、ものすごく速く飛ぶが、ツマベニチョウよりもさらに速く飛ぶシロチョウが、ツマベニチョウに混じって何頭も飛んでいる。目指す台湾シロチョウであろうか、網を振るがなかなか捕獲できない。そのうち、やっと1頭を網に入れる。やっぱり、台湾シロチョウだ。ツマベニチョウ、台湾シロチョウの乱舞のなかにカタブシリアが来る。また、アオスジアゲハ、ナミアゲハ、ミスジの類も来る。向こうから、大きな白い蝶が来る。急いで近くに行く。オオゴマダラだ。網に入れる。少し破損している。ツマベニチョウを4、5頭網に入れて比較的破損が少ない2、3頭のみ捕獲して他は逃がしてやる。

ずんぶん長い間、そこにいたようであるが、まだ、わずか1時間ぐらいしか経っていない。ツマベニチョウ、台湾シロチョウは多いが、撮影のチャンスはない。採集案内書にしたがって、製糖工場の前に移動することにする。テングバナと書いてある標識の所から、舗装した広い道路を下って、昨日のハイビスカスの所にくる。やはり、ツマベニチョウが多い。橋を渡って、炎天下を案内書を見ながら、製糖工場の方に歩いてゆく。その場所はテングバナのちょうど下にあたる。案内書に書いてあるように、崖の上からツマベニチョウ、台湾シロチョウが舞い下りてくる。しばらく、その付近をうろうろする。オオゴマダラが2頭もつれながら飛んでいる。道路のすぐ側に、赤い花が咲いている場所があり、そこに、ツマベニチョウが入れ換わり飛来

#### オオゴマダラ



(1965年8月20日 沖縄県で採集) 与那国林業園場の入口の前に来る。圃

している。すぐ近くまで接近しても逃げない。急いで、カメラを出して構える。何回かシャッターチャンスがあった。うまく撮れていることを祈る。

近くの食堂で昼食後、12時30分頃、こんどはタクシーで宇良部岳付近に行く。コンクリート道を登り、左に折れる所から歩いて登る。ミスジの類がいるので網を振る。シロミスジだ。だがかなり、破損している。メスアカムラサキが飛来する。捕獲に失敗。タテハモドキ1頭捕獲する。さらに登ると、

場内には、ハイビスカスが植えてあり、ツマベニチョウやクロアゲハが飛んでいるのが見える。圃場には、立ち入り禁止と書いてあるので、そこから引き返す。川に沿って歩き続け、島仲橋の所まで来る。

かなり疲れていたが、シロミスジを採集する目的で再びテングバナに歩いて登る。標識のある場所まで来たが、蝶の状態は午前中と変わりはない。シロミスジもいない。そこで、また、昨日のハイビスカスの所に下りてきた。そこでは、あいかわらず、ツマベニチョウが多い。イシガケチョウ、アオタテハモドキを目撃する。メスアカムラサキ、ウスキチョウ（ギンモンウスキチョウ）を採集する。碑の立っているところで、シロミスジ1頭を網に入れる。破損していない新鮮な個体だ。やっと、目的を達する。

東・湊氏は、与那国島の蝶として、偶産種、迷蝶を含めて、アゲハチョウ科9種、シロチョウ科14種、マダラチョウ科8種、ジャノメチョウ科1種、タテハチョウ科15種、シジミチョウ科11種、およびセセリチョウ科10種の合計68種をあげている。今回、著者が採集または目撃して確認した種類は、アゲハチョウ科6種、シロチョウ科5種、マダラチョウ科3種、タテハチョウ科7種、シジミチョウ科1種、およびセセリチョウ科1種の計23種であった。

終わりに、今回の採集地についてご教示いただいた白水 隆博士に感謝する。

#### 引用文献

1. 小路嘉明：沖縄・八重山蝶採集ガイド、蝶研出版、1985。
2. 東清二、湊和雄：琉球の蝶、新星図書出版、1983。

(北九州の昆虫 第32巻・第2号より 1985年7月発行)

#### 台湾シロチョウ



(1985年7月4日 与那国島で採集)



## 英国ケンブリッジの蝶

### 英国の蝶

英国の蝶の種類は日本のそれに比べてはるかに少ない。Howarth (1973) は全英国の蝶75種をあげているが、それらの中には、絶滅した種類、迷蝶および他の国から移動してくるが土着しない種類も含まれており、土着種は53種に過ぎない。

絶滅した種類としては、*Aporia crataegi* (Black-veined White. 日本産亜種エゾシロチョウ) が広く知られている。本種は、かつてはイングランド及びウェールズに広く分布していたが、今世紀初頭に絶滅した。

迷蝶としては、1953年1頭だけ採集された *Nymphalis xanthomelas* (Scarce or Eastern Tortoisell, 日本産亜種ヒオドシチョウ), *Everes argiades* (Short-tailed Blue, 日本産亜種ツバメシジミ), ならびに *Danaus plexippus* (Monarch or Milkweed. オオカバマダラ) 等がある。

土着種でないものとしては、*Vanessa atlanta* (Red Admiral, 日本産亜種アカタテハ), *Vanessa cardui* (Painted Lady, 日本産亜種ヒメアカタテハ), *Colias croceus* (Clouded Yellow, 日本産近似種モンキチョウ) 等がある。英国特産種というものはなく、ただ、亜種として、キアゲハの英国産亜種 *Papilio machaon britannicus* があるに過ぎない。このように、英国の蝶相は日本に比べて貧弱であり、その上、日本産との共通種も少なくない。

著者は1973年12月より、1975年1月まで、英国ケンブリッジに滞在する機会があり、ケンブリッジの蝶を一夏だけ採集した。

### ケンブリッジ採集記

ロンドンからケンブリッジに行く間には、山は見えない。時々、丘が見え、麦畑が広がっている。ケンブリッジに着いても、山は全く見えない。平野が遠くに広がっている。1974年の冬は思ったほど寒くなく、雪は1日、しかも粉雪しか降らなかった。年によっては雪が積もることもあるという。北に位置するにもかかわらず、冬の寒さは、ちょうど九州の冬のようにであった。ただ、夏は東北の夏より涼しい。

1974年1月1日から勤務したが、2、3月の寒い間は全く蝶の姿は見なかった。

3月末、突然暖かい日がやってきた。周囲が麦畑にかこまれた病院の3階から下を見ると、1頭のタテハがいるではないか。しかし、そこには直接下りられないので種類は確認できなかった。

4月になると寒い日が続いたかと思うと、暖かい日が2、3日続いた。ふと外を見ると、黄色い蝶がとんでいる。近寄ってみるとヤマキチョウだ。春の陽気に誘われて、越冬した個体が一時にとび出てきたらしい。

近くの森 (spinney) に入っていくと、植物はまだ全く冬景色で、若草は萌え出していない。そこに1頭の小型タテハが飛来した。すぐ近くで止まる。何と、コヒオドシだ。みると、あちらこちらに少なくとも数頭以上いる。急いで家に帰り、カメラを持参する。撮影成功。

5月になると、春がくるのは日本の東北地方に似ている。5月19日、うららかな春の日に自宅の庭に白い蝶が舞い込んできた。クモマツマキチョウだ。日本では少なくとも平地には産しない。日本産のものには、2つの亜種があるのを思い出したが、もちろん、どちらもいまだ野外でおめにかかったことはない。我家の庭にクモマツマキチョウが飛来するといえば、日本ではどんなにうらやましがられるだろうなどと想像する。これだけでも、英国に来た甲斐があったというものだ。1頭だけでなく、隣家の庭にもきている。

家の近くで、2、3頭採集した後、例の森に行く。もう若草の時期となっており、モンシロチョウ、エゾスジグロシロチョウ等が多く飛んでいる中に混じって、クモマツマキチョウが次から次へと飛来する。ちょうど、西洋の春の原野に乱舞する女神のようだ。ああ、この光景を日本の蝶仲間に見せてやりたい。

クモマツマキチョウはなかなか止まらず、ついに撮影は断念する。そのうち、大きなモンシロチョウが力強く飛んでいる。モンシロチョウよりは大きいばかりでなく、飛び方も力強い。ネットの中に入れる。予想した通り *Large White* だ。日本にはいない種類だ。オオモンシロチョウと呼ぶことに1人で決めてしまった。

向こうの高い木から、こちらの木に1頭のシジミが飛び移る。何だろう。30分に1頭ぐらゐの割合で目撃したが、遂にとれなかった。

その後、5月中はこのシジミを見たが、6月にはもう見られなくなった。6月上旬までは、モンシロチョウ、エゾスジグロシロチョウ、オオモンシロチョウがみられた。

7月6日ヨーロッパ各国の訪問から帰って、何か変わった蝶がいてくれと念じつつ、急いで例の森に行く。

もう、若草の時期は過ぎて、夏草の時期になっている。その繁った夏草の

間を1頭のジャノメチョウ科の蝶がとんでいる。近付いてみると、日本にはいない Meadow Brown だ。もちろん初めてみる蝶だ。あまり速く飛ばず、採集は容易であるが、撮影は植物がじゃまして仲々近づけない。それでも、何回かシャッターチャンスに恵まれた。

7月7日 森に行く。

Meadow Brown を撮影した。7月14日の観察では、Meadow Brown はまだいたんでなかったが、7月21日の観察では、もう新鮮なものはほとんどなかった。

その日、ジャノメチョウ科の1種の Ringlet 1頭採集した。

7月21日 自宅の庭で新鮮なシータテハ目撃。

7月28日 例の森で、新鮮なヤマキチョウを目撃、新鮮なコヒオドシを採集。前から疑問におもっていた例の高い木から時々下りて来るシジミをまた発見したので、網をふるって捕獲に成功した。はやる心をおさえながら取り出してみると、何とこれはルリシジミ。

8月2日、また例の森に行く、モンシロチョウが相変わらず多い。ヤマキチョウの撮影成功。また、Gatekeeper を撮影し、採集した。

場所を変え、公園の裏で、コヒオドシと Gatekeeper を撮影。植物のトゲがささり痛い。

8月6日 森で、クジャクチョウ1頭採集した。日本に帰って、盛岡産と比較しようと思う。

8月18日 朝、自宅の庭でヤマキチョウ目撃。例の森には、モンシロチョウが相変わらず多い。Meadow Brown 数頭目撃。ルリシジミ1頭目撃。

8月20日 例の森で、今までみたこともないシジミを発見、早速撮影する。本種は Common Blue といい、日本には産しない。

以上で、採集日記は終わる。その後は、オックスフォード大学に国内留学し、再びケンブリッジに帰ってきたが、蝶のシーズンは終わっていた。9月上旬オックスフォード大学の庭にコヒオドシが数頭いたのは印象的であった。本種は英国では、もっとも普通のタテハと思われる。

(北九州の昆蟲 第22巻・第1号 1976年2月発行より)

コヒオドシ



(1974年8月2日撮影)

クモツマキチョウ



(1974年5月19日採集)

Gatekeeper



(1974年8月2日撮影)

## フロリダに蝶を追う

1981年7月から8月にかけて、米国フロリダ州に滞在する機会があった。

私にとって、今回の米国訪問は1964年から1965年にかけてハワイ大学留学をはじめとして4回目になる。

フロリダ訪問は今回は2度目で、最初は1969年、タンパ近くの親友を訪問して、そこに1週間滞在した。その時、近くの公園で短時間に多くの蝶に出会い、それらの何頭かを採集し今も標本として保存している。

その時の経験から、フロリダに2ヶ月近くも滞在するならば、かなりの蝶にめぐりあえるかもしれないと私は大きな期待を抱いた。私は現在、蝶の採集は全くといっていいほど行っておらず、もっぱら野外における蝶の撮影を行っている。今回も、仕事の余暇を利用してフロリダの蝶を撮影するため、愛用のカメラを持参した。

### 野外に蝶を求めて

1981年6月30日

佐賀の自宅を出る時はひどい雨であった。14時25分JAL80便で福岡空港を出発、成田に向かう。成田空港ではあまり待つことなくJAL002便に乗り込み18時10分離陸、同日10時30分頃サンフランシスコに到着。空港近くのホテルにチェックインした。

15時頃、ホテルの横のブーゲンビリアによく似た花にスオローテール (Swallowtail, キアゲハの類) が2、3頭来ていた。

7月1日

朝7時にサンフランシスコ空港を出発し、途中、アトランタで乗り換え、夕方6時20分、やっと目的のフロリダ州のゲインズビュに着く。

同地はみわたす限り平地で、樹木は亜熱帯や熱帯性のものである。蝶は1頭も見なかった。

7月2日

フロリダ大学に行く。構内は広い。黄色い蝶が1頭構内を飛んでいた。

オオカバマダラ



(1969年9月20日米国フリーブランドで採集)

Giant Swallowtail



(1981年7月9日撮影)

7月6日

フロリダ大学動物学教室を訪問し、蝶の研究者として知られているエミール博士とブローワー博士に逢う。ブローワー博士は自作のオオカバマダラ (Monarch) の映画をみせてくれる。

オオカバマダラのもつ食草 milkweed に由来する毒性物質の研究は大変興味があり、また、ものすごい数のオオカバマダラがメキシコの山中に乱舞する姿は表現しようのないぐらい壮麗であった。

7月7日

エミール博士とブローワー博士の好意で、大学院生のエリアザー君と他の2人の大学生が私を車で郊外につれて行ってくれる。外はものすごく暑く、日本の夏の比ではない。

いつも蝶が多いという湖のほとりに行ったが、蝶の姿は全くみられない。別の場所に行くと、やっとキチョウ (Sulphur) の一種、ジャイアント・スオローテール (Giant Swallowtail)、タイガー・スオローテール (Tiger Swallowtail)、Checkered White、Gulf Fritillary がとんでおり、これらを撮影した。

キチョウの一種は多分、メキシカン・イエローではないかと思うが自信はない。日本のキチョウや、スジボソヤマキチョウと同様に、水を求めて多数の個体が集まるのを確認した。

タイガー・スオローテールは運よくちょうど目の前の花に止まった。急いで近付くと近付き過ぎたが、もう時間の余裕もないのでシャッターを押した。

7月11日

日曜日なので朝ゆっくり起きて、10時頃宿舎のまわりを歩く。ジャイアント・スオローテールを目撃したが、撮影できなかった。

池のほとりで、Viceroy を撮影する。

7月24日

今回の渡米の目的のひとつであった1週間の研修コースを終えた。そのコースはかなりハードスケジュールなもので全く疲れはてた。しかし、やっと終えた満足感はあった。

前から約束していた通り、午後6時にフランク博士が私を迎えに来てくれた。

フランク博士は昆虫学者で、蚊の専門家である。1980年、わが国で行われた国際学会に出席され、その後、蚊の専門家である茂木幹義博士の家を訪問された。そのとき以来の出会いである。

今回は週末を利用して、私をここゲインズビュから車で数時間もかかるマイアミに近いペロビーチの彼の家に乗せて行こうというわけである。

ゲインズビュで夕食して彼の運転で出発、私はその日までのコースの疲れでほとんど車中は眠っていた。彼の家に着いたのはちょうど真夜中であった。

Viceroy



(1981年8月1日撮影)

7月25日

フランク博士につれられて彼の勤務地である Medical Entomology Laboratory に行く。ここは、フロリダ大学の附属研究所になっている。

研究所の裏のジャングルに入ってゆく。ちょうど、ターザン映画に出てくるシーンそっくりである。蚊の多いのに閉口する。蚊の研究所がここに設立されている理由がうなづける。

白い蝶がいるが種名は判断できない。Buckeye がかなりとんでいる。

研究所に帰り、構内の林に入る。ここでは時々あるゼブラ (Zebra) がみられるという。1時間以上探したがとうとうゼブラに出会わず残念。

Zebra Longwing



(1992年4月11日グアテマラで採集)

7月26日

朝から研究所の裏のジャングルに行く。Buckeye、白い蝶、セセリチョウの一種を撮影した。午後、研究所長の自宅の庭に行く。庭には多くの花が咲いていた。見事なジャイアント・スオローテールがとんできたので撮影する。

夕方は Gillman 家に招待された。奥様は日本人でしかも福岡の方。日本食をご馳走になる。大変豪華な食事で、久しぶりの日本食に感激した。

7月27日

朝7時40分頃、フランク博士の運転で家を出る。カナダの昆虫学者と3人で、フロリダ半島のちょうど反対側のメキシコ海岸の Sarasota にある有名な蝶の博物館を訪問するためである。

フランク博士が運転する。行けども行けども同じような景色が続く。オレンジの畑の広大さに驚く。途中、植物園に寄って、ワニ (アリゲーター) をみたりして、昼過ぎやっとな Sarasota の街に入る。約束の時間をかなり過ぎて Allyn Museum に到着した。

この博物館は実業家である Allyn 氏が創立した個人のものであるが、近くフロリダ大学に移管されるとの由である。

館長に紹介される。館長 Allyn 氏は穏やかな老紳士で、日本から見学に来たことに大変喜んで館内を案内して下さいました。この博物館は標本の保存のみでなく、プロフェッショナルの昆虫学者が何人もいて、蝶の研究を行っており、館長自身も電子顕微鏡を用いて蝶の鱗粉の形態学的研究を行っておられる。

館内には約85万の世界中の蝶の標本が保存されている。未整理の標本室に

は、みたこともないような蝶が展翅板にのせられてあった。

岡野磨瑛郎岩手大学教授のキシタアゲハ (*Troides*) の研究に興味をもっていたので、世界中のキシタアゲハの標本をみせていただいた。

図書室にはたくさんの文献があり、その中には日本の図鑑もあった。

私達はさめやらぬ感激で博物館を去り、その日の夕方、私はフランク博士とわかれて、1人でバスに乗り、再びゲインズビルに帰った。到着した時は0時を過ぎていた。

7月29日

宿舎の近くの橋の上で Skipper を撮影した。キマダラヒカゲに似たのがいて、撮影を試みたが失敗した。

8月1日

フロリダ大学構内の池の近くで Gulf Fritillary, Long-tailed Skipper を撮影した。

メキシコ北部を含めて、北アメリカには約700種の蝶がいるといわれる。

1970年、フロリダ訪問の経験から、今回は1カ月以上もフロリダに滞在するので、かなりの蝶に出会う機会があるだろうとおおいに期待して出発した。

ところが運悪く蝶の少ない季節であって、1カ所に多くの蝶がいる光景を目撃することがなく、また、今回はじめて見る蝶の種類はほんのわずか、数種にしか過ぎなかった。

しかし、フロリダ大学でエミール博士、ブローワー博士にオオカバマダラのすばらしい映画をみせてもらったことや、野外に連れて行ってもらったことは予想外の好運であった。また、珍蝶ゼブラはみることができなかったけれども、フランク博士にフロリダの大自然を案内してもらったときは、少年の日の昔にかえったようで嬉しかった。

Allyn Museum of Entomology を訪問できたことも大きな収穫であった。一度は、このような素晴らしい博物館を訪問してみたいと、長い間夢みていたからである。

(北九州の昆蟲 第30巻・第1号 1983年2月発行より)

Gulf Fritillary



(1981年8月1日撮影)

Long-tailed Skipper



(1981年8月1日撮影)

## タイ国北部蝶採集記

1983年夏、著者はタイ国北部に、約1カ月滞在して、蝶採集ならびに野外での蝶撮影の機会を得た。その場所は、チェンマイ大学構内ならびに、チェンライ県の一部である。タイ国北部は蝶の宝庫ともされ多くの美しい蝶と出会うことができた。ここに、その採集記を記録する。

### 蝶採集記

July 12, 1983

バンコックから空路チェンマイに着く。タイ国に来て、初めて近くに山を見る。チェンマイ大学の宿舎に入る。チェンマイ大学は、8000エーカーもある広大な敷地をもっており、そのキャンパスの中には森があり大きな池があって、至る所に美しい花が咲いている場所があり、その豊かな自然環境は真に素晴らしい。

宿舎に到着したのは、もう17時過ぎであったが、宿舎のまわりに咲いている赤い花に白斑の大きなナガサキアゲハが1頭来ていた。また、数頭以上のオナシアゲハがひっきりなしに、その花を訪れていた。

July 16, 1983

チェンライ県メーハー村の診療所に行く。診療所の裏は低い山になっている。ネットを持って山に登って行く。人家の横の小道に大きな褐色のタテハが止まっているのではないかと。急いで網をふる。捕獲成功！あとで調べたら、*Vindula erota* であった。夕方、チェンライ市の宿舎の庭で、オナシアゲハを撮影した。

July 17, 1983

メーサイの町を訪問する。ここは、タイ国の最北端で、川を挟んでビルマの国境に接する所である。川岸の木に、ベニモンシロチョウ (*Delias hyparete*) が飛んでいるのが印象的であった。帰りに、Fish Cave という所を訪問する。池のほとりに、沢山の白い蝶がいた。容易に採集する。これは、カワカミシロチョウ (*Appias albina*) であった。また、チングチョウ科の1種 (*Libythea myrrha sanguinalis*) を1頭採集した。

1頭の美しいマダラチョウの類、多分、*Euploea* の1種と思われる蝶が飛来した。網をふりながら、かなり格闘したが、とうとう取り逃がしてしまった。

July 20, 1983

13時30分頃、メーハー村の診療所の小高い裏山に行く。古びた小屋があり、その横の土の上に、大きなタテハが1頭いた。上から網を被せて捕獲する。トラフタテハ (*Parthenos sylvia*) である。本種は、日本では、1961年に、沖縄で1頭のオスが迷蝶として採集されているが、台湾には分布しない。

小道を歩いている中に、長い尾状突起がある橙色のシジミに出会い、容易に採集する。もちろん、始めてみる種類だ。後で調べたところでは、(*Loxura cassiopeia cassiopeia*) であった。本種も台湾には分布しない。

夕方、再びこの近くで、キマダラルリツバメ (*Spindasis takanonis*) と同じ属のタイワンプタオツバメ (*Spindasis lohita*) を1頭採集した。本種は台湾に産する。近縁種であるミツボシフタオツバメ (*Spindasis syama*) も台湾にもタイ国にも分布する。

July 22, 1983

9時30分頃から山に入る。目的は肺吸虫 (*Paragonimus*) の第2中間宿主であるサワガニの採集である。最も蝶採集に恵まれた機会であるので張り切って出発する。藪の中の小道を通ると、まずシロオビヒカゲ (*Lethe*

### オナシアゲハ

*europa*) に出会い、これを採集する。シロオビヒカゲは、わが国では八重山諸島の石垣島と西表島のみ分布し、その亜種名は (*Lethe europa pavidata*) である。本種は多くの亜種に分類されており、今回採集した亜種は (*Lethe europa niladana*) と同定された。

沢を進んで途中休んでいると、目の前にアオシアゲハ、ミカドアゲハが飛来する。網を振ったが、取り逃がしてしまう。さらに沢を進んで、日陰の場所に来たとき、1頭のシジミが来て、近くの葉に



(1983年7月13日撮影)

止まった。翅の裏面は全体に黄色で、後翅の後縁には赤い帯がある。とにかく、初めてみる種だ。網をふる。採集成功。蝶を網から取り出してみると、傷んではいない。極めて珍しい種類ではないだろうかと期待する。後で調べてみると、なんと、これは、普通種のウラフチベニシジミ（ベニモンシジミ、*Heliophorus epicles*）の1亜種で、(*Heliophorus epicles indicus*)であった。本種はRiley (1929)により、7亜種に分けられているという。

帰路に、速く飛ぶアオスジアゲハ属 (*Graphium*) と思って採集した1頭は、なんと、フタオチョウの類の *Polyura arja arja* だったのは、大きな収穫であった。

やはり、山に入った甲斐があって、この日は蝶採集には最も恵まれた日であった。

July 23, 1983

メーハー村の診療所の小高い裏山で、アオタテハモドキ、タテハモドキ、*Loxura cassiopeia cassiopeia*などを撮影した。なお、キシタアゲハらしい蝶1頭を目撃する。キシタアゲハは、その後、チェンライ市内で採集することができた。

August 7, 1983

われわれの仕事も無事終わって、いよいよ、チェンマイに帰ることになる。車でチェンライを出発する。途中、おもいがけなく、Ban Pa Aie という所にある山の中の診療所に立ち寄る。診療所の門の所に、一見、ツマグロヒョウモンに似ている *Cethosia cyane* と、ナガサキアゲハが飛んでいた。網は別の車に入れていたので、仕方無く、これら両種を手で捕獲した。同場所で、10時15分から、ちょうど2時間滞在したが、少なくとも、20種以上飛来したのを目撃した。網を手元に持っていなかったのが悔やまれてならない。

チェンマイには午後到着した。宿

ベニモンシロチョウ



(1983年7月25日撮影)

舎の前の高い木に、今まで見たこともない、白い尾の長いシジミが多数いる。なかなか、下には下りてこない。その中、やっと、1頭採集した。*Neomyrina nivea nivea* という種類で、図鑑には *rare* と書いてある。その後かなりの時間ねばったが、とうとうそれ以外は採集できなかった。

(ちょうちょう 9巻5号1986年より)

ウラナミシロチョウ



(1983年7月13日撮影)

キベリアゲハ



(1983年7月13日撮影)

Leopard Lacewing



(1975年11月20日撮影)

Larger Yamfly



(1983年7月23日撮影)

ジャノメタテハモドキ



(1983年7月23日撮影)

Grey Pansy



(1983年7月23日撮影)

## タイ国北部にキシタアゲハを追う

キシタアゲハ属 (Genus *Troides*) の蝶は代表的な熱帯蝶で、その美しい姿にあこがれない蝶愛好家はいないであろう。

著者が、野外における本蝶との最初の出会いは台湾であった。台湾の南端にあるガランビー公園を訪問したとき、1頭のミノスキタアゲハが頭上に飛来した。思わず網を振ったが、わずか、10センチ程度の差で蝶にとどかず取り逃がしてしまった。太陽の光をうけて黄金色に輝いたその姿は今でも忘れ得ない。

次の機会は1975年、タイ国バンコックにあるルンビニ公園に行ったときである。初めて野外でみる熱帯蝶の生態撮影に夢中になっていたとき、突然、眼の前に1頭のミノスキタアゲハがゆっくり樹上から下りて来た。私はわれを忘れてカメラを放り投げ、急いで網を振った。次の瞬間、網の中でバタバタしている蝶を認めたときの喜びは表現しようもなかった。その個体は今も私の標本箱の中に収まっている。

1983年、7月から8月にかけて約1カ月間再びタイ国を訪問する機会を得た。この期間中に多くの蝶を採集したが、今回はキシタアゲハを追った記録を記す。観察、採集を行った場所は、タイ国北部のチェンライ県とチェンマイである。なお、本文中で単にキシタアゲハと記すのは正確に言えば、キシタアゲハ属の種を指す。

July 20, 1983

チェンライ県のメーハー村の診療所で仕事をしていた。天候は雨期で、雨が強く降ったかと思うと熱帯の太陽が輝く。そのような時に蝶が多い。タイ国に来てもう10日以上も過ぎた。その間、多くの蝶を採集したが、いまだキシタアゲハは一度もみない。キシタアゲハはここでも非常に珍しいのか、あるいは時期が悪いのかもしれないと思ったりしていた。診療所の周辺をまわって、昼食のため帰りかけたとき、1頭のキシタアゲハが眼の前を飛んで過ぎ去った。ちょうど、網をたたんだばかりで運悪く取り逃がしてしまった。

July 23, 1983

診療所の裏山で採集を行う。その時、キシタアゲハらしい蝶が1頭飛んで



いたが確認できなかった。

July 25, 1983

朝から雨が降る。今日はわれわれの休日。一行はチェンライの市内見学することになり、10時頃宿舎を出発。網を持参する。タイ国には寺(wat)が多い。今日は主として寺を回る予定である。最初の寺から次の寺に車で行く、寺の庭に赤い花、多分ハイビスカスが咲いており、ツマベニチョウが飛来していたので採集した。三角紙に入れ終わるとほとんど同時に1頭のヘレナキシタアゲハが飛来した。

網をつかんで10メートルぐらい走る。犬がほえながら追ってきたが、かまっていられない。蝶に近づいてさっと網をふる。遂に捕獲!! またキシタアゲハが1頭飛来する。同僚の1人が私の網を持って走る、彼も捕獲した。これはミノスキタアゲハであった。

再び車に乗って次の寺に行く。そこで、同僚はさらにミノスキタアゲハ1頭を採集した。宿舎に帰ると、何とかしてキシタアゲハを採集した寺に再び行きたくなったので1人で出かけた。15時30分頃再び1頭のミノスキタアゲハを採集した。

July 26, 1983

メーハー村の隣のパラエ村の寺の庭で診療を開始する。午前中、キシタアゲハらしき蝶1頭を目撃。午後、確実に1頭のミノスキタアゲハを確認した。

July 30, 1983

チェンライからメーハー村に行く途中に、メチャアン病院がある。その病院の門で車を待っていると、2、3頭のキシタアゲハが飛来した。そのうちに大きな雌1頭が飛来、取り逃がしてしまった。山を越えて部落に入ったが、そこでも雨の中を2、3頭キシタアゲハが飛んでいるのを目撃した。

July 31, 1983

7月25日にヘレナキシタアゲハとミノスキタアゲハを採集したチェンライ市内の寺に同僚と2人で9時30分頃行く。雨が降っていたが既にキシタアゲハが2、3頭舞っていた。しかし、取り逃がしてしまう。次々に飛来する。観察すると、数分間に1頭の割合でどこからか飛来してくる。あまり速くはないがなかなか採集できない。その理由のひとつとして、どこでもそうである

が、寺の中には10匹以上の犬がおり、蝶を追って走ると吠えながら一斉に飛びかかってくるので、あまり走り回れない。それと蝶は花にもくるが、寺の中の花を傷めることはできないので、花にきたとき花と共に網をかぶせられない。

太陽の光を受けて黄金色に輝くキシタアゲハは実にすばらしいが、雨の中を悠々と飛ぶこの蝶の姿も印象的であった。

ここでやっとミノスキタアゲハ1頭捕獲、同僚も同種を1頭捕獲した。しかし、雄ばかりで雌は全然みられなかった。

おわりに

Pinratana はタイ国のキシタアゲハ属として、次の種を記録している。

1. *Troides helena cerberus* (C. & R. Felder)
2. *T. aeacus praecox* (Fruhstorfer)
3. *T. aeacus aeacus* (C. & R. Felder)
4. *T. aeacus thomsoni* (Bates)
5. *T. amphrysus ruficollis* (Butler)

Okano & Ohkura ならびに岡野によれば、*T. aeacus* は南インドの *T. minos* と同種と考えられるという。両亜種を分ける立場をとるとすれば、2は *T. minos praecox*、3は *T. minos aeacus*、4は *T. minos thomsoni* となる。また、Pinratana によれば、*T. minos aeacus* はタイ国では北部のメーホンソンとチェンマイから採れているとしているが、標本の図示はない。今回著者が採集した個体は次の種であった。

1. *Troides helena cerberus* (C. & R. Felder)
  - 1 male Chiang Rai 25 VII 1983
2. *T. minos praecox* (Fruhstorfer)
  - 2 males Chiang Rai 31 VII 1983

なお、*T. minos thomsoni* および *T. amphrysus ruficollis* はともにタイ国の半島部に分布しており、まれな種とされている。

従って、今回の調査では7月中旬から8月上旬にかけてはタイ国北部には *T. helena cerberus* と *T. minos praecox* が普通に見られたが、*T. minos aeacus* の存在は確認できなかった。

終わりに、種名を同定していただき、*Troides* の分類について御教示をいただいた岩手大学教授岡野磨磋郎博士に感謝する。

(佐賀の昆虫No14より)



(1983年7月31日、タイ国チェンライ市で採集)

## 香港ビクトリア公園の蝶目撃・撮影記録

1983年11月23日香港で行われた学会の昼休みを利用して、会場のエクセルシアホテルのすぐ近くにある市内の Causeway Bay に面したビクトリア公園に行った。

天候は快晴で、ちょうど九州の5月の終わりのような気候であった。ビクトリア公園は日比谷公園の約2倍の大きさといわれており、香港市民のレクリエーションの場でもある。

公園内の花が咲いている場所を探しているうちに、Omega Clock と書いてある花時計のところに来た。花時計の周辺の花にスジグロカバマダラがいるのを発見した。よくみると、花壇の中に、さらに2、3頭いる。柵があって中には入れない。仕方がないのでその花壇の上の方が丘になっているので、回り道をして丘の上に登る。そこには低い木々が植えられており、シロオビアゲハが飛んでいた。突然、ツマベニチョウが飛来してきて、頭上高く舞上がって行った。いつも、力強く飛ぶこのシロチョウをみるとつくづく南国にきたなあと思う。遠くの方にセセリチョウの類が2、3頭飛んでいるのを目撃する。

この公園内では採集はできないし、また、当日はカメラも持参していなかった。バードウォッチングに対してバタフライウォッチングという言葉は聞かないが、初めての土地、とくに外国に来て採集はしなくても、飛来する蝶を見るだけでも結構楽しいものである。それでしばらくの時間、この公園にどんな蝶がいるか野外観察することにする。

シロオビアゲハが次々にこの丘の上に飛来する。小型の個体が多いようだ。ときどき、*Catopsilia* 属の蝶、多分ウスキチョウの類が飛来するが、ツマベニチョウのように力強く飛ばない。キチョウ属 (*Eurema*) の種も2、3頭目撃した。ルリマダラ属 (*Euploea*) の蝶も時々飛来した。ミスジチョウ属 (*Neptis*) の蝶は1頭だけ目撃したにすぎない。低い木立の上をアゲハが舞い上がる。多分、オナシアゲハと思われるが、ミカドアゲハのようにみえないこともない。ただ、ミカドアゲハとすれば、もう少し青色を帯びていてもいいのではないかと思ったりする。そのうち、近くに来たのでよくみるとオナシアゲハであった。

こうして時間を過ごしているうちに、2頭のシロオビアゲハが求愛行動を

しながらゆっくり近づいて来た。眼の前をゆっくり飛び、手でつかまえられる所まで近寄って来た。なかなか得られないシャッターチャンスであったが、残念なことにそのときカメラを持参していなかった。その後、チャパネセセリ群の一種と思われるセセリチョウ1頭が眼の前の近くの葉に止まった。静かに手を差し出しても逃げようとしないので、示指を脚の下にもってゆくと、蝶が指に乗り移ってきた。しばらくの間、指の上にこのセセリを乗せて楽しんだ。

公園に来てから約1時間以上このように飛来する蝶を見て楽しんだ。帰りに、同公園内で1頭のタテハモドキと1頭のアカホシゴマダラらしい蝶を目撃した。

翌1983年11月24日、フリーの日であったから10時過ぎに再びビクトリア公園に歩いて行った。もちろん、今回は愛用のカメラを持参した。

本日も快晴。九州の初夏のような気候であった。公園に入って、真っ直ぐに例のOmega Clockの花壇の前に行く。赤い花にスジグロカバマダラが来ていた。花壇の中には他に2、3頭の蝶が花に止まっている。花壇の中には入れないので、遠くからこれらの蝶を撮影するか、蝶がこちらに近寄ってくる機会を待つ以外はない。今まで、蝶の近接撮影のみ行ってきたが、少し離れた所からの撮影もときにはいいだろうと思って数回シャッターをきる。花壇の中には、ヤマトシジミのようなシジミの類もいたが種類は確認できなかった。

Clockの上方、つまり丘の上に登って蝶を探す。シロオビアゲハがいたが、シャッターチャンスはない。昨日と同じく、ツマベニチョウと*Catopsilia*属の蝶が時々飛来する。再び、丘を下って、Omega Clockの花壇の入口に来た。鉄柵のすぐそばの花にスジグロカバマダラが来ていたので、そっと近づいて鉄柵の間から数回シャッターをきった。花壇の奥の方をみると、リュウキュウアサギマダラか、コモンアサギマダラ属(*Tirumala*)の蝶が1頭いるではないか。しかし、どうしても撮影するには距離があり過ぎる。近付いてくるのを待つことにする。しばらくねばっていると、数メートルのところに来たのでシャッターをきる。

また、花壇の上の丘に登る。*Catopsilia*属の蝶1種が飛来して花に止まったので、近づいて撮影した。そのうち、昨日と同じように、2頭のシロオビアゲハが求愛行動しつつ、ゆっくり飛来し、近くの葉に止まったので急いでシャッターをきる。1回しかシャッターチャンスがなかったが、うまく撮れていることを期待する。ツマベニチョウが葉に止まった。近付いたが、逃げられてしまう。次に、例のリュウキュウアサギマダラか、コモンアサギマダラ

属*Tirumala*の1頭が近くに来て止まった。何回もシャッターチャンスがあった。

その後しばらく丘の上にはいたが、12時の大砲の音ドンを聞いて公園を去った。

以上で、この2日間、目撃した蝶の種類は少なかったが、結構楽しい時間を過ごすことができた。

(佐賀の昆虫No.14より)

#### ウスコモンアサギマダラ



(1984年11月24日撮影)

## マレーシアの蝶

台湾シロチョウ



1975年11月24日撮影



スジグロカバマダラ  
(1975年11月24日撮影)



アオタテハモドキ  
(1975年11月24日撮影)



Nigger  
(1975年11月25日撮影)

グアテマラの蝶



Striped Ringlet  
(1975年11月25日撮影)



Giant Sulphur の1種  
(1992年4月12日撮影)



Banded Demon  
(1975年11月25日撮影)



セセリチョウの1種  
(1992年4月12日撮影)

## 野外における蝶の生態撮影

「佐賀新聞」に『蝶のアルバム』と題して、野外における蝶の生態写真を連載するようになった。それ以来、知人はもとより、初対面の方々からも、蝶の写真について話しかけられることが多い。蝶に興味を持っておられる人々が、少なくないことを知って嬉しく思っている。

私が少年の時から、蝶に興味を持ったことは今更言うまでもないが、やはり、その頃からカメラにも興味をもっていた。現在わが国ではどこの家でも、一、二台のカメラがある。しかし、私の少年時代には、カメラは高級品で、子供が扱える品物ではなかった。カメラに興味があるといっても、人物や風景撮影などには全く興味がなく、専ら動物の写真であった。本でみる蝶の写真には強く魅せられていた。多くのひとが経験することであるが、普通のレンズが付いたカメラで、蝶を撮影しても、小さくしか写らない。これでは迫力のある写真は撮れない。やはり、蝶の撮影は特殊撮影ということになる。

私の『蝶の生態撮影』の発端は、自分の職業と関連が深い。大学の脳神経外科教室で研鑽をしていた頃、よく手術中に病巣の写真を撮っていた。手術中の写真は、手術で露出している部位に、あまり近付かないで、病巣をいかにはっきり写すかに尽きる。その目的のために造られているカメラが、メディカル・ニコールである。試みに、メディカル・ニコールで蝶を撮影してみたが、このカメラでは実によく撮影できる。しかし、このカメラは高価な点を除いても、重いバッテリーを持ち歩かなければならない。また、いつもレンズを交換しなければならない。このようなわけで、野外における蝶の撮影には問題がある。そこで、いろいろ検討した結果、200ミリのマイクロニコールのレンズを購入した。このレンズであれば、装着するボディも簡単なニコンEM（現在は発売されていない）で十分である。それに、ストロボも乾電池で作動する安価な普通のものでよい。もちろん、この装置で、手術中の写真もよく撮れる。それ以来、ストロボはいくつか変えたが、このレンズとカメラを15年以上も愛用している。

私の撮影は、あくまで、野外で蝶の自然の姿を追うことである。したがって、飼育したものは対象外である。野外で撮影する場合、まず、絞りを決めて、蝶に近付き、適当なアングルを定めて、フォーカス（ピント）を合わせる。そしてシャッターを押すという一連の動作が必要である。蝶に近付くこ

とは必ずしも容易ではない。多くはこのステップで、シャッターチャンスを逃してしまう。近付くことができても、アングルが悪ければ変な写真になってしまう。

せっかく蝶に近付いたのに、足場が悪くて適当なアングルで撮影できない場合がある。フォーカス（ピント）は、レンズを通して眼で合わせる。わずかな差で、満足する鮮明な写真が得られないことがある。そのため、フォーカス（ピント）には非常に気をつかう。このとき時間をかけると蝶は逃げてしまう。今日では、自動焦点のカメラが多い。これらのカメラで蝶を撮影して、満足する鮮明な写真が得られるかは経験がないので分からない。撮影の成功は、蝶そのものにも関係する。たくさんの新鮮な個体がいる場合には、当然成功率が高くなる。うまく発生時に遭遇すれば幸運である。また、花や葉に止まることが多い蝶は撮影しやすい。

私の蝶の撮影は、芸術的なものではない。病態写真と同じく科学写真である。この観点で評価してほしい。さしあたりの私の目標は、南の国の蝶を撮影することである。先日、中米を訪問する機会があった。運の悪いことにそのときは1年中で、もっとも蝶の少ない乾期の終わりであったので、目的は達せられず残念であった。

蝶の生態撮影の写真集は何冊か発行されている。また、プロの方もいる。私はなにか独創的なものを持っていないかと現在模索中である。さらに、最新型の高級カメラで撮影してみたいとの夢をもっている。最新型の高級カメラを使えば、なにか、新しい分野が開けるのではないかと思うがどうであろうか。夢の実現する日が待たれてならない。

（佐賀の昆虫 No26より 1992年10月）

## 松 原 に

1947年（昭和22年）の3月の春休みだったと思う。当時、中学生の私は、熊本県八代市から普通列車に6時間ぐらい乗って福岡市にやってきた。戦争を終わって、まだ、やっと1年半を過ぎたばかりである。大空襲でやられた福岡市は、見渡す限りビルは破壊され、瓦礫の山であったのが印象に残っている。私が福岡に来た目的は、九州大学昆虫学教室を訪問することだった。戦争中から戦後にかけて、私は八代市でクロマダラタマムシが、自宅近くの<sup>ノボ</sup>覆にたくさんいるのを見つけていた。当時の図鑑には、クロマダラタマムシの分布地として、九州は載っていない。そこで、中学生の私はその年の冬に、九州大学昆虫学教室にクロマダラタマムシの分布の文献を見せて頂きたいと手紙を書いた。早速、安松京三先生から返事を頂いた。手紙の中に、寒い研究室なので暖かくなってから来るようにと書かれてあったことを記憶している。このようなわけで、春休みの福岡訪問となった。

当時は、まだ、九大は帝国大学であったと思う。箱崎の電車の停留場も、帝大前となっていた。農学部昆虫学教室は構内の西の端にある。私は正門から工学部、理学部の構内を通り抜けて、昆虫学教室まで歩いていった。歩道は舗装されてない所があり、砂地に松原であたように思う。昆虫学教室は木造の古い建物であった。安松京三先生にお会いして、クロマダラタマムシの文献を見せて頂いたはずであるが、そのことは全く覚えていない。その後の印象があまりにも強烈であったからであろう。

昼食の時間になり、研究室の食堂に案内して頂いた時、瘦身の方が部屋に入ってこられた。江崎悌三先生だ。昆虫の雑誌などで、何時も写真を拝見している世界的な昆虫学の<sup>泰斗</sup>泰斗が、今、眼の前におられる。その時、私は表現することができないほどの大きな感銘を受けた。安松先生は、<sup>白哲</sup>白哲の秀才という感じの方であったが、江崎先生は、色白ではなく、髪がものすごく多い方であった印象が残っている。安松先生は私を江崎先生に紹介して下さい。私は数人の研究者と共に、持参の弁当を食べた。食事中に、別の若い研究者が江崎先生に蝶の論文原稿を提出のため入ってこられた。その原稿の図をみて、意見を述べられた黒い背広の方がいた。その方が、白水 隆先生であった。私は白水先生に蝶のことを質問した。私がツマキチョウの属名を *Midea* といったところ、*Anthocharis* を使うべきだと教えて頂いたことを今でも覚

えている。

こうして、中学下学年の私は、わが国のトップレベルの昆虫学者と食事を共にしたわけである。この感激はその後、ずっと私に影響を与えた。学制改革により、中学から新制高校生になっても、私の憧れは、あの福岡の美しい九大構内の松原や昆虫学教室であった。大学進学を考える時期になって、私の夢は九大で学ぶことであった。他の大学を知らなかったこともあって、九大以外の大学は、私の頭の中になかった。少年の日の昆虫学教室訪問の感激が、苦しい受験勉強の強い支えとなった。幸いにして、私は高校卒業と同時に、九大に入ることができた。したがって、私は九大以外の大学を受験した経験はない。私は久留米の九大第二分校に入学した。そこでは、後年の昆虫学者としては、故日浦 勇君や森本 桂君（現在、九大農学部昆虫学教授）がおり、共に学んだ。動物学は、宮本正一先生の教えを受けた。宮本先生は非常に深い知識をもっておられた。大学の先生は、どうして、なんでも知っておられるのだろうかといつも尊敬していた。先生ご自身は、戦争中、南方で悪性マラリア（熱帯熱マラリア）に罹り、なんでも忘れるようになったと言っておられたが、そんな気配は毛頭なかった。

私が九大に入学しても、江崎先生には、お目にかかる機会はなく、一度だけ構内で、お姿を遠くから拝見したに過ぎない。先生は昭和32年（1957）年12月14日、肺癌でお亡くなりになった。先生が生前に、いかに多くの学者や昆虫愛好者から慕われていたのか、“江崎悌三著作集”（思索社、1984）に挿入された月報からも知ることができる。安松先生は私が卒業してから、「九大学術探検会」でお会いしたことがある。先生は、九大農学部昆虫学教授をご退官後、タイ国でご活躍であったが、故人になられた。白水先生は、ご承知のように、現在、わが国の蝶学をリードし続けておられる。思えば、少年の日に経験した昆虫学者との遭遇が、私の方向を定め人生を決定した。この運命を私は非常に幸せだと感じている。

（1993年4月 著者記す）

# 50音別索引

〔注 青文字は写真掲載ページ，黒文字は  
文章中に掲載されたページを示す。〕

## ア

- アオスジアゲハ……………12, 13, 15, 141, 208, 221  
アオタテハモドキ ……104, 105, 209, 222, 233  
アオバセセリ ……………146, 147  
アカシジミ ……………181  
アカタテハ ……………108, 109, 117, 139, 210  
アカマダラ ……………103  
アゲハチョウ……………15, 19, 20, 21, 27, 29, 37  
99, 153, 161, 165, 175  
アサギマダラ ……………82, 83  
アサマイチモンジ……………97  
アポロウスバシロチョウ ……………161  
アマミウラナミシジミ……………65

## イ

- イシガケチョウ……………97, 124, 125, 209  
イチモンジセセリ ……………154, 155  
イチモンジチョウ ……………96, 97

## ウ

- ウエスタン・タイガー・スオローテール ……165  
ウスイロオナガシジミ ……………183  
ウスイロコノマチョウ ……………141  
ウスキチョウ……………48, 209  
ウスコモンアサギマダラ ……………231

- ウスバキチョウ ……………161  
ウスバシロバチョウ ……………160, 161  
ウラキンシジミ ……………54, 55  
ウラギンシジミ ……………74, 75  
ウラナミアカシジミ ……………180, 181  
ウラナミシジミ ……………64, 65  
ウラナミシロチョウ ……………223  
ウラナミジャノメ ……………131  
ウラフチベニシジミ ……………222

## エ

- エゾシロチョウ ……………168, 169, 210  
エゾスジグロシロチョウ……………41, 211  
エゾヒメシロチョウ ……………171  
エゾミドリシジミ ……………185, 186, 187

## オ

- オオウラギンスジヒョウモン ……………90, 91  
オオカバマダラ ……………210, 215, 215, 218  
オオゴマダラ ……………208, 208  
オオミスジ……………99, 101, 189, 190, 191  
オオムラサキ ……………196, 197  
オオルリシジミ ……………70, 71  
オナガアゲハ ……………24, 25  
オナガシジミ ……………182, 183  
オナシアゲハ ……………220, 221, 229

## カ

- カバマダラ……………78, 79, 81  
カメハメハタテハ ……………109



カラスアゲハ .....34, 35, 36, 37, 207  
カワカミシロチョウ .....220

## キ

キアゲハ.....18, 19, 21, 210  
キシタアゲハ .....218, 222, 225, 226, 227  
キタテハ .....116, 117  
キチョウ.....27, 44, 45, 175, 207, 215  
キバネセセリ .....200, 201  
キベリアゲハ .....223  
キベリタテハ .....194, 195  
キマダラセセリ .....148, 149  
キマダラヒカゲ .....139  
キマダラルリツバメ .....221  
キリシマミドリシジミ .....56, 57  
ギフチョウ .....163  
ギンイチモンジセセリ .....202, 203  
ギンモンウスキチョウ.....49, 209

## ク

クジャクチョウ.....87, 192, 193, 195, 212  
クモガタヒョウモン .....84, 85  
クモツマキチョウ.....211, 213  
クロアゲハ .....25, 26, 27, 37, 209  
クロコノマチョウ .....140, 141  
クロコムラサキ .....122, 123  
クロセセリ .....156, 157  
クロツバメシジミ.....67  
クロヒカゲ .....136, 137  
クロヒカゲモドキ .....137

クロミドリシジミ.....57

## コ

コジャノメ .....135  
コチャバネセセリ .....150, 151  
コツバメ .....60, 61, 143  
コヒオドシ .....211, 212, 213  
コムスジ .....98, 99, 101, 191  
コムラサキ .....120, 121, 123  
ゴマダラチョウ .....128, 129

## サ

サカハチチョウ.....102, 103  
サツマシジミ .....72, 73  
サトキマダラヒカゲ .....138, 139

## シ

シータテハ .....116, 117, 212  
シジミチョウ .....131  
シルビアシジミ.....69  
シロオビアゲハ .....166, 167, 229, 230  
シロオビヒカゲ .....221  
シロミスジ .....207, 207, 209  
ジャイアント・スオローテール.....215, 216, 217  
ジャコウアゲハ.....22, 23, 25  
ジャノメタテハモドキ .....224  
ジャノメチョウ .....132, 133  
ジョウザンミドリシジミ .....184, 185

## ス

- スギタニルリシジミ……………71  
スジグロカバマダラ ……80, 81, 229, 230, 233  
スジグロシロチョウ ……40, 41, 169, 171, 177  
スジボソヤマキチョウ ……172, 173, 215  
スミナガシ ……126, 127

## タ

- タイガー・スオローテール ……164, 165, 215  
タイワンシロチョウ ……208, 209, 232  
タイワンツバメシジミ……………67  
タイワンフタオツバメ ……221  
タテハチョウ ……111  
タテハモドキ ……110, 111, 207, 208, 222, 230  
ダイミョウセセリ ……144, 145, 201

## チ

- チャバネセセリ ……152, 153  
チョウセンアカシジミ ……181

## ツ

- ツバメシジミ ……66, 67, 210  
ツマキチョウ……………42, 43, 99  
ツマグロヒョウモン……………13, 87, 92, 93, 95, 222  
ツマベニチョウ ……176, 177, 206, 207  
208, 209, 229, 230

## テ

- テングチョウ ……76, 77

## ト

- トラフシジミ……………58, 59, 97  
トラフタテハ ……221

## ナ

- ナガサキアゲハ ……28, 29, 113, 220, 222  
ナミアゲハ……………19, 20, 21, 208

## ハ

- ハマヤマトシジミ ……207, 208  
ハヤシミドリシジミ ……185

## ヒ

- ヒオドシチョウ ……114, 115, 210  
ヒカゲチョウ ……137  
ヒメアカタテハ ……106, 107, 210  
ヒメウラナミジャノメ ……130, 131  
ヒメキマダラセセリ ……149  
ヒメギフチョウ ……162, 163  
ヒメシロチョウ ……170, 171  
ヒメジャノメ ……134, 135

## フ

- フジミドリシジミ……………57

## ヘ

- ベニシジミ……………27, 62, 63, 155  
ベニモンアゲハ……………23  
ベニモンシジミ ……222

ベニモンシロチョウ .....178, 179, 220, 222  
ヘレナキシタアゲハ .....226

## ホ

ホシミスジ.....99, 100, 101

## マ

マサキウラナミジャノメ .....131

## ミ

ミカドアゲハ.....14, 15, 16, 221, 229  
ミスジチョウ.....99, 101, 188, 189, 191  
ミツボシフタオツバメ .....221  
ミドリシジミ .....185  
ミドリヒョウモン.....86, 87, 97  
ミノスキタアゲハ .....225, 226, 227, 228  
ミヤマカラスアゲハ .....36, 37  
ミヤマセセリ .....142, 143

## ム

ムモンアカシジミ .....181  
ムモンウスキチョウ.....49  
ムラサキシジミ .....50, 51  
ムラサキツバメ .....52, 53

## メ

メスアカムラサキ.....79, 118, 119, 208, 209  
メスグロヒョウモン .....88, 89

## モ

モンキアゲハ.....30, 31, 32  
モンキチョウ .....46, 47, 210  
モンシロチョウ.....19, 27, 38, 39, 41, 43, 99  
125, 155, 161, 165, 169, 171, 175, 177, 211, 212

## ヤ

ヤエヤマウラナミジャノメ .....131  
ヤマキチョウ .....173, 174, 175, 211, 212  
ヤマキマダラヒカゲ .....139  
ヤマトシジミ.....51, 68, 69, 230

## リ

リュウキュウアサギマダラ .....230  
リュウキュウウラナミジャノメ .....131  
リュウキュウミスジ.....99, 207

## ル

ルーミスジミ.....51  
ルリウラナミシジミ .....65  
ルリシジミ .....51, 69, 70, 71, 212  
ルリタテハ .....112, 113



## 著者略歴

- 1958年 九州大学医学部卒業  
1959年 インターン終了後、九大第一外科で研修  
1964年 米国ハワイ大学研究員  
1967年 九州労災病院脳神経外科部長  
1972年 岩手医科大学外科学助教授  
1974年 英国ケンブリッジ・アデンブルーク病院  
脳神経外科客員部長  
1980年 佐賀医科大学外科学助教授、脳神経外科科長  
1992年 佐賀県神埼郡三瀬村国民健康保険診療所長  
医学博士、脳神経外科専門医、救急医学指導医  
佐賀医科大学、岩手医科大学非常勤講師  
佐賀昆虫同好会会員
- 著書：頭部外傷治療の実際，医学書院，1972年  
救急医療の基本と実際，6巻（頭部外傷）  
情報開発研究所，1985年  
頭にくる虫のはなし，技報堂，1991年  
人体神経系寄生虫症，新興医学出版社，1991年  
その他，多数
- 趣味：テニス，スキー，蝶の野外撮影

## 佐賀の蝶

---

定価 2,700円（本体2,621円）  
平成5年（1993年）8月11日発行©  
著者 西村謙一  
発行所 佐賀新聞社  
〒840 佐賀市松原1丁目3-18  
☎0952-25-4828  
印刷 株式会社昭和堂印刷  
〒840 佐賀市神野西4丁目1-32  
☎0952-33-1221

---

許可なく転載・複製を禁じます。

# 佐賀の蝶

西村謙一著  
佐賀新聞社



ISBN4-88298-048-7 C0645 P2700E

定価2,700円  
(本体2,621円)